

大 友 府 内 4

～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～



2002. 3

大分市教育委員会



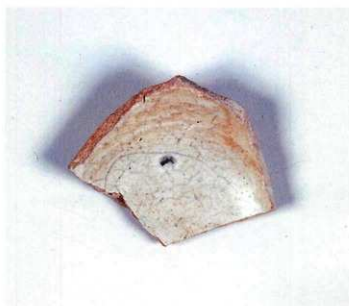
上段 調査区全景 下段 調査区遠景（北東から）



上段 染付碗 E群 (表) 下段 染付碗 E群 (裏)



上段 染付皿 E群 (表) 下段 染付皿 E群 (裏)



上段 華南三彩 中段 タイ産四耳壺 下段 ベトナム産白磁印花文碗

oo tomo fu nai
大 友 府 内 4

～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～

平成14年3月

大分市教育委員会

序 文

本書は、平成10年度に実施いたしました大分市錦町所在の中世大友府内町跡第4次調査の発掘調査報告書であります。

調査地は、戦国時代の府内復原想定図による上市町跡にあたり、16世紀を中心とした複数の火災の痕跡を示す火災処理土坑や、焼土の混じった整地層、井戸跡、集石遺構、東西方向にのびる道路状遺構等の検出とともに、府内町が被った戦災や災害そして復興の状況等がわかるなど町屋の景観を復元するための貴重な情報を得ることができました。中でも、中国や朝鮮、タイ、ベトナム等国际色豊かな輸入陶磁器類の出土は、大友氏が行った南蛮貿易によって賑わっていたことを物語るものであり、国際貿易都市府内の様子をより身近に感じさせるものとなりました。

つきましては本書が、学術研究に寄与するとともに、文化財保護思想の高揚に一助となれば幸甚に存じます。

最後に、調査から報告書刊行にあたり多大なるご配慮・ご協力を賜りました和広住研株式会社ならびに関係各位に対しまして心から感謝申し上げますとともに、ご指導頂きました大分県教育委員会文化課をはじめ諸先生方には深くお礼申し上げます。

平成14年3月

大分市教育委員会

教育長 御 査 義 則

例 言

1. 本書は、平成10年度、大分市錦町3丁目4349-2において、和広住研株式会社（代表取締役斉藤浩）の委託を受け実施したマンション建設工事に伴う中世大友府内町第4次の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、和広住研株式会社の協力のもと、大分市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成10年12月14日～平成11年3月31日の期間で実施し、遺物整理は、平成12年度、報告書作成は、平成13年度にそれぞれおこなった。
4. 調査における遺構実測・写真撮影は、讃岐和夫・奥村義貴・佐藤道文・河野史郎が行った。
5. 本書における遺物の実測・製図作業は、羽田裕子・藤原佳和子・河野が行った。
6. SD140より出土した土師器皿内容物の脂肪酸分析については、大分市教育委員会の委託を受け、バリノサーバイ株式会社が行った。
7. 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に指導・助言をいただいた。
小野正敏（国立歴史民俗博物館）、前川要（富山大学）、市村高男（高知大学）、大庭康時・森本朝子（福岡市教育委員会）、古賀信幸・増野晋次（山口市教育委員会）、鹿毛敏夫（大分県先哲史料館）、神田高士（臼杵市教育委員会）、坂本嘉弘・吉田寛（大分県教育委員会）木村幾多郎・中西武尚（大分市歴史資料館）、深町麻理・西村大・首藤直美・伊東みほ・武田真知子・内田順子（大分市教育委員会）
8. 本書の執筆は、第Ⅰ～Ⅲ、Ⅴ章を河野が、第Ⅳ章をバリノサーバイ株式会社がそれぞれ行った。
9. 本書の編集は、河野が行った。

凡 例

1. 本書に用いた遺構略号は、SK：土坑、SE：井戸、SD：溝、SF：道路状遺構、SX：不明遺構、Pit：小穴を表している。
2. 遺構の規模は、mを、遺物の法量はcmをそれぞれ用いている。
3. 遺構実測の基準及び方位は、国土座標（第Ⅱ座標系）を用いている。
4. 本書に用いた出土陶磁器の分類及び年代観は以下の文献による。
青 磁 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2
白 磁 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
染 付 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2
備前焼 乗岡 実 2000 「中世備前焼壺（壺）の編年案」『第2回中近世備前焼研究会資料』
" 2000 「備前焼鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』
唐津焼 盛 峰雄 2000 「陶器の編年 1. 碗・皿」『九州陶磁の編年』
5. 本書における時期表現は以下のとおりである。
「前半」「後半」とする表現は、100年（1世紀）を2分割する場合、以下、「前葉」「中葉」「後葉」とする表現は3分割、「第1四半」「第2四半」「第3四半」「第4四半」とする表現は4分割する場合にそれぞれ用いている。なお、特に時期が限定される場合には、「初頭」（01～15）「中頃」（50年前後）「末」（85～00）といった表現を必要に応じて使用する。
6. 今回遺跡名とした「中世大友府内町跡」は、大友館を含まない町屋部分を指し、「中世大友城下町跡」は、大友館跡を含んだ遺跡全体として、県の周知遺跡として登録されている。

目 次

I はじめに	1
1. 調査経過	1
2. 調査組織	1
II 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の立地と環境	3
2. 戦国都市大友府内	5
3. 上市町について	6
III 遺跡の調査	7
1. 基本順序及び調査の概要	7
2. 土坑 (SK)	9
3. 溝 (SD)	50
4. 井戸 (SE)	57
5. 道路状遺構 (SF)	62
6. 不明遺構 (SX)	66
7. 柱穴・小穴 (Pit)	72
8. 包含層出土遺物	75
IV 自然科学的調査	91
1. 中世大友府内町跡第4次調査より出土した土師器皿の脂肪酸分析	91
V まとめ	93
1. 出土土師器環・皿類及び瓦質土器雑器の分類と編年	93
2. 遺構の変遷	101
3. 出土遺物の組成変化について	105
4. 中世大友府内町第4次調査(上市町)総括	109
a. 中世大友府内町の変遷～その成立と変容～	109
b. 京都系土師器の諸問題～その導入と在地化～	111
c. 中世大友府内町における火災関連遺構出土遺物の位置づけ	113

挿 図 目 次

第1図 周辺主要遺跡分布図 (1/30,000)	4
第2図 「府内古園」(B類)写真	5
第3図 調査区位置図 (1/5,000)	6
第4図 調査区東壁基本順序概念図	7
第5図 全体遺構配置図 (1/150)	8
第6図 SK104出土遺物実測図 (1/3)	9
第7図 SK102出土遺物実測図 (1/3)	9
第8図 SK143出土遺物実測図 (1/3)	9

第 9 図	SK087出土遺物実測図 (1/3)	10
第 10 図	SK091出土遺物実測図 (1/3)	10
第 11 図	SK074出土遺物実測図 (1/3)	11
第 12 図	SK158出土遺物実測図 (1/3)	11
第 13 図	SK080出土遺物実測図 (1/3)	11
第 14 図	SK063出土遺物実測図 (1/3)	12
第 15 図	SK078出土遺物実測図 (1/3)	12
第 16 図	SK168出土遺物実測図 (1/3)	13
第 17 図	SK174出土遺物実測図 (1/3)	13
第 18 図	SK069出土遺物実測図 (1/3)	14
第 19 図	SK070出土遺物実測図 (1/3)	15
第 20 図	SK071出土遺物実測図 (1/3)	15
第 21 図	SK065遺構実測図 (1/40)	15
第 22 図	SK055出土遺物実測図 (1~11 1/3、12~18 1/4)	16
第 23 図	SK156出土遺物実測図 (1/3)	16
第 24 図	SK157遺構実測図 (1/40)	17
第 25 図	SK157出土遺物実測図 (1/3)	17
第 26 図	SK164出土遺物実測図 (1/3)	18
第 27 図	SK119出土遺物実測図 (1/30)	18
第 28 図	SK127出土遺物実測図 (1/3)	19
第 29 図	SK130出土遺物実測図 (1/3)	19
第 30 図	SK187出土遺物実測図 (1/3)	19
第 31 図	SK172出土遺物実測図 (1~4 1/3、5・6 1/4)	20
第 32 図	SK182出土遺物実測図 (1/3)	20
第 33 図	SK184出土遺物実測図 (1/3)	21
第 34 図	SK079出土遺物実測図 (1/3)	21
第 35 図	SK077出土遺物実測図 (1/3)	21
第 36 図	SK085出土遺物実測図 (1/3)	22
第 37 図	SK160遺構実測図 (1/60)	23
第 38 図	SK160出土遺物実測図 1 (1/3)	24
第 39 図	SK160出土遺物実測図 2 (1/4)	25
第 40 図	SK177出土遺物実測図 (1/3)	25
第 41 図	SK181遺構実測図 (1/40)	26
第 42 図	SK181出土遺物実測図 (1/3)	27
第 43 図	SK162出土遺物実測図 (1/3)	27
第 44 図	SK097出土遺物実測図 (1/3)	27
第 45 図	SK180出土遺物実測図 (1/3)	28
第 46 図	SK191出土遺物実測図 (1/3)	28
第 47 図	SK192出土遺物実測図 (1/3)	28
第 48 図	SK183出土遺物実測図 (1/3)	29

第 49 图	SK115出土文物实测图 (1/3)	29
第 50 图	SK101遗構实测图 (1/40)	30
第 51 图	SK101出土文物实测图 (1/4)	30
第 52 图	SK096出土文物实测图 (1/3)	30
第 53 图	SK173出土文物实测图 (1/3)	30
第 54 图	SK142遺構实测图 (1/40)	31
第 55 图	SK142出土文物实测图 (1/3)	31
第 56 图	SK042遺構实测图 (1/40)	32
第 57 图	SK042出土文物实测图 (1/3)	33
第 58 图	SK69遺構实测图 (1/40)	32
第 59 图	SK169出土文物实测图 1 (1/3)	33
第 60 图	SK169出土文物实测图 2 (1/40)	34
第 61 图	SK095遺構实测图 (1/40)	35
第 62 图	SK095出土文物实测图 1 (1/3)	35
第 63 图	SK095出土文物实测图 2 (1/4)	35
第 64 图	SK086遺構实测图 (1/40)	36
第 65 图	SK086出土文物实测图 (1/3)	37
第 66 图	SK189遺構实测图 (1/40)	38
第 67 图	SK189出土文物实测图 1 (1/3)	38
第 68 图	SK189出土文物实测图 2 (1/4)	39
第 69 图	SK052遺構实测图 (1/30)	40
第 70 图	SK052出土文物实测图 (1/3)	40
第 71 图	SK076遺構实测图 (1/30)	40
第 72 图	SK050遺構实测图 (1/30)	40
第 73 图	SK021遺構实测图 (1/40)	41
第 74 图	SK021出土文物实测图 (1/3)	41
第 75 图	SK025遺構实测图 (1/30)	41
第 76 图	SK025出土文物实测图 (1/3)	42
第 77 图	SK109遺構实测图 (1/30)	42
第 78 图	SK018遺構实测图 (1/30)	42
第 79 图	SK018出土文物实测图 (1/4)	43
第 80 图	SK031遺構实测图 (1/30)	43
第 81 图	SK065遺構实测图 (1/30)	43
第 82 图	SK065出土文物实测图 (1/3)	43
第 83 图	SK053遺構实测图 (1/30)	44
第 84 图	SK053出土文物实测图 (1/30)	44
第 85 图	SK048遺構实测图 (1/30)	44
第 86 图	SK048出土文物实测图 (1/3)	45
第 87 图	SK049遺構实测图 (1/30)	45
第 88 图	SK049出土文物实测图 (1/3)	45

第89圖	SK144遺構実測図 (1/30)	45
第90圖	SK106遺構実測図 (1/40)	45
第91圖	SK064遺構実測図 (1/60)	46
第92圖	SK064出土遺物実測図 1 (1/3)	47
第93圖	SK064出土遺物実測図 2 (1/4)	48
第94圖	SK064出土遺物実測図 3 (1/4)	49
第95圖	SK064出土遺物実測図 4 (1/3)	50
第96圖	SK145遺構実測図 (1/30)	50
第97圖	SK133遺構実測図 (1/30)	50
第98圖	SK148遺構実測図 (1/30)	50
第99圖	SD072出土遺物実測図 (1/3)	51
第100圖	SD040出土遺物実測図 (1/3)	51
第101圖	SD163出土遺物実測図 (1/3)	52
第102圖	SD140遺構実測図 (1/30)	52
第103圖	SD140出土遺物実測図 (1/30)	52
第104圖	SD155出土遺物実測図 1 (1/3)	54
第105圖	SD155出土遺物実測図 2 (1/3)	55
第106圖	SD155出土遺物実測図 3 (1/3)	56
第107圖	SD155出土遺物実測図 4 (1/3)	56
第108圖	SD176出土遺物実測図 (1/3)	57
第109圖	SE151遺構実測図 (1/60)	57
第110圖	SE151出土遺物実測図 (1/3)	58
第111圖	SE200遺構実測図 (1/60)	58
第112圖	SE200出土遺物実測図 (1/4)	59
第113圖	SE159遺構実測図 (1/60)	59
第114圖	SE159出土遺物実測図 (1/3)	60
第115圖	SE188遺構実測図 (1/60)	60
第116圖	SE175遺構実測図 (1/60)	60
第117圖	SE175出土遺物実測図 (1/3)	61
第118圖	SE195遺構実測図 (1/60)	61
第119圖	SE195出土遺物実測図 (1/3)	61
第120圖	SF190遺構全体図 (1/150)	63~64
第121圖	SF190東西土層断面図 (1/40)	63~64
第122圖	SF190南北・東西土層断面図 (1/40)	65
第123圖	SF190出土遺物実測図 (1/3)	63~64
第124圖	SX165遺物実測図 (1/60)	66
第125圖	SX165出土遺物実測図 1 (1/3)	67
第126圖	SX165出土遺物実測図 2 (1/3)	68
第127圖	SX165出土遺物実測図 3 (1/4)	69
第128圖	SX121遺構実測図 (1/60、1/30)	70

第129図	SX121出土遺物実測図 1 (1/3)	71
第130図	SX121出土遺物実測図 2 (1/4)	71
第131図	SX196出土遺物実測図 (1/3)	72
第132図	Pit1遺構実測図 (1/20)	72
第133図	Pit2遺構実測図 (1/20)	72
第134図	Pit3遺構実測図 (1/30)	73
第135図	Pit4遺構実測図 (1/30)	73
第136図	Pit5遺構実測図 (1/30)	73
第137図	Pit5出土遺物実測図 (1/3)	73
第138図	Pit6遺構実測図 (1/30)	73
第139図	Pit7遺構実測図 (1/30)	74
第140図	Pit7出土遺物実測図 (1/4)	74
第141図	Pit8遺構実測図 (1/30)	74
第142図	Pit8出土遺物実測図 (1 1/3、2 ~ 3 1/4)	75
第143図	Pit9出土遺物実測図 (1/3)	75
第144図	Pit061遺構実測図 (1/30)	76
第145図	Pit061出土遺物実測図 (1/3)	76
第146図	包含層出土遺物実測図 1 (1/3)	77
第147図	包含層出土遺物実測図 2 (1/3)	78
第148図	包含層出土遺物実測図 3 (1/3)	79
第149図	包含層出土遺物実測図 4 (1/3)	80
第150図	包含層出土遺物実測図 5 (1/3)	81
第151図	包含層出土遺物実測図 6 (1/3)	82
第152図	包含層出土遺物実測図 7 (1/3)	83
第153図	包含層出土遺物実測図 8 (1/3)	85
第154図	包含層出土遺物実測図 9 (1/3)	86
第155図	包含層出土遺物実測図10 (1/3)	87
第156図	包含層出土遺物実測図11 (1/3)	88
第157図	包含層出土遺物実測図12 (1/4)	89
第158図	包含層出土遺物実測図13 (1/4)	90
第159図	土師器皿の脂肪酸組成	92
第160図	A 類土師器及び変遷モデル	93
第161図	B 類土師器及び変遷モデル	93
第162図	C 類土師器及び変遷モデル	94
第163図	D 類土師器及び変遷モデル	94
第164図	E 類土師器及び変遷モデル	94
第165図	F 類土師器及び変遷モデル	95
第166図	G 類土師器	95
第167図	G 類土師器口縁部形態	95
第168図	G 類土師器及び変遷モデル	96

第169図	銅分類及び変遷モデル 1	97
第170図	銅分類及び変遷モデル 2	98
第171図	播鉢分類及び変遷モデル	99
第172図	出土遺物編年表	100
第173図	V期遺構配置図 (1/120)	101
第174図	IV期遺構配置図 (1/120)	102
第175図	III期遺構配置図 (1/120)	103
第176図	I・II期遺構配置図 (1/120)	104
第177図	SK064出土遺物組成表	106
第178図	SK160出土遺物組成表	107
第179図	SK181出土遺物組成表	109

写真図版目次

巻頭カラー図版 1

上段 調査区全景

下段 調査区遠景 (北東から)

巻頭カラー図版 2

上段 染付碗 E 群 (表)

下段 染付碗 E 群 (裏)

巻頭カラー図版 3

上段 染付皿 E 群 (表)

下段 染付皿 E 群 (裏)

巻頭カラー図版 4

上段 華南三彩

中段 タイ産四耳壺

下段 ベトナム産白磁印花文碗

写真図版 1

1. 中世大友府内町全景

写真図版 2

1. 調査区東壁土層断面 北部

2. 調査区東壁土層断面 中央

3. 調査区東壁土層断面 南部

写真図版 3

1. SK018全景

2. SK052全景

3. SK025全景

4. Pit 4 全景

5. Pit 6 全景

6. SK064全景

7. SK189全景

8. SK189土層断面

写真図版 4

1. SK086全景

2. SK086遺物出土状況

3. SK086周辺土層断面

4. SK132全景

5. SK042全景

6. SK042土層断面

	7. SK169全景	8. SD155周边土层断面
写真図版 5	1. SK160全景 3. SK181全景 5. Pit061遺物出土状況 7. SE151全景	2. SK160遺物出土状況 4. SK101全景 6. SD140遺物出土状況 8. SE188全景
写真図版 6	1. SE159全景 3. SE195全景 5. SF190北壁土层断面 1 7. SF190北壁土层断面 2	2. SE175全景 4. SX196全景 6. SF190西壁土层断面 8. SF190北壁土层断面 3
写真図版 7	1. SK142-3 3. SK142-4 5. SK064-48 7. SK061-48	2. SK142-3 4. SK064-38 6. SK064-45 8. SK064-17
写真図版 8	1. SK064-69 3. SK086-3 5. SK086-15 7. SK174-8	2. SK042-4 4. SK086-10 6. SK086-27 8. SK174-8
写真図版 9	1. SK095-2 3. SK095-6 5. SK169-8 7. SK169-13・14	2. SK095-5 4. SK080-3 6. SK169-8 8. SK079-7
写真図版10	1. SK160-5 3. SK160-7・9 5. SK160-28 7. SK160-39	2. SK160-6 4. SK160-30 6. SK160-28 8. SK160-40
写真図版11	1. SX165-52 3. SX165-55 5. SK155-15 7. SK157-13	2. SX165-52 4. SK189-10 6. SK155-17 8. SK157-13
写真図版12	1. SD155-43 3. SD155-32 5. SD155-72	2. SD155-22 4. SD155-32 6. SD155-72

	7. SD155-57	8. SD155-57
写真図版13	1. SK181出土遺物 3. SK181出土京都系土師器 5. Pit061-4 7. SD140-3	2. SK181出土糸切り土師器 4. Pit061-3 6. Pit061-5 8. 染付皿C群
写真図版14	1. SX196出土遺物 3. SX196-4 5. 染付碗E群 7. 包含層-160	2. SX196-1 4. 包含層-184・185 6. 包含層-157 8. 包含層-180
写真図版15	1. 包含層-188 3. 包含層-197 5. 包含層-209 7. 包含層-222	2. 包含層-188 4. 包含層-250 6. 包含層-209 8. 包含層-222
写真図版16	1. 包含層-252 3. 包含層-252 5. 包含層-252 7. 包含層-262	2. 包含層-244 4. 包含層-244 6. 包含層-254 8. 包含層-254
写真図版17	1. 包含層-265 3. 包含層-266 5. 包含層-272 7. 包含層-281	2. 包含層-265 4. 包含層-271 6. 包含層-280 8. 包含層-281

I はじめに

1. 調査経過

中世大友府内町は、戦国時代の府内町を描いた「府内古図」により、大分川の最下流左岸の南北2.2km、東西0.7km（現在の長浜町、金池町、錦町、顕徳町、元町一帯）にわたる広大な範囲が想定されていた。当該遺跡の本格的な発掘調査は、平成7年度より行われている大分駅の高架と駅南の区画整理事業を核とした大分駅周辺総合整備事業に伴うもので、区画整理の代替地として平成8年度に推定横小路町の調査（中世大友府内町1・2次調査）が行われた。この調査は、府内古図の信憑性を高めると同時に、中世府内町が予想以上に良好な状態で残されていることを確認するものであった。

一方、中世大友府内町周辺における開発は、大分駅周辺総合整備事業を境に加速度を増し、都市計画道路、国道10号線改良工事等の大規模な開発、これらを見越したマンション建設等の中小の開発等、大小様々な開発の計画が持ち上がり、中世大友府内町を取り巻く環境も激変することとなった。

このような状況下、和広住研株式会社（代表取締役 斎藤 浩）による錦町3丁目4349-2（上市町推定地）におけるマンション建設が計画され、平成9年11月6日付けで、大分市教育委員会に埋蔵文化財有無の照会がなされた。これを受け大分市教育委員会は、平成9年11月12日に埋蔵文化財の確認調査を行った。確認調査の結果、埋土に焼土を含む土坑・柱穴群及び道路状遺構が検出され、京都系土師器、青釉小皿、青磁皿、染付碗等の遺物出土も確認された。この確認調査の結果を受け、和広住研と大分市教育委員会は直ちに協議を行い平成10年度に本調査を行うことで合意した。

発掘調査は、平成10年12月8日に和広住研と大分市教育委員会との間で発掘調査業務委託契約が結ばれ、平成10年12月14日～翌3月31日まで行われた。遺物整理については、平成11年5月21日に契約を締結し、途中平成11年10月26日の履行期間の変更を主とした変更契約をほさんで、平成12年5月1日～翌3月31日まで、報告書の印刷は平成13年11月21日に契約を締結し、平成13年2月20日～翌3月31日まで行われた。

2. 調査組織

平成10年度（発掘調査）

調査主体	大分市教育委員会
調査責任者	清瀬 和弘（大分市教育委員会 教育長）
事務局	園田 裕彦（大分市教育委員会 生涯学習課 課長）
	秦 政博（大分市教育委員会 生涯学習課 参事）
	植木 正巳（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 室長）
	玉永 光洋（大分市教育委員会 生涯学習課 主幹）
	巖岐 和夫（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 次長）
調査員	福田 誠一（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 主査）
	巖岐 和夫（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 次長）
	後藤 典幸（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 指導主事）
	藤沢 敏夫（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 指導主事）
	塔鼻 光司（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 主任）
	坪根 伸也（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 主任）
	池邊千太郎（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 主任）
	塩地 潤一（大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 技師）

	高島 豊 (大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 技師)
	奥村 義貴 (大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 嘱託)
	佐藤 道文 (大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 嘱託)
	河野 史郎 (大分市教育委員会 生涯学習課文化財室 技師)
作 業 員	坂本 宏・曾我部伸子・長井菜穂子・石見繁夫・岩下磨須美・真部茂人・神田幸人 徳丸ヒナ子・牧野君子・柴田アイ子・後藤春美・森田秀夫・橘爪泰恵・後藤好美 白石 健・田中 貴・麻生咲子・江藤和子・大石妙子・広瀬敬子・田代秀子 綿丸るみ子・井上弘美・厚地美智代

平成12年度 (遺物整理)

調 査 主 体	大分市教育委員会
調査指導者	宇野 隆夫 (国際日本文化研究センター 教授)
調査責任者	清瀬 和弘 (大分市教育委員会 教育長)
事 務 局	桑 政博 (大分市教育委員会 文化財課 課長) 帯刀 修一 (大分市教育委員会 文化財課 課長補佐) 玉永 光洋 (大分市教育委員会 文化財課 主幹) 讃岐 和夫 (大分市教育委員会 文化財課 係長) 福田 誠一 (大分市教育委員会 文化財課 主査)
調 査 員	河野 史郎 (大分市教育委員会 文化財課 技師)
整理作業員	羽田 裕子 (大分市教育委員会 文化財課 臨時職員 ～H12年9月) 藤原佳和子 (大分市教育委員会 文化財課 臨時職員 H13年10～)

平成13年度 (報告書印刷)

調 査 主 体	大分市教育委員会
調査責任者	御倉 義則 (大分市教育委員会 教育長)
事 務 局	帯刀 修一 (大分市教育委員会 文化財課 課長) 玉永 光洋 (大分市教育委員会 文化財課 主幹) 讃岐 和夫 (大分市教育委員会 文化財課 課長補佐兼係長) 熊谷 一秋 (大分市教育委員会 文化財課 課長補佐兼係長)
調 査 員	河野 史郎 (大分市教育委員会 文化財課 技師)

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地と環境

別府湾の南部に面した大分平野は、丘陵地・台地・低地の三つの地形から構成され、その東部には大野川が北流し、中央部から西部にかけては大分川が東流後北流し、別府湾へと流れ出ている。中世大友府内町跡は、大分平野の中央部、大分川の河口付近に位置する。遺跡は、大分川左岸の標高4m～5mの河岸段丘上に立地しており、遺跡の南西方向には標高35mの高度をもつ上野丘陵が広がる。

当該地域における遺跡展開の歴史は古く、以下、大友氏が豊後に実入る中世前半期までの歴史的環境について、周辺主要遺跡の展開を中心に時代を追って概観する。

旧石器時代の遺跡については、現在のところ確認されていない。縄文時代の遺跡については、大分川を挟んだ対岸における下郡遺跡群や、大分川河川敷遺跡において後期～晩期の遺物の出土が知られる。

続く弥生時代については、現状で、方形周溝状遺構が検出された中期後半の環濠集落である上野遺跡群や弥生時代後期末の土器群が出土する自然流路が検出された上野丘西遺跡等、背後の上野丘陵を中心に確認されている。一方、大分川対岸地域においては、前期末～後期末にかけての大規模な集落が営まれた下郡遺跡群があげられる。遺跡群は、中期初頭段階の土器とともに出土したヤリガンナが存在や、中期後半～後期初めにかけの二重環濠をもつ集落、後期末の環濠集落の存在が知られており、弥生時代における家畜の存在（ブタ）の可能性を提示した下郡桑苗遺跡は、この遺跡群に含まれている。その他、対岸の河岸段丘上には、羽田遺跡、津守遺跡といった後期後半を主体とする遺跡群が連なり、さらに南には後期末の住居跡から出土した鏡片の出土で知られる守岡遺跡の営まれた独立丘陵が存在する。

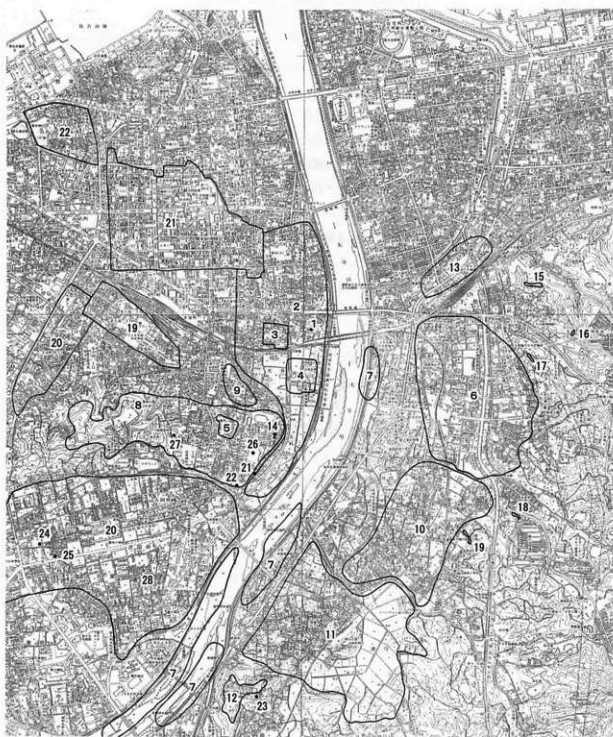
古墳時代になると、上野丘陵の東端部に全長50m、後円部径35mを測る前方後円墳の大臣塚古墳が現れる。棺内より卑卑の出土が伝えられ、5世紀代の築造と推定されている。加えて、同じく上野丘陵東部の上原館跡の調査において、5世紀初頭～前葉と考えられる不明型穴遺構が確認されており、上野丘陵上における当該時期の集落の存在が想定される。一方、弥生時代に隆盛した対岸部においては、下郡遺跡群における5世紀中頃の器台形の陶質土器が出土した住居跡の存在や、丘陵崖面に構築された下郡・長谷・滝尾百穴等の横穴墓群の存在が目される。なお、前方後円墳等、大型の墳丘を有する墳墓の存在は、今のところ認められていない。

古代においては、古国府遺跡群を中心とした古国府・羽屋の一带及び上野丘陵一帯が、豊後国の中枢となる国府の推定地となっている。前者については、古国府の地名が示すよう国府推定地第一の候補として、印輪社（現大國主社）を中心とした国衙・国府城が推定されていたが、永らくこの周辺において古代の遺跡の存在が確認されることは無かった。一方、後者の上野丘陵一帯は、現金剛宝戒寺の付近から出土した卑卑軒丸瓦の存在や、丘陵南東崖面の平安時代を中心に彫られたとされる元町、岩屋寺の磨崖仏群の存在に加え、古文書の研究から平安時代後期に高国府と呼ばれていたことが確認される有力な国府推定地の一つであった。

これらの二つの国府推定地に対して近年の発掘調査において注目すべき成果が報告されている。まず、古国府遺跡群については、推定域の西側、羽屋井戸・羽屋園遺跡から郡成立以前の群に関連する施設が想定される7世紀後半から8世紀初頭の大型掘立柱建物跡や倉庫群が検出されている。次に、上野丘陵については、その東端部において、国司館の可能性が指摘されている竜王畑遺跡、上原館跡における中世期の土層下層より出土する9世紀代を中心とした遺物群、基壇を伴う礎石建物跡や多量の瓦が確認されている丘陵西側、上野庵寺跡と仮称される現金剛宝戒寺に隣接する地区等、注目される調査が相次いでいる。このように、古国府、高国府共に国府の存在を裏付けるような成果があがってきており今後の動向が気になるところである。

対岸地区の古代遺跡としては、下郡遺跡群が挙げられる。下郡遺跡群は、その名の通り、古代大分郡衙の推定地であり、大型掘立柱建物及び土器焼成坑、腐蝕土坑、井戸等の遺構群が確認された「衙」推定地、道路状遺構、

墨書土器や硯、刀子等文字関連資料の出土と、古代の官衙に関する遺構群が展開している。



1	調査地点	2	中世大友府内町跡	3	大友館跡	4	万寿寺跡	5	上原館跡	6	下郡遺跡群
7	大分川河川敷遺跡	8	上野遺跡群	9	若宮八幡宮遺跡	10	羽田遺跡	11	津守遺跡	12	守岡遺跡
13	牧六分遺跡	14	大臣塚古墳	15	下郡横穴墓群	16	北下郡遺跡群	17	穴井前横穴墓群	18	長谷横穴墓群
19	滝尾百穴横穴墓群	20	古国府遺跡群	21	元町石仏	22	岩屋寺石仏	23	曲石仏	24	羽屋井戸遺跡
25	羽屋園遺跡	26	上野竜王堀遺跡	27	上野庵寺	28	古国府石明遺跡				

第1図 周辺主要遺跡分布図 (1/30,000)

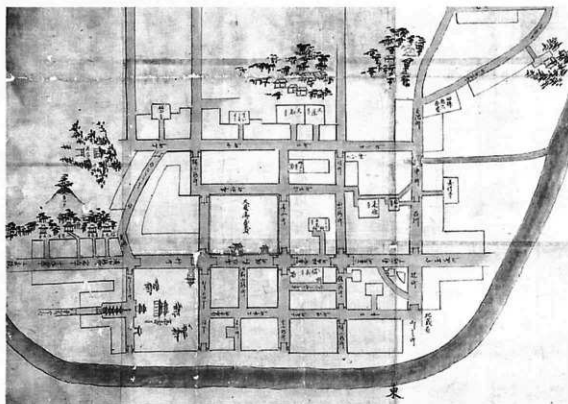
大友氏が豊後に入国する中世期であるが、その本拠となる守護所の詳細な場所については不明としながらも、古代以来の豊後国の中枢機能が存在した大分川下流左岸地域一帯であったとされている。大友氏は、入国以前に既存の都市機能に対する禁制（規制）を含む「新御成敗状」を制定しているが、この既存の都市機能こそが、中世「府中」であり、古代以来の国の中枢城（国府）に起因することは想像に易いことである。一方、これらの現象を遺跡の分布的に見てみると、現状で、古国府遺跡群でも字石明、字五丁・高近の調査において13世紀代を中心とした遺構群が確認されているのみであり、古代の豊後国府から戦国都市大友府内の間をつなぐ中世都市大友府中の世界を垣間見せる貴重な遺構群として注目される。

これに対して対岸においては、下郡遺跡群においてやはり中世前半期の遺構群が展開しているが、その分布及び密度は現状で、左岸域のものをしのいでおり、出土遺物においても畿内系とされる瓦器碗が出土する等、興味深い報告がなされている。

2. 戦国都市大友府内

こうして成立した中世都市大友「府中」は、戦国時代に至り「府内」と名を変え、戦国大名大友氏の経済的・政治的な中心となった。その繁栄ぶりは、当時の府内を訪れた宣教師の報告で、当時の人口が8000人とも8000戸ともいわれていることから窺い知ることができる。

この戦国都市大友府内の復元にあたっては、往時の様子を描いたとされる「府内古図」と、明治期の字図が基礎資料となっている。これらをもとに行われた絵図の現地比定作業において（『戦国時代府内復元想定図』）、大友府内町は、大分川下流左岸の自然堤防上一帯に形成されており、大友館を中心に3本ないし4本の南北道路と5本の東西道路によって方形に区画された南北2.2km、東西0.7kmにわたる広大な範囲に展開することがわかった。これら町を区画する道路の中でも、最も東側の万寿寺を起点とする南北道路については、他の南北道路と若干の主軸違いを見せているが、近年の発掘調査の成果によりこの主軸が14世紀後半から15世紀中頃までのやや古い段



第2図 「府内古図」(B類) 写真

階の町割り軸に起因するものではないかとの指摘もあり注目される。

この他、絵図及び字図による情報から、南北道路と東西道路によって区画された方形区画の中に短冊状の地割りが存在するいわゆる京都型の町割りであること、辻々に配された木戸、大友館よりも大きな区画を有する万寿寺、館の南には御蔵場（A、B類には記述ナシ）とかかれた大区画、数々の寺、ダイウス堂と記されたキリスト教会等の存在、が確認されている。更に絵図に記された「唐人町」に関しては、天正十六年の伊勢参宮帳にも記されており、住人として中国人らしき人物の名前も見えることから、府内の国際的な貿易都市としての一面も垣間見せている。

3. 上市町について

ここで調査区が設定された上市町について記す。上市町は、最も東側の万寿寺を起点とする南北道路に形成された両側町で、南は大友館の門推定地より延びる東西道路に、北は館北辺に沿って延びる東西道路をそれぞれ境界としている。絵図に記された町名では、北東に「今小路町」、北に「工座町」、北西に「名々小路町」、南西に「御所小路町」、南に「清忠寺町」、「横町」がある。

この上市町の住人として古文書に登場する「岩田屋与三兵衛入道」は、「計屋」を生業としていた。この計屋とは、府内の町で行われた商取引に際し使用される銀を天秤を使用し計量する商人であったといわれる。しかし、この岩田氏が登場する文書には、豊前の上毛、下毛郡から府内に訪れる商人に対し、まずこの計屋岩田氏のところに荷卸しするように指定している文面があることから、この計屋が、単なる計量だけでなく、荷卸しや、問丸的宿機能も有した府内町における商業活動の核となる位置づけをもっていたと言われている。



第3図 調査区位置図(1/5,000)

Ⅲ 遺跡の調査

1. 基本層序及び調査の概要

中世大友府内町跡第4次調査の調査地点は、「上市町」推定地の北西隅の一角にあたる。上市町は、万寿寺を起点とする南北道路の両側町として知られるが、調査区の東面はこの南北道路に面した間口より30m程中に入った位置となる。一方、調査区の北面には、大友館の北面に沿った東西道路が通っており調査区北面にこの道路遺構が含まれている。

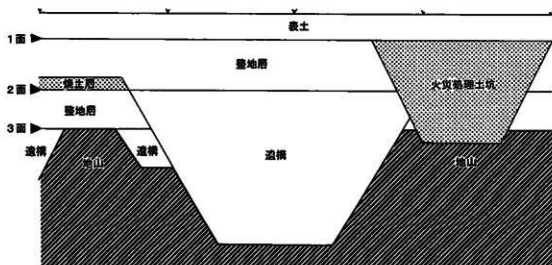
調査の結果、第一遺構面である近世以降の畝状遺構や、埋壘等からなる遺構面を始めとして、部分的な現象ではあるが、複数の遺構検出面が確認された。即ち、① 調査区東部～南部にかけての3つの遺構面（第4図）。② 調査区南部～西部～北部にかけての2つの遺構面である。このような状況にいたる原因としては、調査区北から南にかけて緩やかに落ちてゆく傾斜や、調査区中央部に存在する井戸や溝等の大型遺構を埋め戻した際に生じるくぼみに対する整地等が挙げられる。

次に、検出された遺構について、第1遺構面からは、火災処理と考えられる焼けた壁土が詰まった土坑や、焼けた石が詰まった土坑、井戸跡等が検出されており、火災の痕跡が著しい。特にSK064については焼けた石が大量に詰まった土坑で、東南アジア産の陶磁器や、備前の茶器の一群等注目される遺物が出土している。

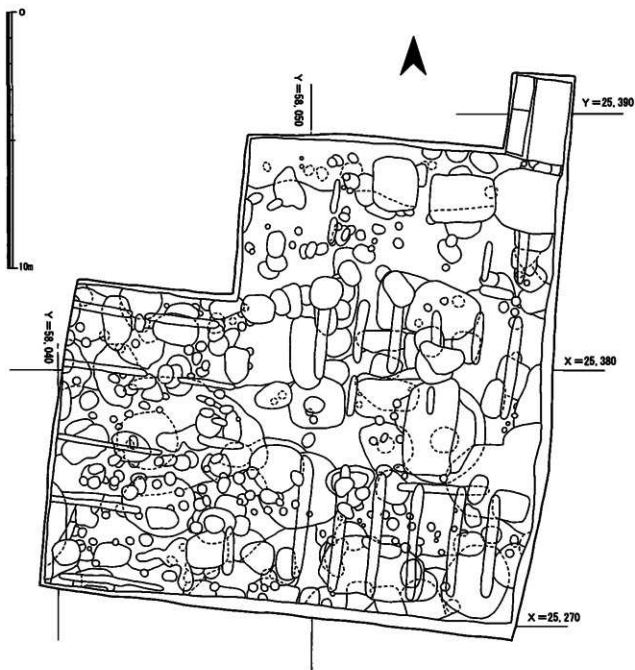
第2遺構面からは、焼土の入った土による整地層が調査区の北東部を中心に確認されており、1面同様火災の痕跡が認められる遺構面である。この遺構面から検出された遺構には、井戸跡、溝跡、土坑等があり、特にSK160については、その形態及び、周辺から出土する銚造関連遺物の存在から、最終的には廃棄土坑とされたこの土坑が当初、銚造に関連した遺構であったことが推定されている。

第3遺構面の遺構については、整地層を伴わない地山に直接掘り込まれたものも存在する。検出された遺構には、土坑、溝跡、井戸跡等がある。特に、京都系土師器導入期に関わる遺物が出土するSK101や、15世紀後葉に遡るSE175、195等の遺構が注目される。

この他、調査区北面で検出された道路遺構については、サブトレントによる断面観察等から掘り込み地業を伴う道路で、複数面にわたる路面を確認している。



第4図 調査区東壁基本層序概念図



第5図 全体造構配置図(1/150)

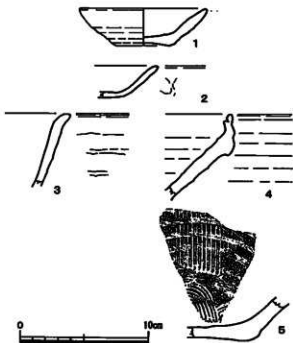
2. 土坑 (SK)

SK104

SK104は、E-2グリッドで検出される。長軸1.0m、短軸0.65m、深さ0.35mを測る平面長円形を呈する小土坑である。出土遺物には、土師器環、瓦質土器鍋、備前焼摺鉢がある。

出土遺物 (第6図)

1は、底部糸切り離しの土師器環である。法量は復元で、口径9.7cm、器高2.9cm、底径4.0cmを測る。上げ底風の底部、体部にはクロコ成形の痕跡と見られる段を有する。2は、京都系土師器皿である。口縁端部に向かって肥厚する。3は、瓦質土器鍋である。外面に粗い磨きが施され口縁部は外反する。4、5は、備前焼摺鉢である。4は、口縁部、5は底部に近い破片であるが、両者ともに乗間編年の近世1期bにあたる。



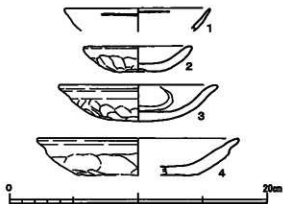
第6図 SK104出土遺物実測図(1/3)

SK102

SK102は、F-2グリッドで検出される。長軸0.75m、深さ0.2mを測る、西部を攪乱遺構に切られその全容は不明であるが、平面長円形を呈する小土坑である。出土遺物には、土師器皿、染付皿がある。

出土遺物 (第7図)

1は、小野分類皿E群の染付皿である。復元口径11.2cmを測る。2～4は京都系土師器皿である。2は、口径8.2cm、器高2.0cmを測る。内面「の」字ナデを施す。3は、小さく外反する口縁部で、復元口径12.2cm、器高2.9cmを測る。内面「2」字ナデが施される。4は、復元口径15.5cm、器高3.9cmを測る。つまみ上げ状の口縁部である。



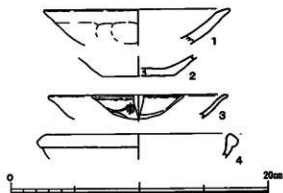
第7図 SK102出土遺物実測図(1/3)

SK143

SK143は、G-2グリッドで検出される。長軸1.35m、深さ0.55mを測る小土坑で、北側半分を攪乱遺構によって切られており、その全容は不明である。出土遺物には土師器皿、環、染付皿、不明焼締陶器鉢がある。

出土遺物 (第8図)

1は、京都系土師器皿である。短く外反する口縁部で、復元口径14.4cmを測る。2は、底部糸切り離しの土師器環で、復元底径5.8cmを測る。3は、小野分類皿B-1群の染付皿である。復元口径13.8cmを測る。4は、不明焼締陶器鉢である。復元口径14.4cm、近年中国南部産との指摘がなされている一群に類似する。



第8図 SK143出土遺物実測図(1/3)

SK087

SK087は、C-3グリッドで検出される。その西半部は調査区外となるが、径約1.2m、深さ0.4mを測る平面円形の土坑と考えられる。切り合いで、SK091より新しく位置づけられる。出土遺物には備前焼壺がある。

出土遺物（第9図）

1は、備前焼壺である。復元口径8.0cm、その口縁部形態から壺がつくものと考えられ、茶器が想定される遺物である。



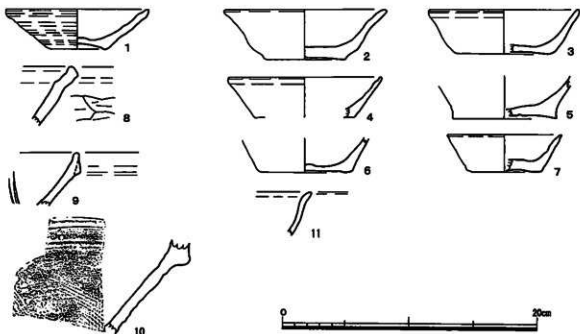
第9図 SK087出土遺物実測図(1/3)

SK091

SK091は、C-3グリッドで検出される。径約2.0m、深さ0.4mを測る平面円形を呈する土坑で、その切り合いから、SK087、074より古く、SK096より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器杯、瓦質土器鍋、播鉢、備前焼播鉢、青磁碗があるが、この中にはSK096の遺物を掘りあげたものも含まれている。

出土遺物（第10図）

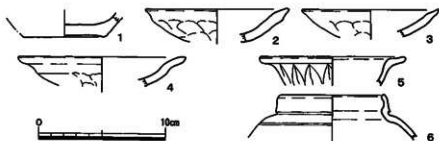
1～6は、土師器杯である。1は、復元口径11.0cm、器高3.1cm、底径4.2cmを測る。底部糸切り離しの土師器で、上げ底風の底部、体部にはロクロ成形の痕跡と見られる段を有する。2～6は、底部糸切り離しの土師器で、杯aと杯bの中間形態を示す杯である。2は、復元口径12.3cm、器高3.8cm、底径6.3cmを測る。3は、復元口径11.5cm、器高3.4cm、底径7.3cmを測る。4は、復元口径12.0cm、器高3.1cm、底径7.8cmを測る。5は、復元口径8.2cmを測る。6は、復元口径7.4cmを測る。7は、土師器小皿である。底部糸切り離しの土師器で、小皿aと小皿bの中間形態を示す小皿である。復元口径8.8cm、器高2.9cm、底径6.0cmを測る。8は、瓦質土器鍋である。玉縁状に肥厚した口縁部、体部のへら削り特徴とする。9は、瓦質土器播鉢である。玉縁状に肥厚した口縁部、体部外面のへら削り特徴とし、内面に播目目が施される。10は、備前焼播鉢である。放射状の播目目に斜め方向の播目目が付加された乗岡編年近世1期bの播鉢である。11は、青磁碗である。上田分類の碗D類にあたる。特にこれらの遺物について、2～7、11といった遺物群については古く、SK096に帰属する遺物が混入したものと考えられる。



第10図 SK091出土遺物実測図(1/3)

SK074

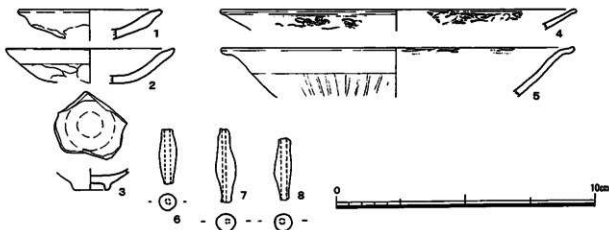
SK074は、C-3グリッドで検出される。長軸2.13m、短軸1.15m、深さ0.45mを測る平面長円形を呈する土坑で、その切り合いから、SK085、086、091より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器環、皿、青磁皿、不明焼締陶器壺がある。



第11図 SK074出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第11図)

1は、土師器環である。底部系切り離しの土師器で、復元底径6.0cmを測る。2～4は、京都系土師器皿である。2、3は、つまみ上げ状の口縁部で、口径は復元で、2が、11.0cm、3が、10.4cmをそれぞれ測る。4は、大きく外反する口縁部で、口径は復元で、12.8cmを測る。5は、太宰府分類における龍泉窯系青磁皿Ⅲ類にあたる。口径は復元で、11.0cmを測る。6は、不明焼締陶器壺である。復元口径8.0cm、近年中国南部産との指摘がなされている一群に類似する。



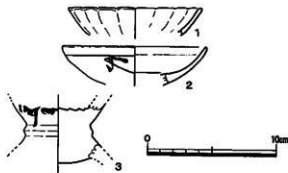
第12図 SK158出土遺物実測図(1/3)

SK158

SK158は、E-3グリッドで検出される。長軸2.85m、短軸1.3m、深さ0.4mを測る平面長円形を呈する土坑で、その切り合いから、S095、118より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器皿、白磁小環、染付皿、土鍾がある。

出土遺物(第12図)

1、2は、京都系土師器皿である。ともにつまみ上げ状の口縁部で、復元口径は、1が11.2cm、2が13.2cmをそれぞれ測る。3は、見込部を蛇の目軸刺ぎする白磁小環である。高台径は、2.8cmを測る。4、5は、染付皿である。4は、小野分類のⅢF群に当たり、復元口径は、27.6cmを測る。5は、澁州窯系の染付皿で、復元口径27.4cmを測る。6～8は土師質焼成の土鍾である。



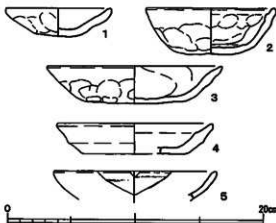
第13図 SK080出土遺物実測図(1/3)

SK080

SK080は、D-4グリッドで検出される。長軸0.63m、短軸0.2m、深さ0.2mを測る平面長円形の小土坑である。出土遺物には、白磁皿、染付皿、壺がある。

出土遺物（第13図）

1は、森田分類E-4群にあたる白磁皿である。復元口径10.0cmを測る。2は小野分類の皿C群にあたる皿である。復元口径は、11.0cmを測る。3は、染付壺である。その器形、胎土、焼成具合から漳州窯系の台付双耳壺と考えられる。



第14図 SK063出土遺物実測図(1/3)

SK063

SK063は、D-4グリッドで検出される。径約0.55cm、深さ0.3mを測る平面円形の小土坑である。出土遺物には、土師器皿、坏、染付皿がある。

出土遺物（第14図）

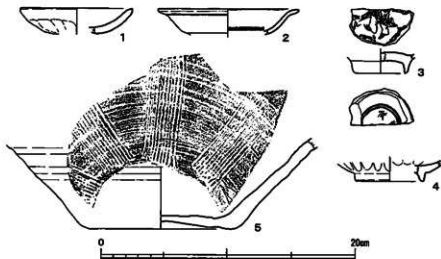
1～3は京都系土師器皿である。1は、口径8.2cm、器高2.2cmを測る。2は、つまみ上げ状の口縁部に、器高が高く碗の形態を示すもので、口径10.0cm、器高3.5cmを測る。内面には「の」字ナデが施される。3は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径13.6cm、器高2.9cmを測る。内面「2」字ナデを施す。4は、底部糸切り雕しの土師器坏で、復元口径12.0cm、器高2.3cm、底径8.0cmを測る。その特徴的な口縁部形態は、京都系土師器のつまみ上げ状の口縁部の影響のものであろうか。

SK078

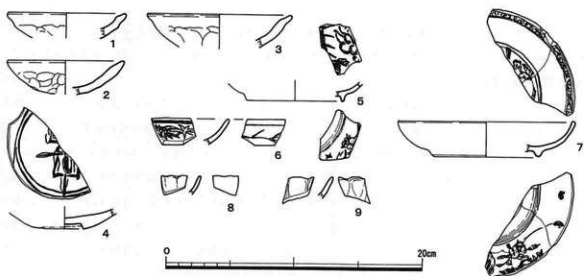
SK078は、D-4グリッドで検出される。長軸0.52m、短軸0.45m、深さ0.15mの平面楕円形を呈する小土坑である。出土遺物には、土師器皿、染付皿、碗、皿、備前焼擂鉢がある。

出土遺物（第15図）

1は京都系土師器皿である。復元口径8.8cmを測る。2は、漳州窯系染付皿である。復元口径11.0cm、端反りの口縁部である。3は、染付碗で、小野分類の碗E群にあたる。復元高台径は、4.0cmを測り、高台内面には「萬（福）攸（同）」銘が入る。4は、漳州窯系染付皿である。復元高台径は、5.0cmを測る。5は、備前焼擂鉢である。復元底径11.4cm、内面に放射状の擂目が入る栗岡分類の中世6期にあたる擂鉢である。



第15図 SK078出土遺物実測図(1/3)



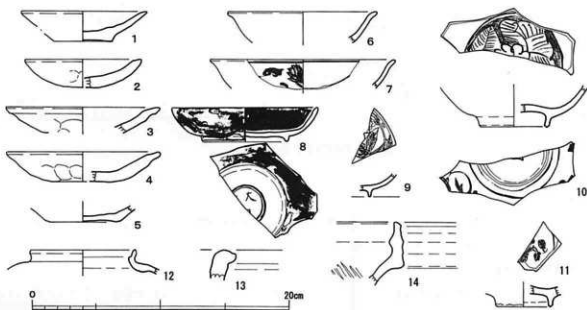
第16図 SK168出土遺物実測図(1/3)

SK168

SK168は、E-5 グリッドで検出される。SK064の下層から検出されており、その全容は不明であるが、その切り合いからSK064より古く、SK174より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器皿、染付皿、白磁皿、青磁皿がある。

出土遺物(第16図)

1～3は、京都系土師器皿である。1は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径9.0cmを測る。2は、素口縁で、復元口径9.0cmを測る。3は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径11.2cmを測る。4～7は染付皿である。4は、小野分類の皿C群にあたり、復元高台径は、3.0cmを測る。5～7は小野分類の皿E群に当たる。5は、復元高台径7.4cm、7は、復元口径13.6cm、器高2.8cm、高台径8.0cmを測る。8は、白磁皿で、森田分類のE-4群、9は青磁皿で、白磁と同じ菊皿となる景德鎮系の青磁である。



第17図 SK174出土遺物実測図(1/3)

SK174

SK174は、E-5 グリッドで検出される。径約1.0m、深さ0.8mの円形を呈する土坑で、その切り合いから、SK064、168より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器小皿、皿、坏、染付皿、碗、備前焼がある。

出土遺物 (第17図)

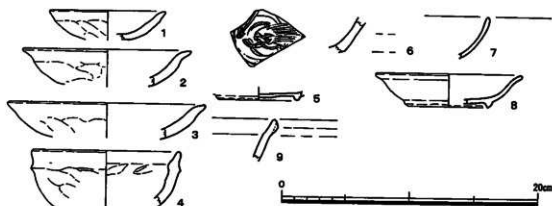
1は、底部糸切り離しの土師器小皿である。復元口径9.9cm、器高2.3cm、底径4.4cmを測る。2～4は京都系土師器皿である。2は紫口縁で、復元口径9.0cm、器高2.2cmを測る。3は、小さく外反する口縁部で、復元口径12.0cmを測る。4は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径12.0cm、器高2.3cmを測る。5は糸切り土師器である。6は、森田分類E-2群の白磁皿である。復元口径は、11.4cmを測る。7～9は、染付皿である。7は、小野分類皿B-1群にあたり、復元口径14.2cmを測る。8、9は、小野分類皿E群にあたる。特に8については、高台内面を除く全面に褐色の釉が施され、高台内面には、「大明年(造)」銘が入る。10、11は、染付碗である。共に小野分類碗E群にあたり、10は復元高台径5.0cm、11は、同じく4.0cmを測る。12～14は備前焼である。12は、その形態から蓋付の壺と考えられ、復元口径8.0cmを測る。13は水指、14は播鉢である。

SK069

SK069は、G-5 グリッドで検出される。長軸1.5m、短軸1.25m、深さ0.38mを測る平面隅丸長方形を呈する土坑である。出土遺物には、土師器皿、染付皿、天目碗、青磁碗、白磁皿、瓦質土器鍋がある。

出土遺物 (第17図)

1～4は京都系土師器皿である。1～3は、短く外反する口縁部で、復元口径は、1で、9.0cm、2で、13.0cm、3で、15.2cmをそれぞれ測る。4は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径11.2cmを測る。器高が高く碗形態となる一群に含まれる。5は、染付皿である。小野分類B-1群に当たり、復元高台径6.2cmを測る。6は、中国天目碗である。7は、青磁碗である。8は白磁皿である。森田分類E-2群に当たる皿で、復元口径11.0cm、器高2.6cm、高台径6.0cmを測る。9は瓦質土器鍋である。口縁部は玉縁状を呈する。



第18図 SK069出土遺物実測図(1/3)

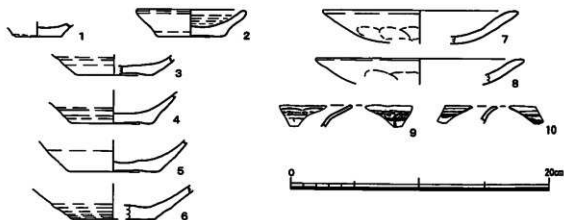
SK070

SK070は、D-5 グリッドで検出される。その切り合いから全容は不明であるが、S042、055、066、067よりも古く、S094、097より新しく位置づけられる。

出土遺物 (第19図)

1、2は、底部糸切り離しの土師器小皿である。1は、底径3.8cmを測り、2は、内面にロクロ成形時の段を残す。復元口径9.0cm、器高2.1cm、底径6.0cmを測る。3～6は、底部糸切り離しの土師器坏である。底径は復元で、3は5.8cm、4は6.3cm、5は6.8cm、6は6.4cmをそれぞれ測る。7、8は、京都系土師器皿である。ともに

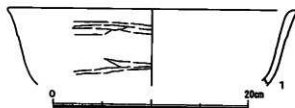
口縁部に向かい肥厚するもので、復元口径は、7で、14.8cm、8で、15.8cmを測る。9は、染付皿である。口縁部が斜めに折れ、端部は輪花状を呈する。10は、色絵皿である。外反する口縁部に赤色で、絵付けされる。



第19図 SK070出土遺物実測図(1/3)

SK071

SK071は、D-5グリッドで検出される長軸1.2m、深さ0.3mを測る平面楕円形を呈する土坑である。その切り合いから、S055、066より古く位置づけられる。出土遺物には、瓦質土器鍋がある。



第20図 SK071出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第20図)

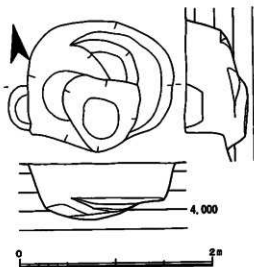
1は、瓦質土器鍋である。外面に粗い磨きが施され、口縁部は短く外反する。復元口径は29.8cmを測る。

SK065(第21図)

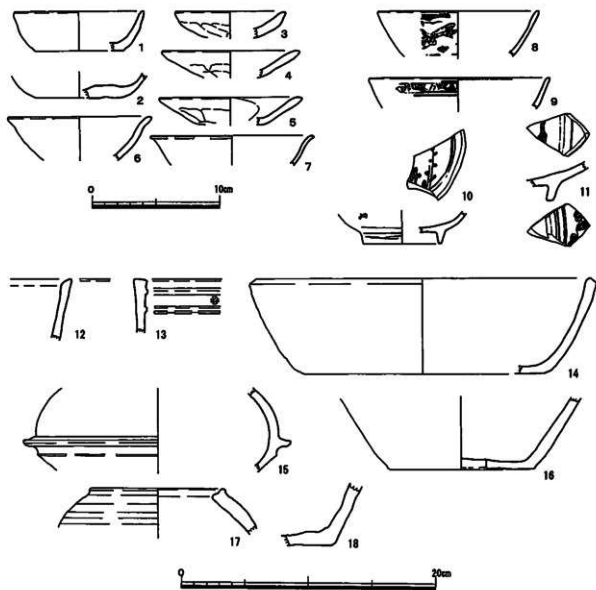
SK065は、D-5グリッドで検出される。長軸1.5m、短軸1.4m、深さ0.6mの平面楕円形を呈する土坑である。その切り合いからSK042、044より古く、S071、066より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器杯、皿、白磁小杯、皿、染付碗、皿、瓦質土器鍋、火鉢、茶釜、備前焼甕、水指がある。

出土遺物(第22図)

1、2は底部糸切り雕しの土師器杯である。共に杯aと杯bの中間形態を示すもので、1は復元口径9.8cm、器高3.1cm、底径6.8cmを測り、2は復元底径6.0cmを測る。3～5は京都系土師器皿である。3は、つまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径8.5cmを測る。4、5は共に口縁部に向かい肥厚するもので、復元口径は、4で、10.6cm、5で、11.0cmを測る。6は、白磁小杯で、復元口径11.0cmを測る。7は、森田分類E-2群の白磁皿で、復元口径12.9cmを測る。8～10は染付碗である。8は、小野分類の碗E群で、復元口径は、12.3cmを測る。9は、小野分類の碗C群で、復元口径13.8cmを測る。10は、蓮子碗と鯉頭碗の中間を示すもので、復元底径6.0cmを測る。11は、染付皿である。その高台片から大型の皿が想定される。



第21図 SK065遺物実測図(1/40)

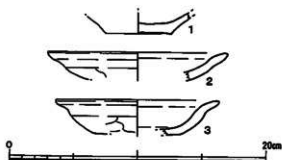


第22図 SK055出土遺物実測図(1~11 1/3、12~18 1/4)

11~16は瓦質土器である。12は、外面に粗い磨きが施され、口縁部は短く外反する。13は、火鉢である口縁部下の2条の突帯の間に花文がスタンプされる。14も火鉢であるが、その形態から茶道具の風炉と考えられる。復元口径は、35.0cmを測る。15は、茶釜である。胴部の最大径部分に鐙が付き、その下位には煤が付着する。16は鉢である。底部の中央に1次穿孔が施されていることから植木鉢と推定される。復元底径15.0cmを測る。17、18は、備前焼である。17は水指で、その口縁部形態から蓋付のものと考えられる。復元口径は、13.8cmを測る。18は甕の底部である。

SK156

SK156は、C-5グリッドで検出される。その切り合い状況から全容は不明であるが、SD040、SX013、SK062より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器環、皿がある。



第23図 SK156出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第23図）

1は、底部糸切り難しの土師器環である。復元底径5.0cmを測る。2、3は、京都系土師器皿である。共に大きく外反する口縁部で、復元口径は、2が11.8cm、3が14.0cmをそれぞれ測る。

SK157（第24図）

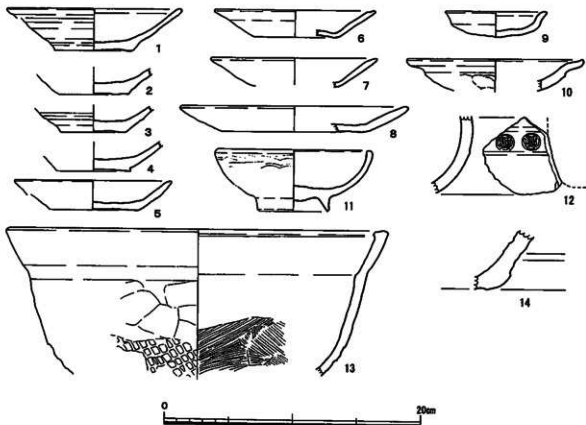
SK157は、C-5グリッドで検出される。長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る平面楕円形の土坑である。出土遺物には、土師器環、皿、青磁碗、瓦質土器火鉢、鍋、備前焼播鉢がある。

出土遺物（第25図）

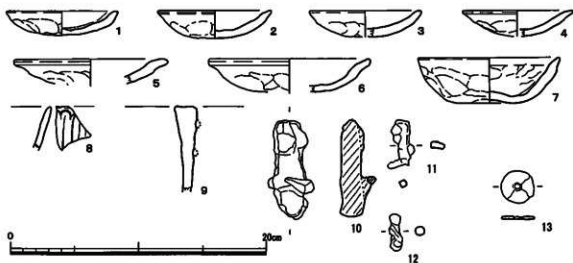
1～5は、底部糸切り難しの土師器である。1は、復元口径13.6cm、器高3.3cm、底径5.9cmを測る。2は、底径5.4cm、3は、底径5.0cm、4は、底径5.7cmを測る。5は、やや扁平な器形を呈し、復元口径12.2cm、器高2.3cm、底径6.8cmを測る。6～10は、京都系土師器である。6～8は、口縁部にむかって肥厚するもので、6が、復元口径12.6cm、器高2.2cmを測り、7が復元口径13.0cm、8が、復元口径17.8cm、器高2.1cmを測る。9、10は、大きく外反する口縁部のもので、9は口径7.6cm、器高2.0cmを測り、10は、復元口径13.5cmを測る。11は、青磁碗である。上田分類のC-Ⅲ類で、便化した波状の雷文帯が施される。復元口径11.4cm、器高4.8cm、高台径5.4cmを測る。12は瓦質土器火鉢である。13は、瓦質土器鍋である。外面に叩き痕跡を残す防長系の鍋で、復元口径は、29.0cmを測る。26は、備前焼播鉢である。



第24図 SK157遺構実測図 (1/40)



第25図 SK157出土遺物実測図 (1/3)



第26図 SK164出土遺物実測図(1/3)

SK164

SK164は、E-5 グリッドで検出される。長軸1.5m、短軸1.4m、深さ0.4mを測る平面隅丸方形を呈する土坑である。出土遺物には、土師器皿、青磁碗、瓦質土器火鉢、鉄製品、銅銭がある。

出土遺物 (第26図)

1～7は、京都系土師器皿である。1は、素口縁を呈し、内面に「の」字ナデが施される。口径8.6cm、器高1.9cmを測る。2は、つまみ上げ状の口縁部を呈し、口径8.8cm、器高2.2cmを測る。3は、素口縁を呈し、復元口径8.8cmを測る。4は、つまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径8.8cmを測る。8は、青磁碗である。細描蓮弁文が施される上田分類B-IV類碗である。9は、口縁部下に2条の突帯を巡らす瓦質土器火鉢である。10～12は不明鉄製品である。13は、銅銭である。

SK119

SK119は、F-3 グリッドで検出される。長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.3mを測る平面楕円形の土坑である。出土遺物には、土師器杯、皿、白磁皿、備前焼播鉢がある。

出土遺物 (第27図)

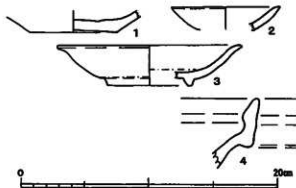
1は、底部糸切り離しの土師器杯である。復元底径は、6.8cmを測る。2は、京都系土師器皿である。復元口径は、8.4cmを測る。3は、森田分類E-2群にあたる白磁皿である。底部及び見込み部は露胎となり、復元口径14.4cm、器高3.2cm、高台径6.6cmを測る。4は、備前焼播鉢である。栗岡編年の近世1期に当たる。

SK127

SK127は、E-3 グリッドで検出される。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る平面長円形の土坑である。その切り合いからSK129より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器皿、杯、染付皿がある。

出土遺物 (第28図)

1は、京都系土師器皿である。口縁部端部に向かい肥厚する口縁部を呈し、復元口径13.8cm、器高2.0cmを測る。2、3は、底部糸切り離しの土師器杯である。



第27図 SK119出土遺物実測図(1/30)

ある。2は、内面にロクロ成型時に生じた工具による段を残すもので、復元口径14.8cm、器高3.0cm、底径7.6cmを測る。3は、復元口径16.2cm、器高3.4cm、底径9.4cmを測る。4は、染付皿で、復元口径11.8cmを測る。小野分類皿C群に当たる。

SK130

SK130は、E-3グリッドで検出される。長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る平面長円形を呈する土坑である。その切り合いからSK129より古く、SK186より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器皿、瓦質土器鉢がある。

出土遺物（第29図）

1、2は、京都系土師器皿である。1は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径8.6cm、器高2.2cmを測る。2は、大きく外反する口縁部で、口径10.6cm、器高2.2cmを測る。内面には「2」字ナデが施される。3は、瓦質土器鉢である。内面にハケ目が施される。

SK187

SK187は、E-3グリッドで検出される。切り合いによりその詳細は不明であるが、その切り合いから、SK158、SE159より古く位置づけられる。出土遺物には、瓦質土器火鉢、不明瓦質土器がある。

出土遺物（第30図）

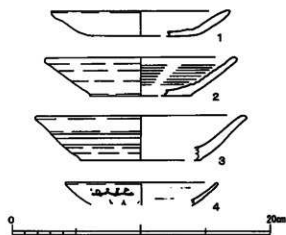
1は、瓦質土器火鉢である。内面に突出する口縁部を呈し、口縁部外面には2条の沈線とその間にスタンプ文様が施される。2は、不明瓦質土器である。

SK172

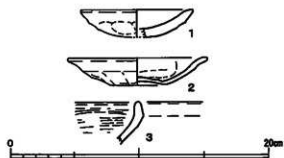
SK172は、E-6グリッドで検出される。南半部は調査区外となるが、径約1.8mの円形を呈する土坑と考えられる。その切り合いからSK178より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器杯、皿、染付碗、備前焼がある。

出土遺物（第31図）

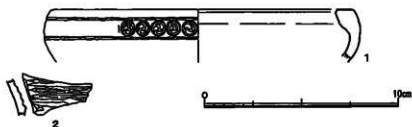
1、2は、底部糸切り土師器杯である。1は、復元口径8.4cm、器高1.8cm、底径5.2cmを測り、2は、底径6.5cmを測る。4は、小野分類の碗E群にあたる染付碗で、復元口径12.0cmを測る。5は、備前焼鉢である。復元口径36.0cm、乗岡編年の中世6期～近世1期に当たる。6は、備前焼甕である。



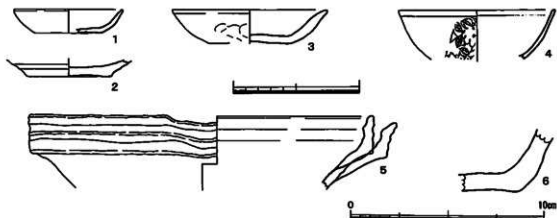
第28図 SK127出土遺物実測図(1/3)



第29図 SK130出土遺物実測図(1/3)



第30図 SK187出土遺物実測図(1/3)



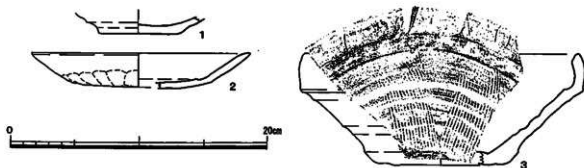
第31図 SK172出土遺物実測図(1~4 1/3、5・6 1/4)

SK182

SK182は、F-3グリッドで検出される。径約1.1m、深さ0.3mを測る平面円形を呈する土坑である。その切り合いから、S184、189より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器杯、皿、備前焼擂鉢がある。

出土遺物 (第32図)

1は、底部糸切り土師器杯である。底径は6.0cmを測る。2は、京都系土師器皿である。口縁部に向かい肥厚するもので、復元口径17.4cm、器高2.7cmを測る。3は、備前焼擂鉢である。放射線目が施される乗間編年中世6期a~bと考えられる。



第32図 SK182出土遺物実測図(1/3)

SK184

SK184は、F-3グリッドで検出される。長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.4mを測る平面楕円形の土坑である。その切り合いからSK192より新しく、SK182より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器杯、皿がある。

出土遺物 (第33図)

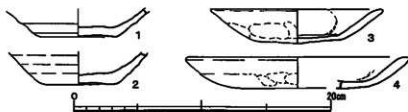
1、2は、底部糸切り難しの土師器杯である。共に上げ底風の底部で、復元底径は、1が5.9cm、2が6.1cmをそれぞれ測る。3、4は、京都系土師器皿である。共に、口縁部に向かい肥厚するもので、内面には「2」字ナデが施される。3が口径13.2cm、器高2.7cm、4が復元口径16.6cmをそれぞれ測る。

SK079

SK079は、D-4グリッドで検出される。その切り合いから全容は不明であるが、SK068、043より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器杯、皿、染付皿、不明陶器蓋、瓦質土器火鉢がある。

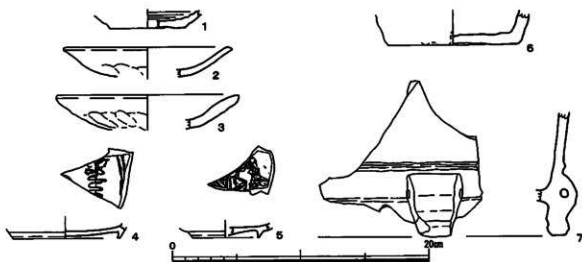
出土遺物 (第34図)

1は、底部糸切り難しの土師器環である。復元底径5.8cmを測る。2、3は、京都系土師器皿である。2は、体部から大きく外反するもので、復



第33図 SK184出土遺物実測図 (1/3)

元口径12.8cmを測る。3は、短く外反する口縁部のもので、復元口径14.0cmを測る。4、5は、染付皿である。4は、森田分類の白磁環E-2群タイプの染付で、復元高台径8.4cmを測る。5は、小野分類の皿B-1群に当たり、復元底径は、5.2cmを測る。6は、不明陶器壺である。国産陶磁器には観られない胎土及び軸調である。7は、有孔の脚が付く瓦質土器火鉢である。



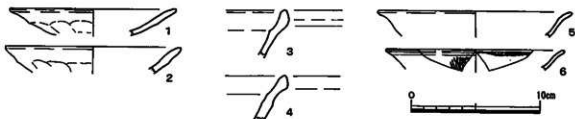
第34図 SK079出土遺物実測図 (1/3)

SK077

SK077は、D-3グリッドで検出される。長軸1.65m、短軸1.05m、深さ0.65mを測る平面長円形を呈する土坑で、その切り合いからSK084、085より新しく位置づけられる。出土遺物には、土師器皿、瓦質土器鍋、白磁皿、染付皿がある。

出土遺物 (第35図)

1、2は、京都系土師器皿である。1は、大きく外反する口縁部のもので、復元口径12.6cmを測る。2は、小さく外反するもので、復元口径13.6cmを測る。3、4は、瓦質土器鍋である。共に玉縁状の口縁部に加え、体部外面にはへら削りが施される。5は、森田分類E-2群の白磁皿である。復元口径は、14.4cmを測る。6は、小野分類B-1群の染付皿である。復元口径は、13.4cmを測る。



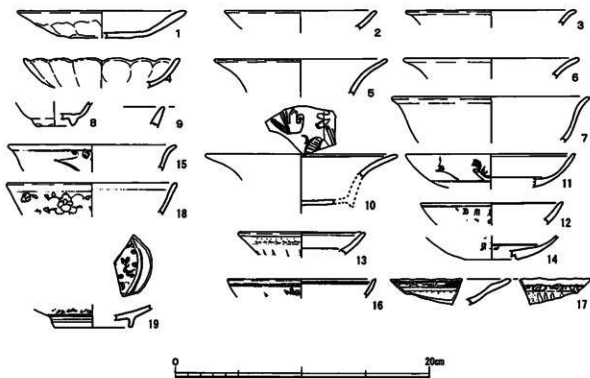
第35図 SK077出土遺物実測図 (1/3)

SK085

SK085は、G-3グリッドで検出される。約1.5m、深さ0.2mの平面円形を呈する土坑で、その切り合いからS074、077より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器皿、白磁杯、小杯、皿、碗、青磁碗、染付皿、碗がある。

出土遺物（第36図）

1は、京都系土師器皿である。口縁部に向かい肥厚するもので、復元口径13.0cm、器高2.1cmを測る。2～4は、白磁皿である。2は、森田分類のE-1群で、復元口径11.6cm、3はE-2群で、復元口径13.0cm、4はE-4群で、復元口径12.0cmを測る。5、6は、白磁杯である。共に森田分類のE-2群で、復元口径は、5で、13.2cm、6で、13.4cmをそれぞれ測る。7は、森田分類のE群にあたる白磁碗である。復元口径は、15.0cmを測る。8は、白磁の小杯である。見込部を蛇の目風に軸剥ぎするもので、復元高台径は2.8cmを測る。9は、上田分類のE類にあたる青磁碗である。10～17は、染付皿である。10は、白磁杯E-2群タイプのもので、復元口径14.8cmを測る。11～14は、小野分類皿C群に当たるもので、法量は復元で、11が口径13.0cm、12が口径11.0cm、13が口径9.6cm、14が高台径4.0cmをそれぞれ測る。15は、小野分類B-1群の皿である。復元口径は、12.8cmを測る。16は、小野分類E群の皿である。復元口径は、11.7cmを測る。17は、口縁部が斜めに折れ、端部は輪花状を呈する皿である。18、19は染付碗である。18は、焼成不良による透明感の無い釉調のもので、復元口径13.0cmを測る。19は、小野分類C群の碗で、復元底径5.8cmを測る。



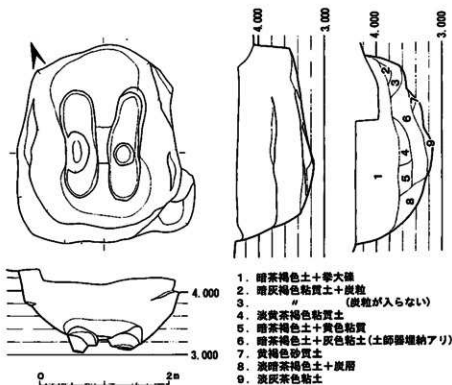
第36図 SK085出土遺物実測図(1/3)

SK160 (第37図)

SK160は、G-6グリッドで検出される。長軸3.0m、短軸2.45m、深さ1.15mを測る平面楕円形を呈する大型の土坑で、床面には、鋳造遺構にみられる樹木の埋設痕を思わせる中心に小穴を有する2条の溝が掘り込まれている。土層断面の観察からは、比較的一時期に埋められたと考えられる1層と、掘り返し等の土層の不整合が認められる2～9層の大きく2つに分けられる。出土遺物には、土師器杯、皿、青釉小皿、白磁皿、染付皿、碗、瀬戸・美濃皿、天目碗、硯、瓦質土器鍋、風炉、備前焼播鉢、徳利、壺がある。特殊な構造を呈するこの遺構の性格としては、後に述べる包含層出土の鋳型状の土製品や、二次比熱し、須恵質となった金属塊の付着する丸瓦(溶けた金属を流す罐に転用したものと考えられる)等の存在も併せて現状で、鋳造関連遺構が考えられる。

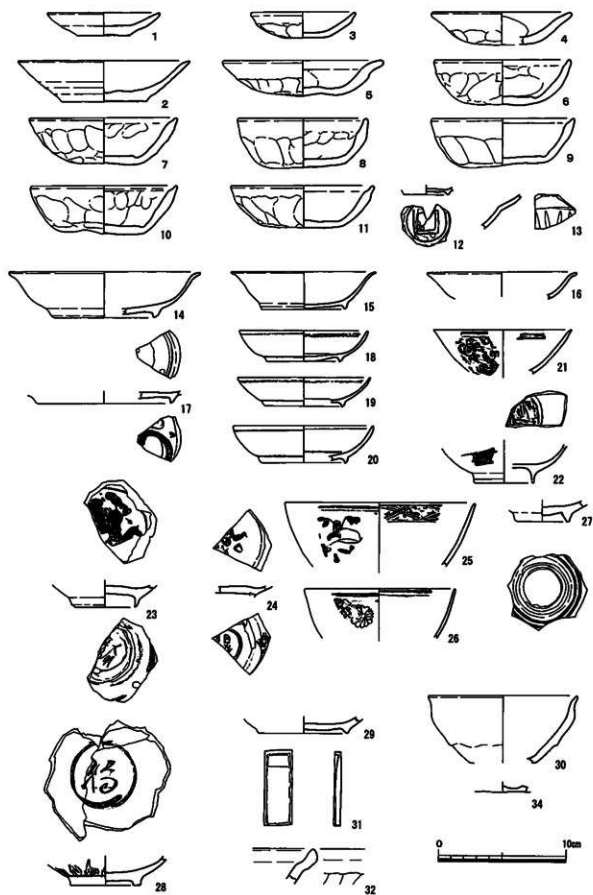
出土遺物 (第38、39図)

1は、底部糸切り離しの土師器小皿である。復元口径8.8cm、器高1.8cm、底径4.2cmを測る。2は、底部糸切り離しの土師器杯である。復元口径13.4cm、器高3.2cm、底径6.8cmを測る。3～11は、京都系土師器皿である。3は、つまみ上げ状の口縁部を呈するもので、口径8.2cm、器高2.0cmを測る。4はつまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径11.0cm、器高2.5cmを測る。5は、大きく外反する口縁部を呈し口径11.3cm、器高3.3cmを測る。6～11は、つまみ上げ状の口縁部に深い瓶型の形態を呈するものであるが、内面に「の」字ナデを施すなど京都系土師器の成形技法で作られている。6は、口径10.6cm、器高3.5cm、7は、口径11.5cm、器高3.7cm、8は、口径10.2cm、器高3.9cm、9は、口径11.0cm、器高3.8cm、10は、口径11.4cm、器高3.7cm、11は、口径11.3cm、器高3.3cmをそれぞれ測る。なお、その出土状況では、7と9が合わせ口状に重なって出土している。12は、中国南部産の三彩系青釉小皿である。高台径は3.6cmを測る。13～16は白磁皿である。13は、口縁部が斜めに折れ、端部は輪花状を呈する皿である。14～16は、森田分類のE-2群の皿である。法量は、14で、復元口径15.0、器高3.5cm、高台径7.8cm、15で、復元口径11.5cm、器高2.9cm、高台径6.5cm、16で、復元口径11.6cmをそれぞれ測る。17～20は染付皿である。17は、小野分類のB-1群、18～20は、同E群にあたる。法量は、17で、復元高台径10.4cm、18で、復元口径10.5cm、器高2.4cm、高台径6.0cm、19で復元口径10.5cm、器高2.3cm、高台径6.1cm、20で、復元口径11.5cm、器高3.0cm、高台径6.6cmをそれぞれ測る。21～26は、染付碗である。21は、小野分類のC群、22～26は、同E群にあたる。法量は、21で、復元口径10.9cm、22で、復元高台径4.4cm、23で、同4.8cm、25で、復元口径14.8cm、26で、同11.9cmをそれぞれ測る。27、28は、漳州窯系染付碗である。共に陶器質の胎土のもので、27は、高台径4.2cm、内面見込部及び外面高台付近が露胎となる。28は、小野分類の碗B群模倣と考えられるもので、高台径5.4cmを測る。29は、瀬戸・美濃窯



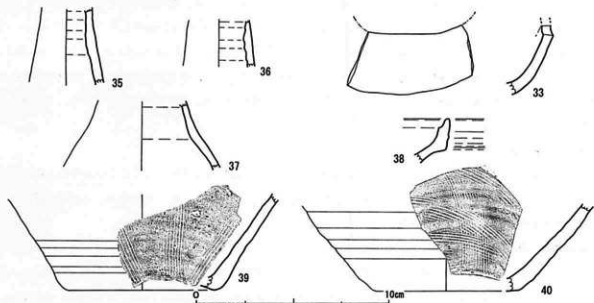
1. 暗茶褐色土+赤大磁
2. 暗灰褐色粘質土+炭粒
3. " (炭粒が入らない)
4. 淡黄茶褐色粘質土
5. 暗茶褐色土+黄色粘質
6. 暗茶褐色土+灰色粘土(土師器埋納アリ)
7. 黄褐色砂質土
8. 淡暗茶褐色土+炭屑
9. 淡灰茶色粘土

第37図 SK160遺構実測図(1/60)



第38圖 SK160出土遺物実測圖 1 (1/3)

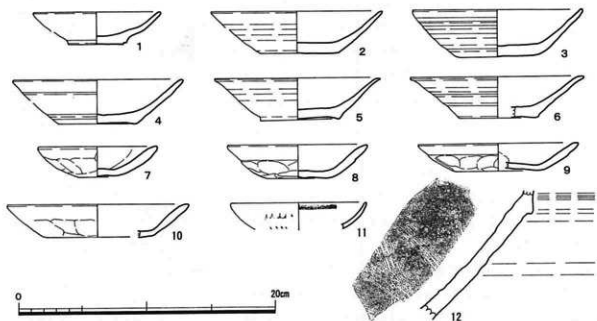
系陶器皿である。復元高台径は6.1cmを測る。30は天目碗である。器面に禾目がみられる。その胎土から中国産が推定される。31は、赤間硯である。32は、瓦質土器鍋である。玉縁状の口縁部に体部外面にはへら削りが施される。33は、同じく風炉である。34～40は備前焼である。34は小壺の底部、35～37は徳利、38～49は、搦鉢である。39は、放射状搦目目を施し、復元底径は15.0cmを測る。40は、放射状搦目目+斜め搦目目を施し復元底径は14.6cmを測る。共に乗岡編年の近世1期a、bを前後する位置づけと考えられる。



第39図 SK160出土遺物実測図2 (1/4)

SK177

SK177は、G-6 グリッドで検出される。その切り合いから全容は不明であるが、その切り合いからSK160より古く、SK181より新しく位置づけられる。出土遺物には、SK181の混入品も含めて、土師器小皿、坏、皿、染付皿、備前焼搦鉢がある。



第40図 SK177出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第40図)

1 は、底部糸切り難しの土師器小皿である。復元口径10.1cm、器高2.5cm、底径4.3cmを測る。2～6は、底部糸切り難しの土師器杯である。2は、復元口径13.4cm、器高3.2cm、底径6.1cm、3は、口径13.2cm、器高3.6cm、底径6.0cm、4は、復元口径13.3cm、器高3.5cm、底径6.0cm、5は、口径13.0cm、器高3.3cm、底径6.2cm、6は、復元口径13.4cm、器高3.2cm、底径6.0cmをそれぞれ測る。7～10は、京都系土師器皿である。7は、索口縁を呈し、内面には「の」字ナデが施される。口径9.4cm、器高2.4cmを測る。8は、指押さえ部との境が明瞭で、鋭角的な口縁端部を呈するもので、復元口径11.2cm、器高2.1cmを測る。9は同様な口縁部形態だが器壁が薄い。復元口径12.4cm、器高2.1cmを測る。10は、口縁部にむかって肥厚するもので、復元口径14.2cm、器高2.5cmを測る。11は、染付皿で、小野分類C群あたる。復元口径は、10.6cmを測る。12は、備前焼播鉢である。放射状襷目＋斜め襷目が施される乗岡編年近世1期bにあたる。これらの遺物のうち、SK177出土のものは7、8、12のみであり他は、SI81の遺物が混入したものと考えられる。

SK181 (第41図)

SI81は、F-6グリッドで検出される。その切り合い及び南半部が調査区外になることからその全容は不明であるが、その切り合いからSI140、161、162、177より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器小皿、杯、皿、瓦質土器播鉢、備前焼播鉢がある。

出土遺物 (第42図)

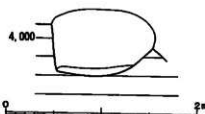
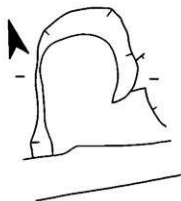
1～6は底部糸切り難しの土師器小皿である。これらの法量は、1で、口径8.8cm、器高2.4cm、底径4.5cm、2で、口径8.9cm、器高2.2cm、底径4.8cm、3で、口径9.0cm、器高2.5cm、底径4.1cm、4で、口径8.8cm、器高2.4cm、底径4.2cm、5は底径4.2cm、6は底部に二次穿孔が施されるもので、底径5.0cmをそれぞれ測る。7～14は、底部糸切り難しの土師器杯である。これらの法量は、7で、復元口径12.2cm、器高3.6cm、底径5.2cm、8で、口径12.5cm、器高3.1cm、底径5.7cm、9で、口径12.6cm、器高3.0cm、底径6.0cm、10で、口径12.8cm、器高3.0cm、底径5.9cm、11で、復元口径13.2cm、器高3.0cm、底径5.7cm、12で、口径12.8cm、器高3.2cm、底径5.8cm、13で、復元口径12.9cm、器高3.3cm、底径5.9cm、14で復元口径13.3cm、器高3.0cm、底径6.0cmをそれぞれ測る。15～19は、京都系土師器皿である。15は、大きく外反する口縁部で、口径10.2cm、器高2.2cmを測る。16は、口縁部に向かい肥厚するもので、口径12.0cm、器高2.2cmを測る。17は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径13.6cmを測る。18は、口縁部に向かい肥厚するもので、口径14.8cm、器高2.5cmを測る。19は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径15.0cm、器高2.5cmを測る。20、21は、瓦質土器播鉢である。22は、乗岡編年の中世6期aにあたる備前焼播鉢である。

SK162

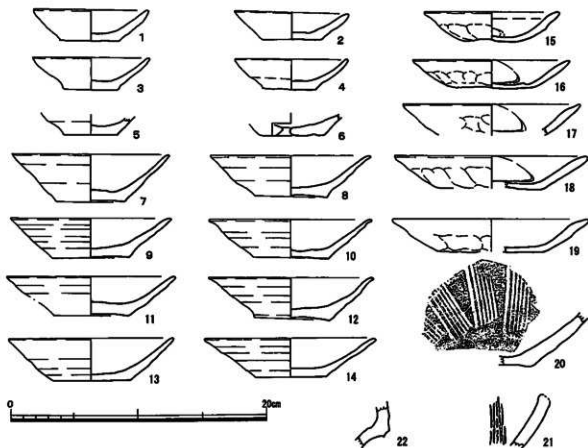
SK162は、F-6グリッドで検出される。長軸は不明、短軸1.1m、深さ0.4mを測る土坑で、その切り合いからSK064、SD140より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器小皿、杯、皿がある。

出土遺物 (第43図)

1～4は底部糸切り難しの土師器小皿である。これらの法量は、1で、復元口径8.8cm、器高2.4cm、底径4.2cm、2で、復元口径9.0cm、器高2.3cm、底径4.6cm、3で、復元口径8.8cm、器高2.3cm、底径4.2cm、4で、復元口径10.4cm、器高2.4cm、底径5.4cmをそれぞれ測る。5、6は、底部糸切り難しの土師器杯である。5は、復元口

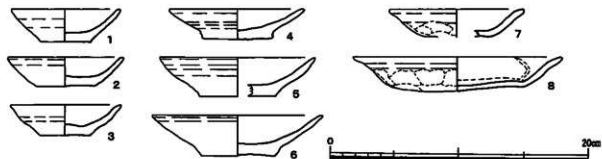


第41図 SK181遺構実測図 (1/40)



第42図 SK181出土遺物実測図 (1/3)

径12.2cm、器高3.0cm、底径6.0cmを測り、6は、復元口径13.4cm、器高3.1cm、底径5.8cmを測る。7、8は、京都系土師器皿である。共に大きく外反する口縁部で、7が、復元口径10.8cm、器高2.1cm、8が、復元口径16.4cm、器高2.7cmを測る。



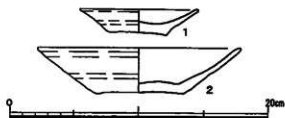
第43図 SK162出土遺物実測図 (1/3)

SK097

SK097は、E-5グリッドで検出される。SK067、070下層で検出された小土坑で、規模は不明である。出土遺物には、土師器小皿、坏がある。

出土遺物 (第44図)

1は、底部糸切り離しの土師器小皿である。口径9.0cm、器高2.1cm、底径4.6cmを測る。2は、底部糸切り離しの土師器坏で、復元口径15.6cm、器高3.6cm、底径6.8cmを測る。



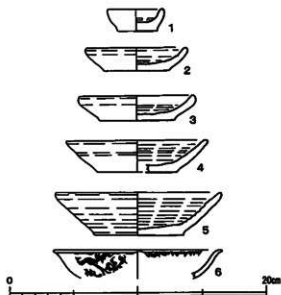
第44図 SK097出土遺物実測図 (1/3)

SK180

SK180は、F-5 グリッドで検出される。長軸1.7m、短軸1.5m、深さ0.3mを測る平面楕円形を呈する土坑である。その切り合いからSD163よりも古く位置づけられる。出土物には、土師器皿、染付皿がある。

出土遺物（第45図）

1～5は、底部糸切り離しの土師器皿である。これらの法量は、1で、4.4cm、器高1.7cm、底径3.0cm、2で、復元口径8.0cm、器高1.8cm、底径5.0cm、3で、復元口径8.8cm、器高1.9cm、底径5.8cm、4で、復元口径11.0cm、器高2.4cm、底径6.2cm、5で、復元口径13.3cm、器高3.3cm、底径7.0cmをそれぞれ測る。6は、小野分類B-1群にあたる染付皿である。復元口径12.1cmを測る。



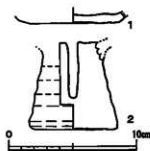
第45図 SK180出土遺物実測図(1/3)

SK191

SK191は、G-5 グリッドで検出される。その切り合い状況に加え、東半部が調査区外になることからその全容は不明である。SK165より古く、SK194より新しく位置づけられる。出土物には、土師器環、燵台がある。

出土遺物（第46図）

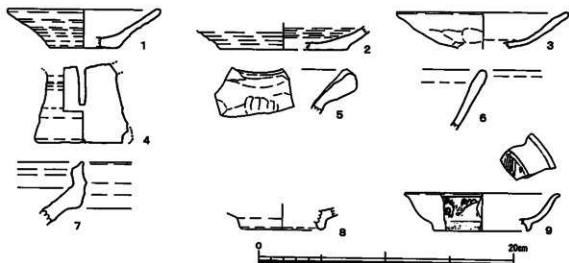
1は、底部糸切り離しの土師器環である。底径は、7.0cmを測る。2は、土師器燵台である。中央部には、ロクロ成形によるもので、底部には糸切り離し痕、体部には成型時に生じた段を残している。



第46図 SK191出土遺物実測図(1/3)

SK192

SK192は、F-3 グリッドで検出される。長軸1.8m、短軸0.9m、深さ0.4mを測る平面長円形を呈する土坑で、その切り合いからSK184より古く位置づけられる。出土物には、土師器環、皿、燵台、瓦質土器播鉢、銅、備前焼播鉢、青磁碗、染付皿がある。



第47図 SK192出土遺物実測図(1/3)

出土遺物 (第47図)

1, 2は、底部糸切り離しの土師器坏である。1は、復元口径11.8cm、器高3.0cm、底径5.2cmを測る。2は、復元底径10.0cmを測る。3は、京都系土師器皿である。



第48図 SK183出土遺物実測図 (1/3)

復元口径13.4cmを測る。4は、土師器燗台である。ロクロ成形によるもので、底部に糸切り離し痕跡、体部には成型時の段を残す。5は、瓦質土器播鉢の片口である。6は、瓦質土器鍋である。体部外面に粗い磨きが施される。7は、乗岡縄文中世6期の播鉢である。8は、青磁碗である。全面に施釉されたもので、復元高台径は、6.2cmを測る。9は、小野分類B-1郡にあたる染付皿である。

SK183

SK183は、F-4グリッドで検出される。径約1.2m、深さ0.4mを測る平面隅丸方形を呈するものと考えられる。その切り合いからSK167より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器小皿がある。

出土遺物 (第48図)

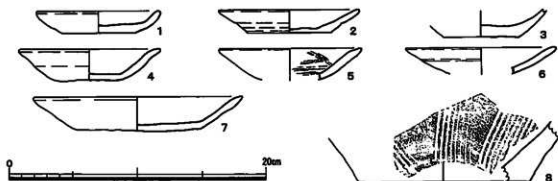
1は、底部糸切り離しの土師器小皿である。復元口径7.6cm、器高1.6cm、底径4.9cmを測る。

SK115

SK115は、F-2グリッドで検出される。擾乱及びSK112に切られる形でその全容は不明である。出土遺物には、土師器小皿、坏、皿、備前焼播鉢がある。

出土遺物 (第49図)

1, 2は、底部糸切り離しの土師器小皿である。1は、口径に対する底径が広い全体に扁平な器形を呈する。復元口径9.6cm、器高1.7cm、底径6.6cmを測る。2は、復元口径11.0cm、器高1.8cm、底径6.6cmを測る。3は、底部糸切り離しの土師器坏である。復元底径は、5.8cmを測る。4~7は、京都系土師器皿である。4は、大きく外反する口縁部で、復元口径11.0cm、器高2.5cmを測る。5は、つまみ上げ状の口縁部で、復元口径11.2cm、内面に「2」字ナデが施される。6, 7は、口縁部に向かって肥厚するもので、6は、復元口径11.6cmを測る。7は、復元口径16.2cm、器高2.7cmを測る。8は、乗岡縄文中世6期の備前焼播鉢である。



第49図 SK115出土遺物実測図 (1/3)

SK101 (第50図)

SK101は、F-2グリッドで検出される。北半部を擾乱によって切られておりその全容は不明であるが、短軸1.5m、深さは、0.4mと0.6mを測り、2段掘りの構造となる。出土遺物には、土師器皿、小皿、埴、備前焼播鉢がある。

出土遺物 (第51図)

1~3は、京都系土師器皿である。共に非常に薄手の器壁(4mm)を特徴とする。1は、口縁端部が鋭角的で、外面指押さえ部との境が明瞭なものである。復元口径12.8cm、器高2.5cmを測る。2, 3は、口縁部に向かい肥

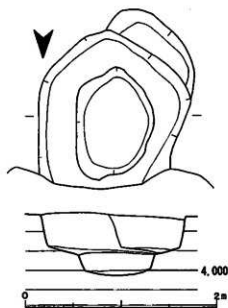
厚するもので、2で、復元口径14.4cm、器高2.4cm、3で、復元口径16.0cm、器高2.3cmを測る。4は、底部糸切り離しの土師器小皿である。口径8.3cm、器高2.3cm、底径4.2cmを測る。5は、土師器碗である。口径11.2cm、器高3.2cm、高台径5.9cmを測る。外面体部下半部にヘラ削り、内面にヘラ磨きが施される。6は、乗岡縄年中世5～6期の備前焼摺鉢である。この他図示していないが、大内系の白色胎土で薄手の土師器片も出土している。

SK096

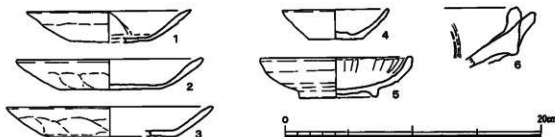
SK096は、C-3グリッドで検出される。SK091下層より検出された遺構でその全容は不明である。出土遺物には、土師器環がある。

出土遺物 (第52図)

1～3は、底部糸切り離しの土師器環である。共に、口径に対する底径がやや大きくなる環aと環bの中間形態を呈する。法量は、1で、口径12.6cm、器高4.1cm、底径6.8cm、2で復元口径12.4cm、器高4.1cm、底径8.0cm、3で、底径7.8cmをそれぞれ測る。



第50図 SK101遺構実測図 (1/40)



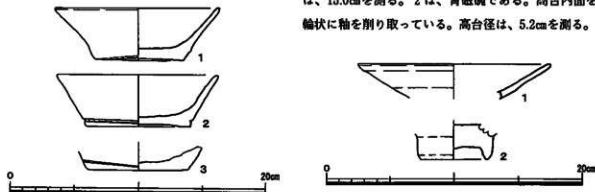
第51図 SK101出土遺物実測図 (1/4)

SK173

SK173は、E-6グリッドで検出される。その南半部が調査区外になることに加えSK064、162によって切られており、その全容は不明である。出土遺物には、土師器皿、青磁碗がある。

出土遺物 (第53図)

1は、土師器皿である。非常に薄手のつくりで白色系の胎土を特徴とする大内系の土師器皿である。復元口径は、15.0cmを測る。2は、青磁碗である。高台内面を輪状に軸を削り取っている。高台径は、5.2cmを測る。



第52図 SK096出土遺物実測図 (1/3)

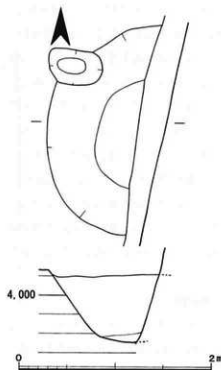
第53図 SK173出土遺物実測図 (1/3)

SK142 (第54図)

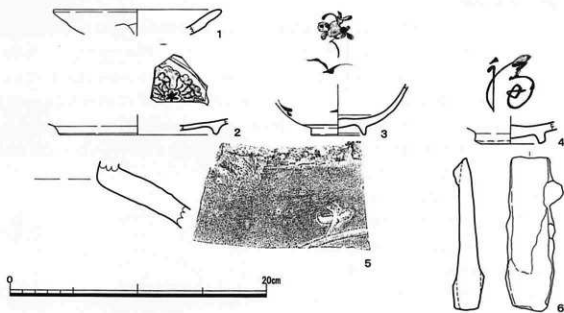
SK142は、G-5グリッドで検出される。東半部が調査区外となるが、径2.2m、深さ0.8mの平面円形を呈する土坑である。その土層観察からこの土坑が、表土直下で検出されていること、焼土が大量に詰まった火災処理に使用された土坑であることが確認されている。出土遺物には、土師器皿、染付皿、碗、備前焼甕、不明鉄製品がある。

出土遺物 (第55図)

1は、土師器皿である。口縁端部が鋭角的で、外面指押え部との境が明瞭なものである。復元口径は、13.0cmを測る。2は、小野分類E群にあたる染付皿である。復元高台径は、12.2cmを測る。3は、小野分類F群にあたる染付碗である。高台径は、4.2cmを測る。4は、漳州窯系染付碗である。高台径は4.4cmを測る。5は、備前焼甕である。肩部に「甕(石)」の刻書が入る。6は、クサビ状の断面形態を呈する不明鉄製品である。



第54図 SK142遺構実測図(1/40)



第55図 SK142出土遺物実測図(1/3)

SK042 (第56図)

SK042は、D-5グリッドで検出される。径1.6m、深さ0.4mを測る平面円形の土坑で、その土層観察から、焼土の詰まった火災処理に使用された土坑であることが確認されている。出土遺物には、土師器小皿、皿、瓦質土器鉢、不明焼締陶器、備前焼甕、白磁小坏、瀬戸。美濃窯系天目碗、染付皿、鉄釘がある。

出土遺物 (第57図)

1は、底部糸切り離しの土師器小皿である。底径4.4cmを測る。2は、京都系土師器皿である。大きく外反する口縁部を呈する。3は、瓦質土器鉢である。4は、不明焼締陶器鉢である。軟質の焼成で、内側に折り返した

口縁部、内面ハケ目、外面指押さえが観られる。法量は、復元口径21.2cm、器高3.7cm、底径13.2cmを測る。5は、乗岡編年近世1期にあたる備前焼甕である。6は、白磁小坏である。復元口径は、8.0cmを測る。7は、天目碗である。胎土から瀬戸・美濃窯産のものと考えられる。復元口径11.8cmを測る。8～12は、染付皿である。8は、小野分類C群にあたる皿で、復元底径2.4cmを測る。9～11は、同分類のB-1又はB-2群と考えられる。12は、漳州窯系の大皿である。復元高台径は、12.8cmを測る。13は、鉄釘である。

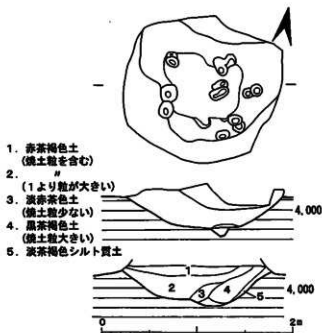
SK169 (第58図)

SK169は、E-4グリッドで検出される。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.5mを測る平面楕円形を呈する土坑である。その土層観察から埋土

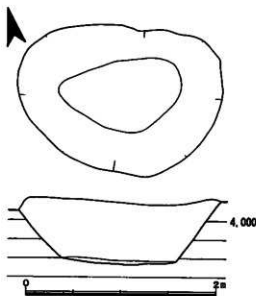
に焼土が詰まった火災処理に使用された土坑であることが確認されている。出土遺物には、土師器皿、白磁皿、染付皿、碗、硯、不明骨製品、瓦質土器風炉、備前焼壺、播鉢、甕、徳利がある。

出土遺物 (第59、60図)

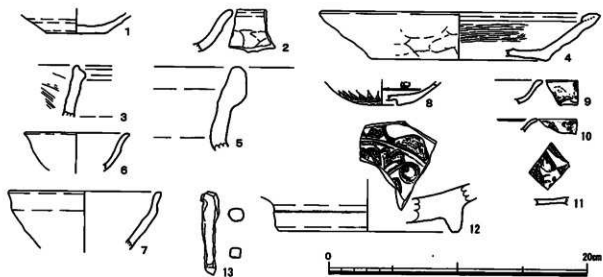
1～3は、京都系土師器皿である。1は、紫口縁を呈するもので、復元口径9.0cm、器高2.4cmを測る。2は、つまみ上げ状の口縁部を呈するもので、復元口径12.9cmを測る。3は、つまみ上げ状の口縁部を呈し、器高の高い碗形態を示すもので、復元口径は、13.6cmを測る。4、5は、白磁皿である。4は、森田分類のE-2群にあたり、復元口径11.4cm、器高2.4cm、高台径6.8cmを測る。5は、輪花口の口縁部に沿って染付が入るものである。6、7は、染付皿である。6は森田分類の白磁坏E-2群タイプのもので、復元口径15.2cm、器高3.0cm、高台径7.6cmを測る。7は、小野分類E群にあたる皿である。高台内に「弘治年製」の銘が入るもので、口径13.4cm、器高2.6cm、高台径7.1cmを測る。8～10は、小野分類のE群の碗である。8は、高台径5.5cm、高台内に「萬福攸同」銘が入る。9は、復元口径12.8cmを測る。10は、復元高台径5.0cmを測る。11は、漳州窯系染付碗で、復元高台径4.4cmを測る。12は、赤間硯である。13、14は、径1.8cmの円形の不明骨製品で、13が白、14が黒色である。15、16は、瓦質土器風炉である。15は、復元口径30.0cmを測り、16は、接合関係は不明であるが、脚部の破片である。17～23は、備前焼である。17、18は、小壺である。17の復元底径は、11.0cmを測る。19、20は、播鉢である。共に乗岡編年近世1期にあたり、20は、復元口径29.0cmを測る。21、22は、乗岡編年中世6期bにあたる甕である。23は、徳利で、口径9.0cmを測る。



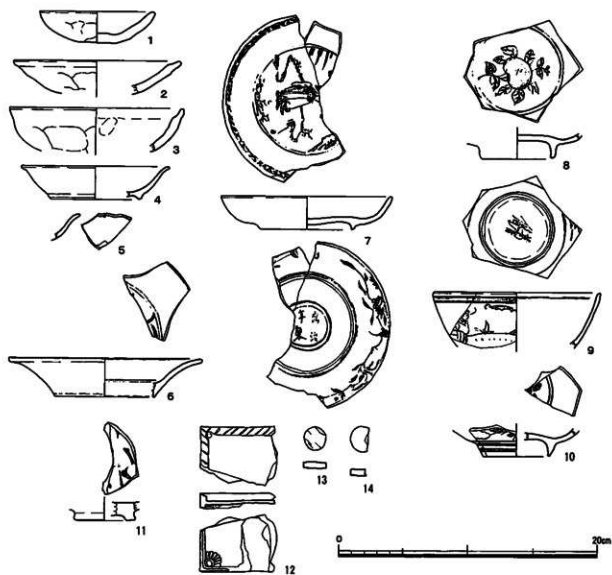
第56図 SK042遺構実測図 (1/40)



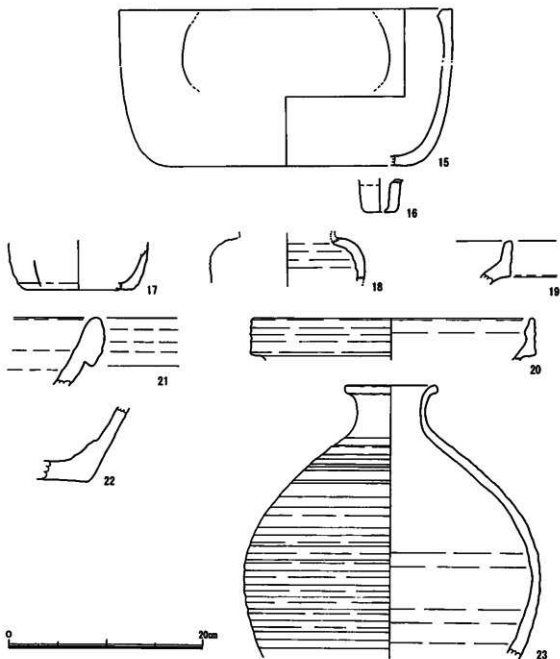
第58図 SK69遺構実測図 (1/40)



第57图 SK042出土遺物実測圖 (1/3)



第59图 SK169出土遺物実測圖 1 (1/3)



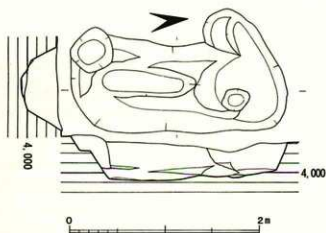
第60図 SK169出土遺物実測図2 (1/40)

SK095 (第61図)

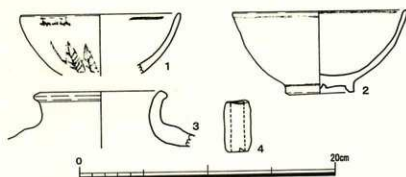
SK095は、E-3 グリッドで検出される。土坑を2基合わせたような不成形の土坑で、長軸2.3m、短軸0.9～1.2m、深さ0.4mを測る。出土遺物には、染付皿、備前焼壺、土甕、瓦質土器風炉がある。

出土遺物 (第62、63図)

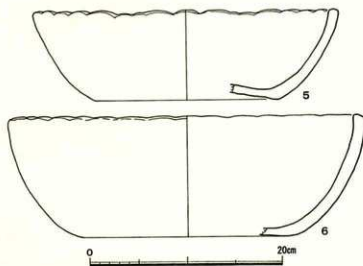
1 は、小野分類C群の碗である。復元口径は12.2cmを測る。2 は、漳州窯系染付碗である。貫入が入り、透明感の無い白濁した釉調である。口径13.4cm、器高6.4cm、高台径4.9cmを測る。3 は、備前焼壺である。復元口径9.2cmを測る。4 は土甕である。5、6 は、瓦質土器風炉である。共に輪花状のこ口縁部を呈し、復元口径は、5で、31.0cm。6で、34.4cmを測る。その他この遺構からは、図示していないが、不明の板状鉄製品も出土している。



第61図 SK095遺構実測図(1/40)



第62図 SK095出土遺物実測図 1 (1/3)



第63図 SK095出土遺物実測図 2 (1/4)

SK086 (第64図)

SK086は、C-3 グリッドで検出される。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ1.1mを測る平面楕円形を呈する土坑である。床面には凹凸があり、平坦ではない。その土層観察からこの土坑が、表土直下で検出されていること、埋土に焼土が大量に詰まった火災処理に使用された土坑であることが確認されている。出土遺物には、土師器皿、

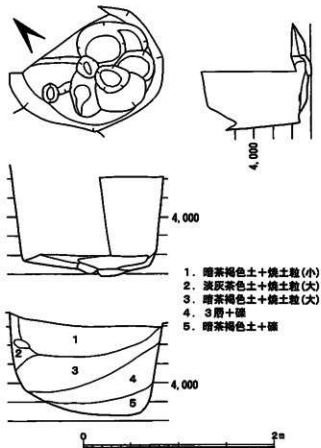
白磁皿、坏、青磁碗、染付碗、皿、天目碗、備前德利、播鉢がある。

出土遺物 (第65図)

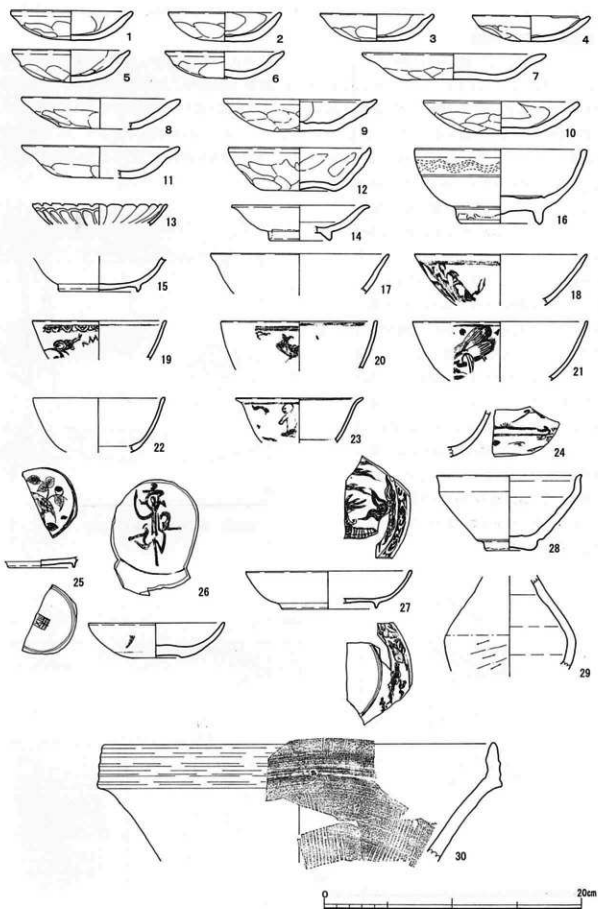
1～12は、土師器皿である。1～6は、小型のもので、つまみ上げ状の口縁部、内面に「の」字ナデを施すものである。法量は、1で、口径9.3cm、器高2.3cm、2で、口径8.6cm、器高2.3cm、3で、口径8.8cm、器高2.1cm、4で、口径9.0cm、器高2.0cm、5で、口径9.2cm、器高2.5cm、6は、口径9.1cm、器高2.5cmをそれぞれ測る。7は、大型のもので、大きく外反する口縁部を呈し、口径14.2cm、器高2.1cmを測る。8～11は、中型のもので、口縁部形態によって、紫口縁(8)つまみ上げ状の口縁(9、10)、大きく外反する口縁(11)に分けられる。法量は、8で、口径12.4cm、器高2.4cm、9で、口径12.0cm、器高2.5cm、10で口径11.9cm、器高2.5cm、11で口径12.2cm、器高2.5cmをそれぞれ測る。12は、つまみ上げ状の口縁部に、器高が高く境形態を呈するもので、口径11.0cm、器高3.3cmを測る。13、14は、白磁皿である。13は森田分類のE-4群に当たり、復元口径10.4cmを測る。14は、森田分類のE-2群にあたり、内面見込部及び高台部には施釉されない。法量は復元口径10.8cm、器高2.7cm、高台径4.6cmを測る。15は、森田分類E-2群の白磁坏である。高台径6.1cmを測る。16は、青磁碗である。暗緑灰褐色に発色する全面に貫入が入る透明感の無い釉調で、高台畳付きから高台内には施釉されない。口縁部下には便化した波状の雷文帯が通る上田分類のC-Ⅲ類の粗製品と考えられる遺物である。法量は口径13.0cm、器高5.8cm、高台径6.0cmを測る。17は、内外面に褐釉が施される磁器碗である。復元口径13.8cmを測る。18～22、24は、染付碗である。18は、小野分類C群の碗にあたる。復元口径は、13.2cmを測る19～22、24は、小野分類E群の碗にあたり、法量は、19で、復元口径10.3cm、20で、復元口径、21で、復元口径13.2cm、22で復元口径10.6cmをそれぞれ測る。23は、端反りの口縁部を呈する染付小坏である。復元口径10.0cmを測る。25は、小野分類E群タイプの小型の皿である。高台径5.2cmを測る。26は、小野分類C群の皿である。法量は、復元口径10.4cm、器高2.7cm、底径3.9cmを測る。27は、同じくE群の皿である。法量は、復元口径13.0cm、器高2.9cm、底径7.4cmを測る。28は、瀬戸・美濃系系の天目碗である。高台内面にまで施釉されるもので、口径11.0cm、器高5.8cm、底径3.2cmを測る。29は、備前焼德利である。外面の体部下半にへら削りが施される。30は、備前焼播鉢である。放射状の播目が入る栗岡編年中世6期にあたる。復元口径30.6cmを測る。

SK189 (第66図)

SK189は、F-3グリッドで検出される。1辺2.1m、深さ0.3mを測る平面隅丸方形を呈する土坑である。土坑中央部には壘の底部が覗られるが、床面からは、浮いた状態であり、この土坑に付設されているようなものではない。その検出面及び土層観察から、この土坑が、表土直下の火災処理土坑より一段階古い焼土層に伴う時期の火災



第64図 SK189遺構平面図(1/40)

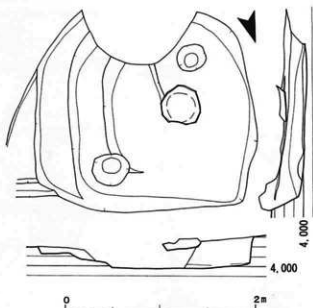


第65図 SK086出土遺物実測図(1/3)

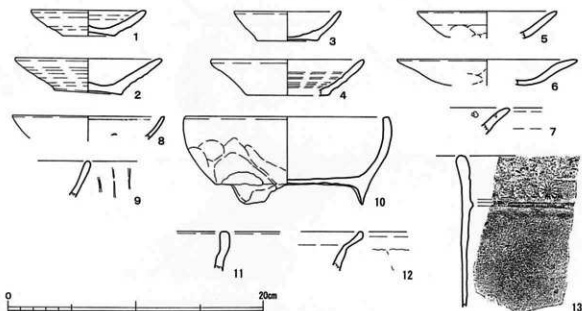
処理土坑であることがわかる。出土遺物には、土師器小皿、坏、皿、染付皿、青磁碗、瓦質土器火鉢、鍋がある。

出土遺物（第67、68図）

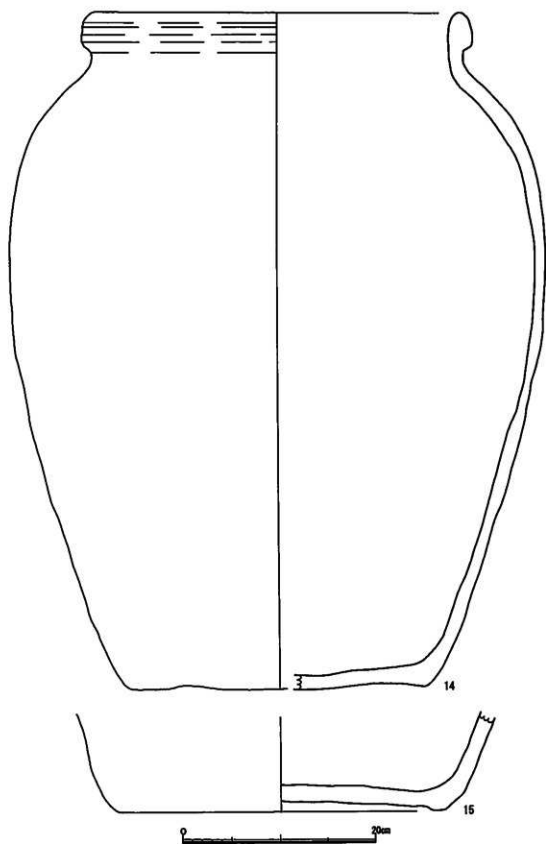
1、2は、底部糸切り離しの土師器小皿と、坏である。共に上げ底風の底部を呈し、法量は、1で、復元口径8.8cm、器高2.0cm、底径4.0cm、2で口径11.2cm、器高2.7cm、底径5.1cmを測る。3は底部糸切り離しの土師器皿である。復元口径8.4cm、器高2.3cm、底径4.8cmを測る。4は、底部糸切り離しの土師器坏である。内面にロクロ成型時に生じた工具状の段を残すもので、復元口径11.8cm、器高2.8cm、底径6.6cmを測る。5～7は、京都系土師器皿である。5は、口縁部が鋭角的で、外面指押え部との境が明瞭なもので、復元口径10.8cmを測る。6は、大きく外反する口縁部で、復元口径14.0cmを測る。7は、二次穿孔痕跡が観られる口縁部片である。8は、小野分類E群にあたる染付皿である。復元口径11.8cmを測る。9は、剣先を省略した連弁が施される上田分類B-IV類にあたる青磁碗である。10～13は、瓦質土器である。10は、脚付鉢である。三脚を有し、口径15.0cm、器高6.9cmを測る。11、12は、鍋である。13は、火鉢である口縁部下の二条の突帯の間にスタンプによる花文が施される。14、15は、備前焼甕である。14は、復元口径38.0cm、器高70.5cm、底径31.0cmを測る。15は、遺構中央部で確認されたもので、底径34.0cmを測る。共に乗岡編年の中世5期にあたるものであり、共伴の染付皿E群や、土師器との間に時期差が観られる。



第66図 SK189遺構実測図(1/40)



第67図 SK189出土遺物実測図 1 (1/3)



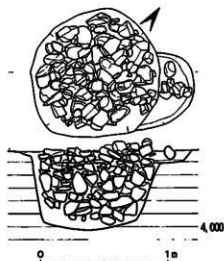
第68圖 SK189出土遺物実測圖 2 (1/4)

SK052 (第69図)

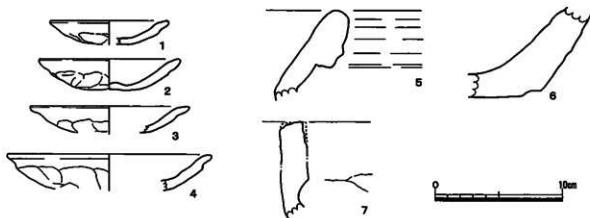
SK052は、G-4グリッドで検出される。径約1.0m、深さ0.6mを測る平面円形を呈する土坑である。埋土中には焼けた石を含む大量の石が詰まっており、火災処理土坑の一種と考えられる。出土遺物には、土師器皿、備前焼甕、瓦質土器甕がある。

出土遺物 (第70図)

1～4は、京都系土師器皿である。1は、つまみ上げ状の口縁部を有するもので、復元口径9.0cm、器高1.8cmを測る。2は、口縁部が脱角的で、外面指押さえ部との境が明瞭なもので、復元口径10.8cm、器高2.5cmを測る。3は、大きく外反する口縁部のもので、復元口径12.2cmを測る。4は、短く外反するもので、復元口径15.6cmを測る。5、6は、備前焼甕である。共に楽阿彌年中世6期にあたる。7は、口縁部を玉縁状に肥厚させた瓦質土器甕である。



第69図 SK052遺構実測図(1/30)



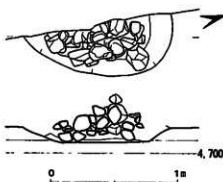
第70図 SK052出土遺物実測図(1/3)

SK076 (第71図)

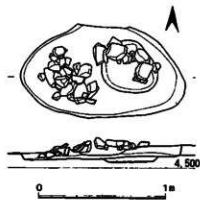
SK076は、G-3グリッドで検出される。西半部が調査区外となるが、長軸1.1m、深さ0.1mを測る平面楕円形を呈する土坑である。調査区壁面にかかる土層断面の観察から表土直下追構面から掘り込まれたものであることがわかる。埋土中の石の中にはやはり焼けた石が含まれている。

SK050 (第72図)

SK050は、G-4グリッドで検出される。長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.15mを測る平面楕円形を呈する土坑である。比較的浅いもので、埋土中の石も平面的な広がりを見せる。石中には、やはり焼けた石が含まれる。



第71図 SK076遺構実測図(1/30)



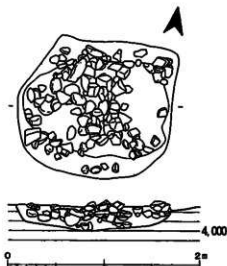
第72図 SK050遺構実測図(1/30)

SK021 (第73図)

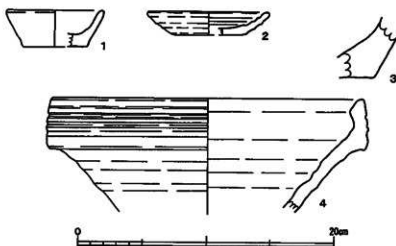
SK021は、E-4グリッドで検出される。長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る平面隅丸方形を呈する土坑である。比較的浅いもので、埋土中の石も平面的な広がりを見る。石中には、やはり焼けたものが含まれる。出土遺物には、土師器小皿、備前焼甕、播鉢がある。

出土遺物 (第74図)

1, 2は、底部糸切り離しの土師器小皿である。1は、口径に対する底径が広いもので、復元口径7.5cm、器高2.8cm、底径5.0cmを測る。2は、体部内外面にロクロ成形時に生じる段を残しているもので、復元口径9.4cm、器高1.8cm、底径5.8cmを測る。3, 4は、備前焼である。3は、乗岡編年近世1期の甕である。4は、同じく乗岡編年近世1期の播鉢である。



第73図 SK021遺構実測図 (1/40)



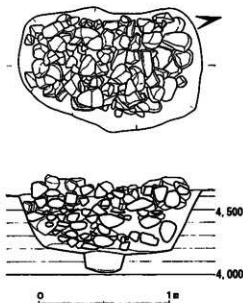
第74図 SK021出土遺物実測図 (1/3)

SK025 (第75図)

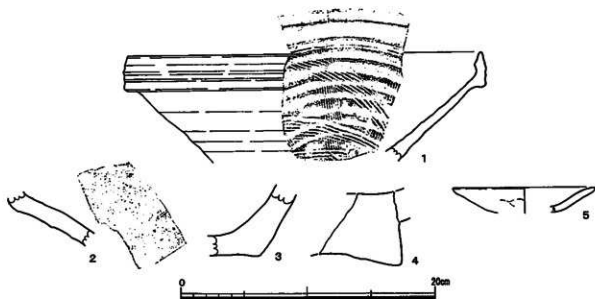
SK025は、D-3グリッドで検出される。長軸1.4m、短軸0.9m、深さ0.7mを測る平面長円形の土坑で、土坑中央には、径0.3m、深さ0.15mほどの小穴が掘られる。焼けた石を含む石が中央小穴を除く全面に入っている。出土遺物には、備前焼播鉢、甕、石臼、土師器皿がある。

出土遺物 (第76図)

1~3は、備前焼である。1は、乗岡編年近世1期bの播鉢で、復元口径37.0cmを測る。2は、同じく近世1期の甕である。肩部にある刻書が入る。3も同じく近世1期の甕の底部である。4は、石臼である。5は、京都系土師器皿である。体部から大きく外反するもので、復元口径11.2cmを測る。



第75図 SK025遺構実測図 (1/30)



第76図 SK025出土遺物実測図 (1/3)

SK109 (第77図)

SK109は、G-3 グリッドで検出される。長軸1.2m、短軸0.3m、深さ0.4mを測る平面長円形の土坑である。その遺構規模に対する深さが深いもので、焼けた石を含む大量の石と同時に平瓦が出土している。

SK018 (第78図)

SK018は、G-4 グリッドで検出される。長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る平面楕円形の土坑である。ほぼ全面に焼けた石を含む多量の石が入る。出土遺物には備前焼甕、石臼がある。

出土遺物 (第79図)

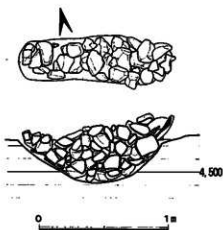
1, 2 は、乗岡編年近世1期にあたる備前焼甕である。1 は、復元口径36.0cmを測り、2 は、肩部に刻書が観られる。3, 4 は、石臼である。

SK080 (第80図)

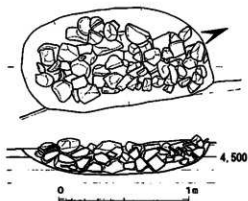
SK080は、D-5 グリッドで検出される。長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.1mを測る平面楕円形を呈する比較的浅い土坑で、土坑の中央部を中心に焼けた石を含む集石が観られる。

SK065 (第81図)

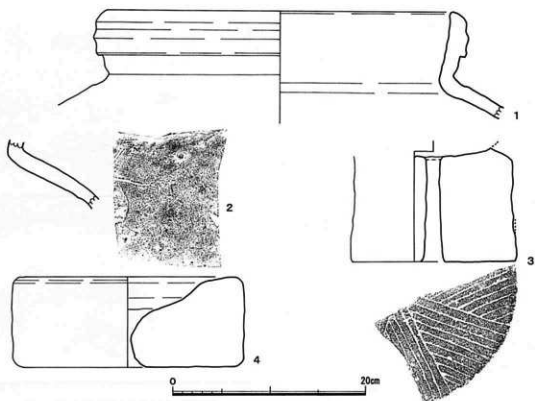
SK065は、D-6 グリッドで検出される。南半部が調査区外となり、現状で長軸1.2m、深さ0.3mを測る。土坑の東部を中心に集石が観られ、この中にはやはり焼けた石が入っている。出土遺物には、備前焼播鉢、褐釉陶器壺がある。



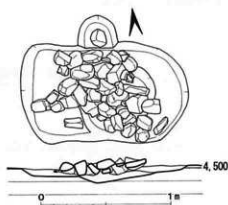
第77図 SK109遺構実測図 (1/30)



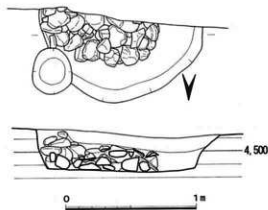
第78図 SK018遺構実測図 (1/30)



第79図 SK018出土遺物実測図(1/4)



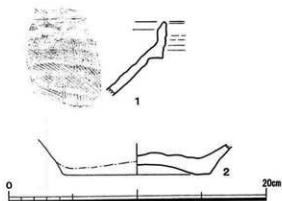
第80図 SK031遺構実測図(1/30)



第81図 SK065遺構実測図(1/30)

出土遺物 (第82図)

1 は、乗岡編年近世 1 期 b にあたる備前焼揺鉢で、内面には放射状揺り目と斜め揺り目が交差する。2 は、中国産と考えられる褐釉の壺である。底径15.0cmを測り、底部付近は露胎となる。



第82図 SK065出土遺物実測図(1/3)

SK053 (第83図)

SK053は、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る平面楕円形を呈する埋土に石（焼けた石を含む）が入る土坑である。土坑である。出土遺物には、土師器皿、染付小壺がある。

出土遺物 (第84図)

1は、京都系土師器皿である。つまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径は、15.0cmを測る。2は、染付である。内面に施軸されずクロ痕を残すことから瓶又は壺等の袋物と考えられる。

SK048 (第85図)

SK048は、G-5グリッドで検出される。長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.7mを測る平面隅丸方形の土坑である。やや深さのある土坑で、やはり焼けた石を含む多量の石が詰まった状況で検出されている。出土遺物には、土師器皿、備前焼壺、白磁皿がある。

出土遺物 (第86図)

1は、京都系土師器皿である。素口縁を呈し、法量は、復元口径で、17.2cmを測る大型のものである。2は、備前焼壺である。復元口径17.2cmを測り、肩部刻畫が入る。3は、森田分類皿E-4群の白磁皿である。復元高台径は7.2cmを測る。

SK049 (第87図)

SK049は、G-5グリッドで検出される。長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る平面楕円形を呈する土坑である。やや深さのある土坑で、やはり焼けた石を含む多量の石が詰まった状態で検出されている。出土遺物には土師器皿、染付皿、備前焼播鉢がある。

出土遺物 (第88図)

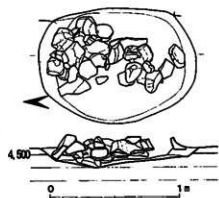
1は、京都系土師器皿である。つまみ上げ状の口縁部を呈し復元口径は、10.4cm、器高2.3cmを測る。2は、染付皿E群である。高台内に「福」の銘が入る。3は、放射状播り目に斜め播り目が交差する栗岡編年近世1期bの播鉢である。復元口径は、34.5cmを測る。

SK144 (第89図)

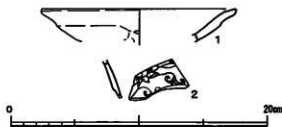
SK144は、G-5グリッドで検出される。検出段階での明確なプランは不明であったが、調査の結果、集石に添う形でプランが存在するようで、最終的に深さ0.3mの掘り方を有する土坑となった。これら集石の中にはやはり焼けた石が認められた。

SK106 (第90図)

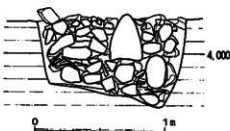
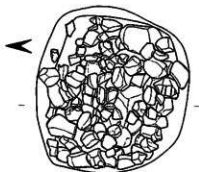
SK106は、E-2グリッドで検出される。長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.1cmを測る平面不定円形を呈する土坑である。比較的浅い土坑で、集石は、中央よりやや北側に集中する。集石の中にはやはり焼けた石が認められた。



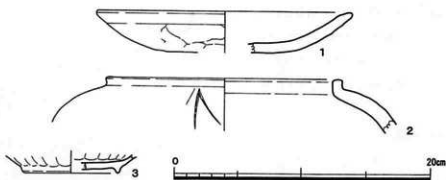
第83図 SK053遺構実測図 (1/30)



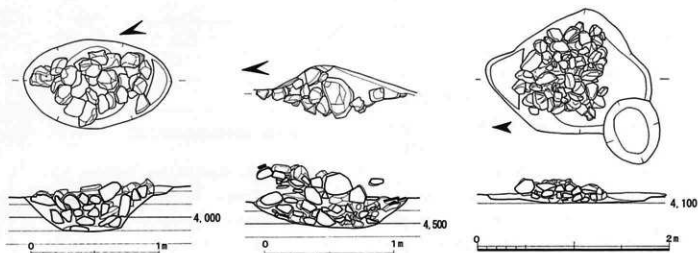
第84図 SK053出土遺物実測図 (1/30)



第85図 SK048遺構実測図 (1/30)



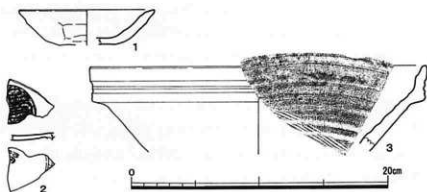
第86図 SK048出土遺物実測図(1/3)



第87図 SK049遺構実測図(1/30)

第89図 SK144遺構実測図(1/30)

第90図 SK106遺構実測図(1/40)



第88図 SK049出土遺物実測図(1/3)

SK064 (第91図)

SK064は、F-6グリッドで検出される。長軸4.0m、短軸2.1m、深さ1.0mを測る平面不定長楕円形を呈する大型の土坑である。図示していないが、ほぼ全体に焼けた石を含む石が大量に詰まった状態で検出されている。遺構の切り合い的には、最も新しい位置づけになり、表土直下に検出される火災処理土坑と同じ位置づけになると考えられる。出土遺物には、土師器皿、坏、埴埴、瀬戸・美濃窯系皿、天目碗、唐津碗、朝鮮王朝陶器碗、白磁皿、染付小坏、碗、皿、ベトナム白磁碗、ベトナム産長胴瓶、タイ四耳壺、信楽焼壺、備前焼花入、水指、徳

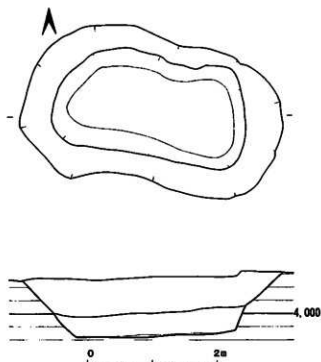
利、平鉢、壺、鉢、撞鉢、甕、不明黒釉陶器壺等に加え、スサ入り粘土に熱を受け溶けた白磁が溶着したものが出土しており、焼けた石の存在も合わせこの遺構が火災処理に使用されたことを示唆している。

出土遺物 (第92～95図)

1～10は、京都系土師器皿である。1～4は、小型のもので内面に「の」字ナデが施される。1は、素口縁のもので、口径8.0cm、器高2.0cmを測る。2～4は、つまみ上げ状の口縁部で、法量は、2で、口径8.2cm、器高2.1cm、3で、復元口径8.2cm、器高2.0cm、4で、口径8.6cm、器高2.1cmを測る。5～10は、中型のもので、内面には「2」字ナデが施される。5、7は、短く外反する口縁部のもので、5は、復元口径11.6cm、器高2.6cm、7は、口径12.0cm、器高2.2cmを測る。6は、口縁部が鋭角的で、外面指押え部との境が明瞭なもので、復元口径12.0cm、器高2.7cmを測る。8～9は、素口縁のもので、8は、復元口径11.8cm、器高2.5cm、9は、復元口径11.2cm、器高2.5cm、10は、復元口径12.4cm、器高2.7cmをそれぞれ測る。特に9については、底部外面に2次的に開けられた穴が覗かれる。11は、底部糸切り離しの土師器環である。口縁端部で端反りするもので、全体に平たいイメージである。法量は、復元口径13.8cm、器高3.1cm、底径6.4cmを測る。12、13は、手捏ね成形による増場である。2次被熱により須恵質化したもので、内面には鮎津が付着する。法量は12で、口径4.8cm、器高2.2cm、13で、復元口径9.6cmを測る。

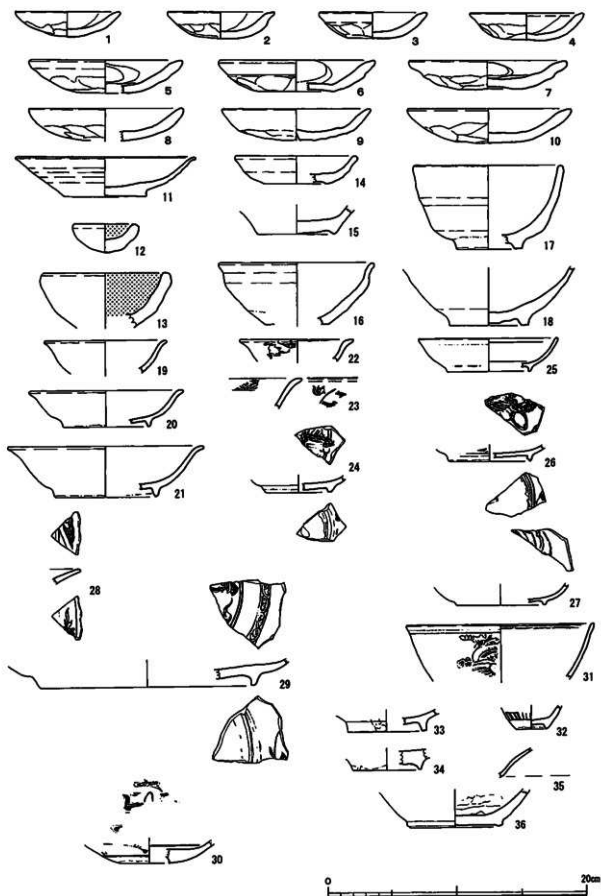
14～16は、瀬戸・美濃窯系の陶器である。14、15は、皿である。16は、天目碗である。法量は、14で、復元口径9.4cm、器高2.2cm、高台径4.6cm、15で、復元高台径6.0cm、16で復元口径12.0cmを測る。17は、唐津焼陶器碗である。暗緑色に発色する釉調で、体部下半から高台部には施釉されない。法量は、復元口径11.2cm、器高6.5cm、高台径5.0cmを測る。

18は、朝鮮王朝の陶器碗である。高台内を含む全面に施釉されるもので、2次的に熱を受け変色している。復元高台径6.1cmを測る。19～21は、森田分類白磁皿E-2群である。法量は、19で、復元口径9.4cm、20で、復元口径11.8cm、器高2.9cm、高台径6.6cm、21で復元口径15.0cm、器高3.9cm、高台径6.6cmを測る。24～30は、染付皿である。24は、小野分類のB-1群にあたる皿である。復元高台径は、5.2cmを測る。25～27は、小野分類のE群にあたる皿である。25は、復元口径10.6cm、器高2.6cm、高台径6.4cm、26は、復元高台径6.2cm、27は、復元高台径6.8cmをそれぞれ測る。28、29は、小野分類のF群にあたる皿である。28は口縁部片、29は、復元高台径16.6cmを測り、その文様構成からF群と判断した。30は、小野分類のC群にあたる皿である。復元底径は、3.0cmを測る。31、23は、小野分類のE群の碗である。31は、復元口径14.2cm、23は、口縁部が外反するE-IX群か？。22、32は、染付小皿である。22は口径8.9cm、33は、高台内及び見込み部が露胎になる漳州窯系染付碗である。復元高台径6.0cmを測る。34、35は、青白磁？である。34は、復元高台径5.2cmを測る碗で、高台内には施釉されない。35は、坏か？36は、ベトナム産白磁印花文碗である。復元高台径6.5cmを測り、内面には目跡を残す。37は、不明焼締陶器壺である。高台径7.0cmを測り、その胎土からベトナム又は中国南部に産地を求めることができるといわれている。38、39は、タイの四耳壺である。38は、復元口径15.4cmを測り、口縁部には、重ね焼きの

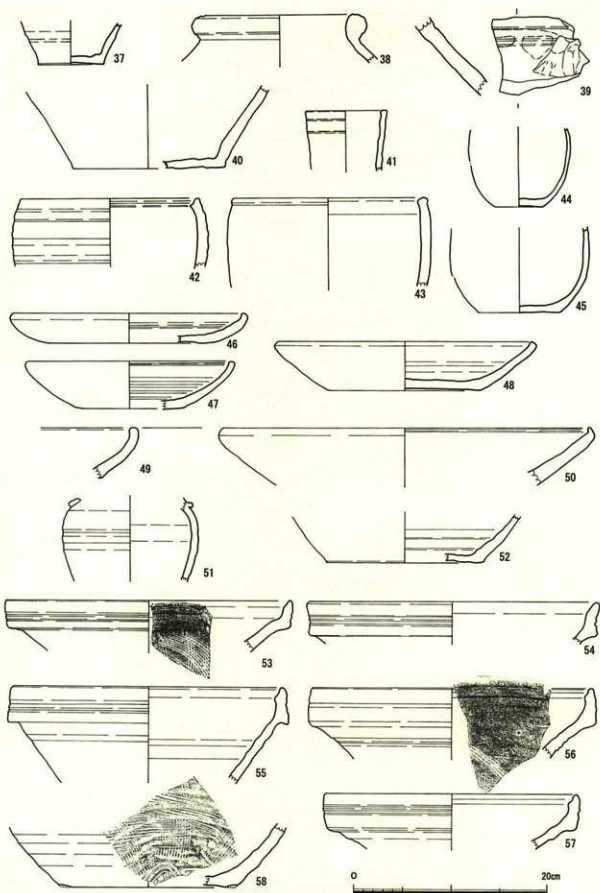


第91図 SK064遺構実測図(1/60)

18は、朝鮮王朝の陶器碗である。高台内を含む全面に施釉されるもので、2次的に熱を受け変色している。復元高台径6.1cmを測る。19～21は、森田分類白磁皿E-2群である。法量は、19で、復元口径9.4cm、20で、復元口径11.8cm、器高2.9cm、高台径6.6cm、21で復元口径15.0cm、器高3.9cm、高台径6.6cmを測る。24～30は、染付皿である。24は、小野分類のB-1群にあたる皿である。復元高台径は、5.2cmを測る。25～27は、小野分類のE群にあたる皿である。25は、復元口径10.6cm、器高2.6cm、高台径6.4cm、26は、復元高台径6.2cm、27は、復元高台径6.8cmをそれぞれ測る。28、29は、小野分類のF群にあたる皿である。28は口縁部片、29は、復元高台径16.6cmを測り、その文様構成からF群と判断した。30は、小野分類のC群にあたる皿である。復元底径は、3.0cmを測る。31、23は、小野分類のE群の碗である。31は、復元口径14.2cm、23は、口縁部が外反するE-IX群か？。22、32は、染付小皿である。22は口径8.9cm、33は、高台内及び見込み部が露胎になる漳州窯系染付碗である。復元高台径6.0cmを測る。34、35は、青白磁？である。34は、復元高台径5.2cmを測る碗で、高台内には施釉されない。35は、坏か？36は、ベトナム産白磁印花文碗である。復元高台径6.5cmを測り、内面には目跡を残す。37は、不明焼締陶器壺である。高台径7.0cmを測り、その胎土からベトナム又は中国南部に産地を求めることができるといわれている。38、39は、タイの四耳壺である。38は、復元口径15.4cmを測り、口縁部には、重ね焼きの

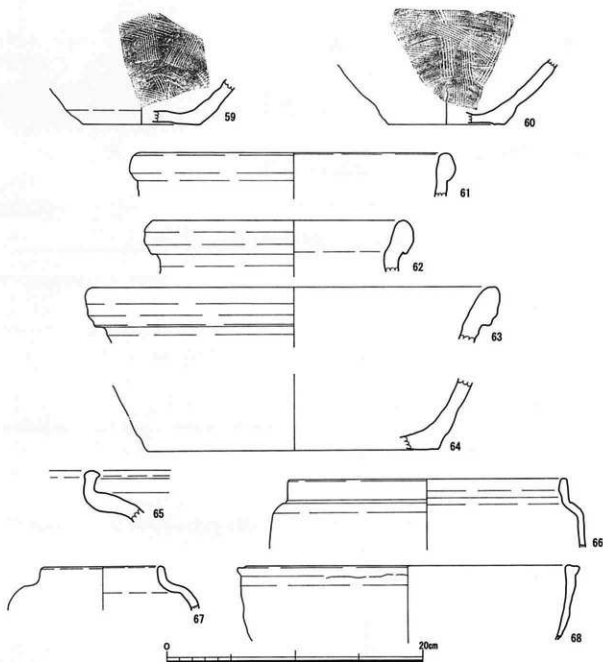


第92圖 SK064出土遺物実測圖 1 (1/3)



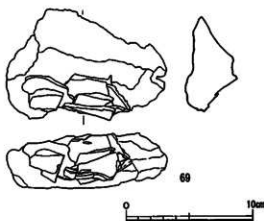
第93图 SK064出土文物实测图 2 (1/4)

痕跡が残る。39は、肩部片である。40は、信楽焼壺である。復元底径15.8cmを測る。41～65は、備前焼である。
 41は、花入れで、復元口径8.4cmを測る。42, 43は、水指である。42は、その口縁部形態から蓋がつくタイプのもので、復元口径17.4cmを測る。43は、復元口径20.0cmを測る。44, 45は、徳利である。底径は、44で5.0cm、45で8.6cmを測る。46～50は、平鉢である。46は、復元口径23.8cm、器高3.1cm、底径17.2cm、47は、復元口径21.5cm、器高5.0cm、底径11.3cm、48は、復元口径26.1cm、器高5.1cm、底径15.9cm、50は、復元口径20.0cmをそれぞれ測る。
 51は、壺である。52は、鉢で、復元底径16.4cmを測る。53～60は、放射状播目目に斜め方向の播目が交差する乗岡編年近世1期bにあたる播鉢である。53～57は、口縁部片である。53, 54は、短く立ち上がる口縁部のもので復元口径は、53で、29.6cm、54で29.8cmを測る。55～57は、長く立ち上がる口縁部のもので復元口径は、55で、28.0cm、56で、39.0cm、57で26.2cmを測る。58～60は底部片である。61～64は、甕である。61は、乗岡編年中世5期にあたるもので復元口径32.0cmを測る。62, 63は、同編年中世6期にあたり、復元口径は、62で、29.2cm、

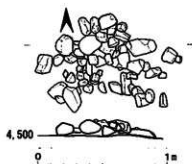


第94図 SK064出土遺物実測図3 (1/4)

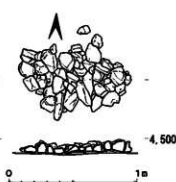
63で41.8cmを測る。64は、底部で、復元底径12.0cmを測る。65は、壺である。66は、不明黒軸陶器四耳壺である。復元口径29.0cmを測る。67は、復元口径12.2cmを測る瓦質土器茶釜である。68は、復元口径33.6cmを測る瓦質土器鉢である。69は、スサ入り粘土に熱を受け溶けた白磁が溶着したものである。溶着した白磁は、森田分類のE群にあたるものと考えられ、火災を受けた際壁土に溶着したものと考えられる。この遺物についてはその他、窯壁の耐火材として白磁を使用したものとする指摘もある。



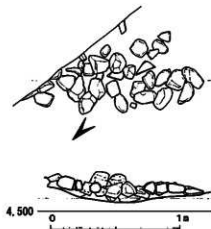
第95図 SK064出土遺物実測図 4 (1/3)



第96図 SK145遺構実測図 (1/30)



第97図 SK133遺構実測図 (1/30)



第98図 SK148遺構実測図 (1/30)

SK145 (第96図)

SK145は、D-4グリッドで検出される。明確な掘り方を伴わない集石であるが、集石の中に焼けた石が含まれることから、これまでの集石土坑とおなじ性格の遺構と考えられる。集石の範囲は、長軸1.1m、短軸0.7mを測る平面楕円形状に広がる。

SK133 (第97図)

SK133は、D-4グリッドで検出される。SK145と同じく明確な掘り方を伴わない集石である。集石の中には、やはり焼けた石が含まれており、その範囲は、長軸0.9m、短軸0.6mを測る平面楕円形状に広がる。

SK148 (第98図)

SK148は、G-4グリッドで検出される。比較的浅い掘り方を有するが、掘り方のラインは明確ではない。集石中にはやはり焼けた石が含まれており、その性格は他の集石土坑とおなじものと考えられる。その範囲は、東半部を調査区外に持つことからその全容は不明である。

3. 溝 (SD)

SD072

SD072は、C-5グリッドで検出される。その西半部をSD040に切られる形でその全容は不明であるが、深さ0.3mを測る断面「U」字状を呈する南北方向の溝と考えられる。その切り合いからSD040より古く位置づけられるもので、出土遺物には、青磁碗、土器器皿がある。

出土遺物 (第99図)

1は、上田分類のC-Ⅲ類にあたる青磁碗である。復元高台径は、5.8cmを測る。2～4は、京都系土師器皿である。2は、短く外反する口縁部で、復元口径11.8cmを測る。3、4は、つまみ上げ状の口縁部で、3で復元口径12.4cm、4で復元口径12.4cm、器高2.6cmを測る。

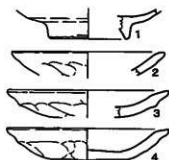
SD040

SD040は、C-5グリッドで検出される。その西半部が調査区外となるため全容は不明であるが、深さ0.2mを測る断面逆台形状を呈する南北方向の溝である。

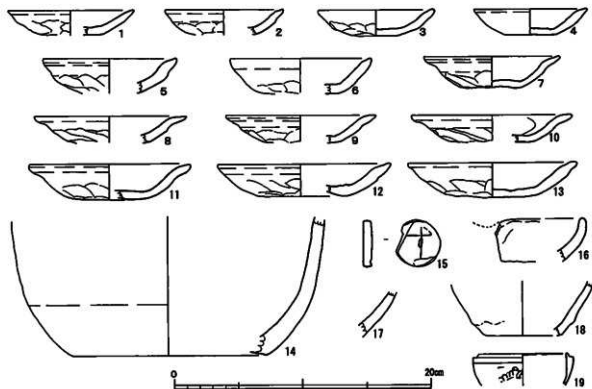
その切り合いからSD072より新しく位置づけられるもので、出土遺物には、土師器、備前焼壺、円盤状土製品、瓦質土器埴鉢、天目碗、色絵染付合子がある。

出土遺物 (第100図)

1～13は、土師器皿である。1～4は、小型のものである。1は、素口縁のもので、復元口径9.8cmを測る。2～4は、つまみ上げ状の口縁部で、2で、復元口径9.2cm、3で復元口径9.0cm、器高2.0cm、4で、復元口径8.8cm、器高2.0cmを測る。5～13は、中型～大型のもので、その口縁部形態から、小さく外反する口縁の5、つまみ上げ状の口縁部の6、13、大きく外反する口縁部の7、8、10、11、口縁部が鋭角的で、指押さえ部との境が明瞭な9、12がある。法量は、5で、復元口径10.4cm、6で、復元口径11.0cm、7で、復元口径10.4cm、器高2.4cm、8で、復元口径11.8cm、9で復元口径11.8cm、10で、復元口径12.4cm、器高2.1cm、11で、復元口径12.6cm、器高2.8cm、12で復元口径14.0cm、器高2.5cm、13で、復元口径13.0cm、器高2.7cmをそれぞれ測る。14は、備前焼壺である。復元底径15.2cmを測る。15は、径3.5cm、厚さ0.6cmを測る円盤状の土製品で、表面に「す」の焼成後



第99図 SD072出土遺物実測図(1/3)



第100図 SD040出土遺物実測図(1/3)

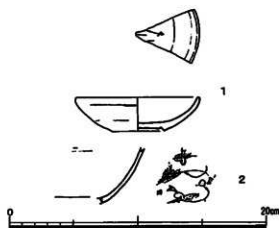
に施された刻害がある。16は、瓦質土器捏鉢の片口部分である。17, 18は、天目碗である。共に瀬戸・美濃窯系の天目碗と考えられる。19は、色絵染付の合子である。復元口径は、6.6cmを測る。

SD163

SD163は、F-5グリッドで検出される。幅0.3m、深さ0.3mを測る断面「U」字状を呈する東西方向の溝である。出土遺物には染付皿、碗がある。

出土遺物 (第101図)

1は、漳州窯系染付皿である。小野分類皿C群模倣の形態で、復元口径9.7cm、器高2.6cm、底径4.2cmを測る。2は、小野分類E群の碗である。



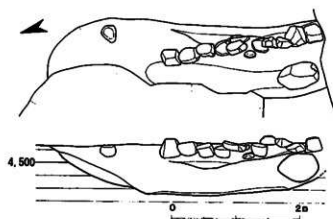
第101図 SD163出土遺物実測図 (1/3)

SD140 (第102図)

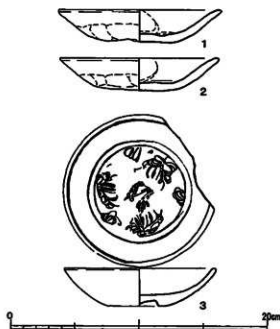
SD140は、F-6グリッドで検出される。幅0.6m、深さ0.4mを測る断面「U」字状を呈する南北溝である。その東肩部に割って、列石が確認されるが、この列石は、本来溝の東面のテラス上に存在したものと考えられる。出土遺物については、これらの列石中に京都系土師器が2枚重なった状態で検出された他、溝中に落下した大石に張り付く形で、染付皿が出土している。その切り合いからSK064より古く位置づけられる。

出土遺物 (第103図)

1, 2は、京都系土師器皿である。2枚重なる形で出土したこの土師器皿については、共に、体部から大きく外反するもので、法量は1で、口径12.6cm、器高2.5cm、2で口径12.3cm、器高2.5cmをそれぞれ測る。共に内面「2」字ナデが顕著である。3は、染付皿で見込部中央に赤色で魚形の文様が描かれる小野分類C群の皿である。口径11.7cm、器高3.0cm、底径2.9cmを測る。尚、1, 2が2枚重なる形で出土したものの内容物については、その分析結果の詳細を後述しているが、その結果、なんらかの動物遺体の可能性が高いとされている。このことは、同法量のものを2枚重ねた出土状況も含わせ、京都系土師器の在地的な使用法の一端を示す好例となった。



第102図 SD140遺構実測図 (1/30)



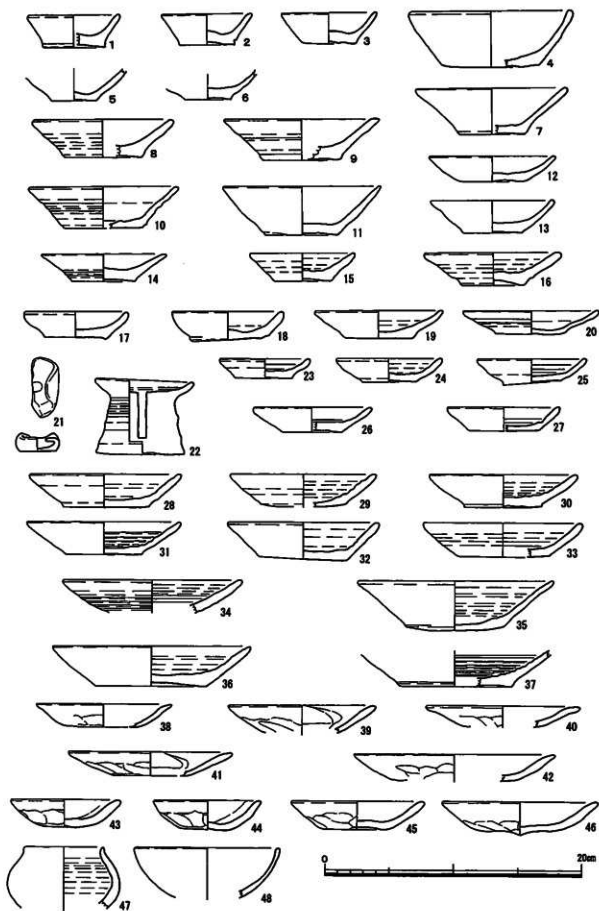
第103図 SD140出土遺物実測図 (1/30)

SD155

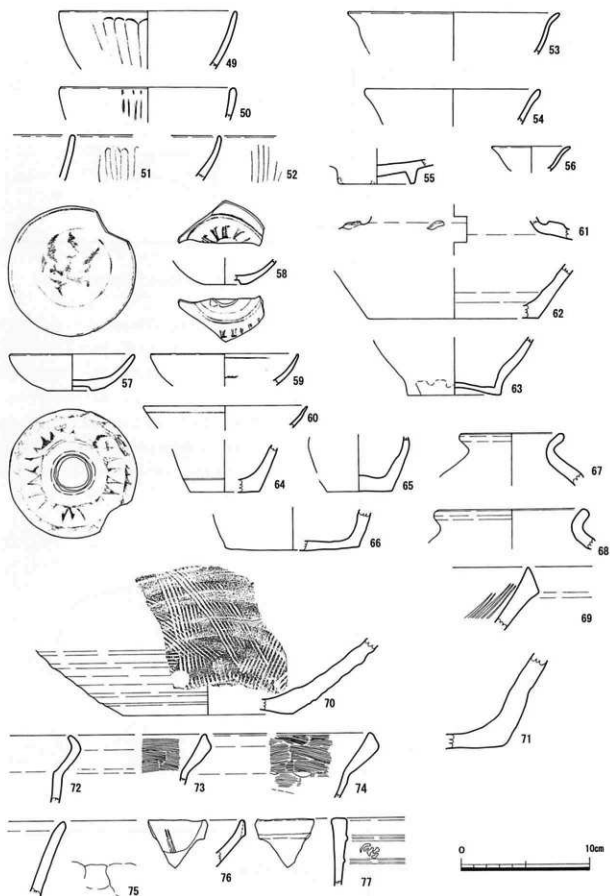
SD155は、C・D・E-4グリッドで検出される。幅4.3m、深さ1.5mを測る断面逆台形状を呈する東西溝である。その切り合いからSE151、200より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器小皿、坏、燭台、皿、小盃、碗、青磁碗、白磁小坏、染付皿、褐釉陶器四耳壺、不明黒釉陶器壺、備前焼小盃、播鉢、甕、瓦質土器鍋、播鉢、火鉢がある。尚、SD155の埋土は、複数にわたる掘り返しや、埋め戻し土の単位の存在から調査段階での切り合い遺構との区別が困難であり、結果的に切り合い関係を誤ったSE200及び、遺構東端部の小土坑等、16世紀後半～末に掛けての遺構の遺物が混入しており、後述する遺物の詳細説明にてこれらの遺物の抽出を行う。

出土遺物 (第104、105図)

1～37は、底部糸切り離しのロクロ成形の土師器群である。1～4は、口径に対する底径が広い坏aと坏bの中間形態を示すもので、法量の小さい1～3が小皿、大きい4が坏である。法量は、1で、復元口径7.0cm、2.5cm、4.7cm、2で、復元口径7.0cm、2.4cm、4.3cm、3で、口径7.4cm、2.4cm、4.2cm、4で復元口径12.6cm、器高4.3cm、底径7.6cmを測る。5～11は、底径の小さい坏bの形態を示すもので底部板状圧痕及び内面の見込ナデが認められないものである。調整は回転ナデのみである。5、6は、小皿で、底径3.6cm、3.9cmをそれぞれ測る。7～11は、坏で、法量は、7で復元口径11.6cm、器高3.6cm、底径5.0cm、8で、復元口径10.6cm、器高3.0cm、底径6.0cm、9で、復元口径12.0cm、器高3.1cm、底径6.1cm、10で、復元口径12.2cm、器高3.2cm、底径6.2cm、11で復元口径11.2cm、器高3.8cm、底径5.6cmそれぞれ測る。12は、全体に丸みを有する小皿で、復元口径9.7cm、器高2.0cm、底径4.6cmを測る。13は、やや器高が高い小皿で復元口径9.4cm、器高2.5cm、底径4.6cmを測る。14～16は、上げ底風の底部有するもので14、15、16は坏である。法量は、14が、復元口径9.6cm、器高2.6cm、底径4.9cm、15が、口径8.2cm、器高2.2cm、底径4.5cm、16が復元口径10.5cm、器高2.5cm、底径4.9cmをそれぞれ測る。17、18は、体部が丸みをもって立ち上がる小皿で、法量は、17で、口径7.8cm、器高2.0cm、底径4.8cm、18で口径8.6cm、器高2.2cm、底径6.1cmを測る。19、20は、口径に対する器高が低い物で、19で口径9.8cm、器高2.2cm、底径5.4cm、20で復元口径10.5cm、器高1.8cm、底径5.3cmを測る。21は、いわゆる耳皿である。底径は、2.8cmを測る。22は、燭台である。口径7.3cm、器高5.8cm、底径6.9cmを測り、体部にはロクロ成形の際に生じた段が残る。23～37は、底部に板状圧痕、見込部にヨコナデが施され、内面には、ロクロ成形の際に生じる工具による段を残すもので、糸切り土師器でありながら法量分化する皿の一群である。法量は、23で、口径7.0cm、器高1.5cm、底径4.5cm、24で、口径8.0cm、器高1.8cm、底径4.2cm、25で口径8.4cm、器高1.8cm、底径4.4cm、26で、復元口径9.2cm、器高1.9cm、底径4.8cm、27で、復元口径8.6cm、器高1.8cm、底径5.4cm、28で口径11.6cm、器高2.6cm、底径6.5cm、29で、復元口径11.4cm、器高2.5cm、底径6.8cm、30で、復元口径11.4cm、器高2.6cm、底径5.9cm、31で、復元口径11.8cm、器高2.5cm、底径5.8cm、32で、口径11.8cm、器高2.8cm、底径6.9cm、33で復元口径12.0cm、器高2.6cm、底径7.0cm、34で、口径13.8cm、35で、復元口径15.0cm、器高3.9cm、底径7.0cm、36で復元口径15.4cm、器高3.1cm、底径8.6cm、37で、復元底径8.6cmをそれぞれ測る。これらの土師器皿の一群について、大友館より出土する一群との比較において、全体に器高が低い皿化の傾向がみられることと、黄灰色系の胎土であることが指摘され、比較的新しい属性を示している。38～46は、京都系土師器皿である。38～42は器壁の薄い一群である。38、40、42は、大きく外反する口縁部のもので、38で、復元口径10.4cm、器高1.8cm、40で、復元口径、42で復元口径を測る。39、41は、口縁部向かい肥厚するもので、39で復元口径11.6cm、41で、復元口径12.6cm、器高1.8cmを測る。43～46は、器壁の厚い一群である。紫口縁のもので、法量は43で、口径8.5cm、器高2.2cm、44で、口径8.2cm、器高2.3cm、45で、復元口径10.4cm、器高2.2cm、46で、復元口径12.0cm、器高2.6cmを測る。47は、土師器小盃である。内面にロクロ成形の痕跡を残すもので、復元口径6.0cmを測る。48は、土師器碗である。復元口径11.2cmを測る。49～55は青磁碗である。49～52は、上田分類B-IV類の碗である。49は、やや幅広の連弁のもので、復元口径13.8cmを測る。50～52は特に、剣頭が連弁としての単位を意識しないで施されるものや、剣頭を省略したB-IV類

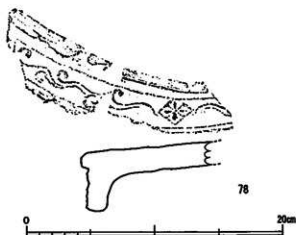


第104圖 SD155出土遺物実測圖 1 (1/3)



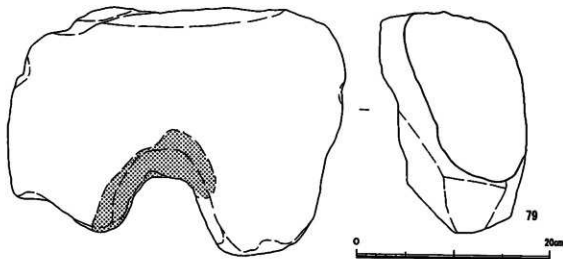
第105圖 SD155出土遺物実測圖 2 (1/3)

にあたるもので、50の復元口径は、13.6cmを測る。53、54は、口縁部が外反する上田分類D類の碗である。復元口径は、53で、16.4cm、54で、13.4cmを測る。55は、上田分類C-Ⅲ類にあたる碗で、高台径は、5.8cmを測る。56は、復元口径6.0cmを測る白磁小坏である。57～60は、染付皿である。57～59は、小野分類C群の皿にあたる。法量は、57で、口径9.8cm、器高2.9cm、底径3.5cm、58で、復元底径2.4cm、59で、復元口径11.6cmをそれぞれ測る。60は、小野分類E群の皿にあたり、復元口径12.7cmを測る。61は、不明黒釉陶器四耳壺である。62は、同じく不明黒釉陶器壺で、復元底径13.2cmを測る。63は、不明黒釉陶器壺で、復元底径7.2cmを測る。64～71は、備前焼である。64～



第106図 SD155出土遺物実測図3 (1/3)

68は、壺である。法量は、64で、復元底径5.3cm、65で、底径5.0cm、67で、復元底径10.6cm、67で、復元口径7.8cm、68で、復元口径11.4cmをそれぞれ測る。69、70は、摺鉢である。69は、乗岡編年中世4期bにあたり、70は、同近世1期bにあたる放射摺り目と斜め摺り目が交差するもので、復元底径13.0cmを測る。71は、乗岡編年中世6期にあたる壺である。72～77は、瓦質土器である。72は、防長系の鍋である。73、74は、瀬戸内系の鍋である。75は、口縁部がやや外反する鍋である。76は、玉縁状の口縁部を有する摺鉢である。77は、火鉢で、口縁部下突帯の下にスタンプによる花文が施される。78は、軒平瓦である。中心部に花菱を配した唐草文が施される。79は、宝塔の塔身部を転用した炉等の焚き口である。くりぬかれた内面及び孔部分には煤が付着している。その出土位置及び遺物の時期的な位置づけから、12、14～16、43～46、55、60～68、70～77、79が16世紀後半～末の遺構の遺物が混入したものと考えられる。



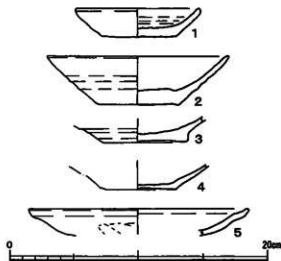
第107図 SD155出土遺物実測図4 (1/3)

SD176

SD176は、F-5グリッドで検出される。幅0.35m、深さ0.2mを測る断面「U」字状を呈する東西溝である。その切り合いからSK064、160よりも古く位置づけられる。出土遺物には、土師器小皿、坏、皿がある。

出土遺物（第108図）

1は、底部糸切り離しの土師器小皿である。復元口径9.6cm、器高2.3cm、底径5.9cmを測る。ロクロ成形の際に生じた段をナデ消す古い属性を有するものである。2、3は、底部糸切り離しの土師器坏である。2は、復元口径14.0cm、器高3.8cm、底径6.4cmを測る。3は、底径7.5cmを測る。4は、底部糸切り離しの土師器皿である。白色系の緻密な胎土に極薄の器壁を特徴とする大内系の土師器である。底径5.8cmを測る。5は、京都系土師器皿である。大きくつまみ上げる口縁部で、器壁は非常に薄い。復元口径は、16.8cmを測る。



第108図 SD176出土遺物実測図(1/3)

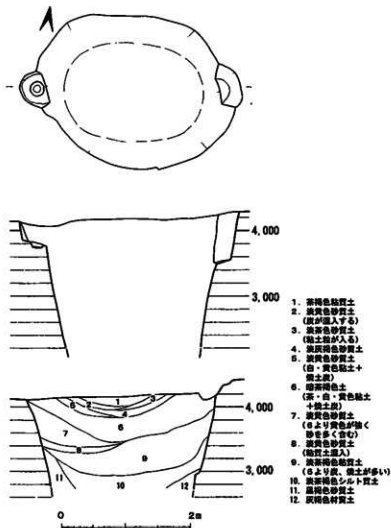
4. 井戸 (SE)

SE151 (第109図)

SE151は、D-5グリッドで検出される。長軸2.9m、短軸2.3mを測る平面楕円形の井戸で、検出面より2m下位まで掘り下げを行ったが、底面は確認されなかった。その土層観察から井筒の痕跡は確認されておらず不明である。出土遺物には、土師器小皿、皿、土師器碗、青磁碗、白磁皿、染付碗、皿、不明焼締陶器鉢、瓦質土器火鉢がある。

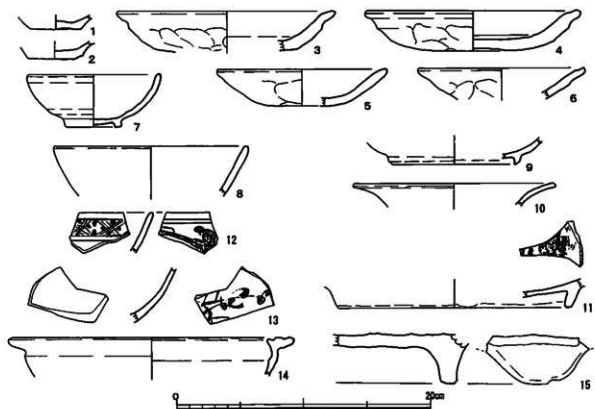
出土遺物（第110図）

1、2は、底部糸切り離しの土師器小皿である。法量は、1で、復元底径4.0cm、2で、復元底径4.2cmをそれぞれ測る。3～6は京都系土師器皿である。3は、短く外反する口縁部を呈し、復元口径16.8cmを測る。4は、つまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径16.2cm、器高3.1cmを測る。5は、素口縁のもので、復元口径13.2cm、器高2.9



第109図 SE151遺構実測図(1/60)

cmを測る。6は、つまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径12.8cmを測る。8は、復元口径15.0cmを測る上田分類B-IV類の青磁碗である。9は、復元底径9.6cmを測る森田分類E-2群の白磁皿である。10～13は、染付である。10は、白磁碗E-2群タイプのもので、復元口径15.4cmを測る。11は、染付の大皿で、復元底径17.4cmを測る。12、13は、小野分類の碗E群にあたる。14は、復元口径18.0cmを測る近年中国南部産との指摘がなされている不明焼締陶器鉢である。15は、瓦質土器火鉢の脚部である。



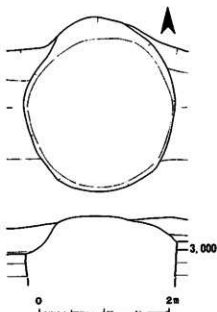
第110図 SE151出土遺物実測図(1/3)

SE200 (第111図)

SE200は、D-4グリッドで検出される。その切り合いからSD155より新しく位置づけられる井戸であるが、現場段階での切り合いの誤認のためその上部の構造は不明である。SD155底面における平面形態は、長軸2.7m、短軸2.3mの楕円形を呈する井戸で、SD155の検出面より計測した2.3m下位まで掘り下げた時点で、井戸の底面は検出されなかった。この時点における底面の平面精査では、井筒の痕跡は確認されておらず、その有無については不明である。出土遺物には、備前焼壺の他、SD155に混入した16世紀後半～末の遺物の一部があると考えられる。

出土遺物 (第112図)

1は、乗岡編年中世6期にあたる備前焼の壺である。復元口径は、80.0cmを測る。



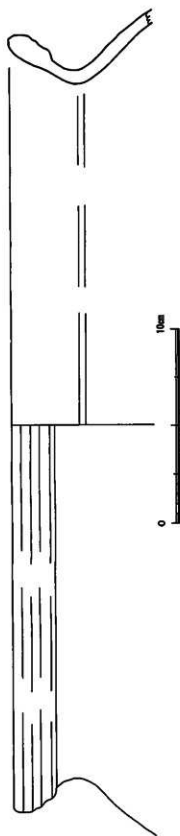
第111図 SE200遺構実測図(1/60)

SE159 (第113図)

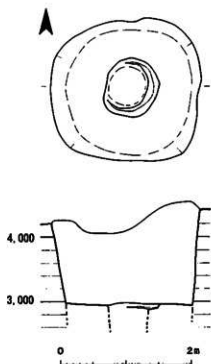
SE159は、F-4グリッドで検出される。1辺約2.2mの平面隅丸方形を呈する井戸で、検出面より1.5m下げた時点で、底面は確認されていない。その断面観察からは、その上層部分から井筒の痕跡が認められている。出土遺物には、土師器小皿、坏、皿、碗、青磁碗、備前焼播鉢、瓦質土器火鉢がある。

出土遺物 (第114図)

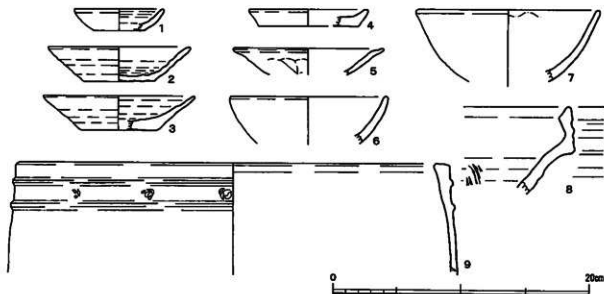
1は、底部糸切り離しの土師器小皿である。復元口径6.8cm、器高1.7cm、底径3.9cmを測る。2、3は、底部糸切り離しの土師器坏である。法量は2で、復元口径11.2cm、器高2.7cm、底径5.6cm、3で、復元口径12.0cm、器高2.7cm、底径6.0cmを測る。尚、1～3の土師器については、内面にロクロ成形時に生じた工具による段を残すものである。4は、全体に扁平な器形を呈する底部糸切り離しの土師器小皿である。復元口径9.0cm、器高1.3cm、底径8.0cmを測る。5は、京都系土師器皿である。つまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径は12.0cmを測る。6は、復元口径12.4cmを測る土師器碗である。7は、上田分類E類にあたる青磁碗である。復元口径は、14.2cmを測る。8は、乗岡編年中世6期～近世1期にあたる備前焼播鉢である。9は、瓦質土器火鉢である。口縁部下の2条の突帯に挟まれた部分にスタンプによる花文が施されている。復元口径は、32.0cmを測る。尚、全体に扁平な器形を呈する4の土師器小皿について、図示されていないが京都産と考えられる羽釜の小片も出土していることから13世紀代の遺物の混入と思われる。



第112図 SE200出土遺物実測図 (1/4)



第113図 SE159遺構実測図 (1/60)



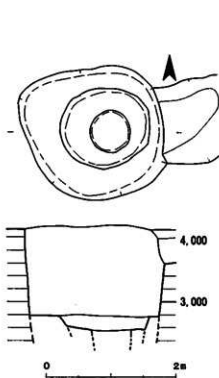
第114図 SE159出土遺物実測図(1/3)

SE188 (第115図)

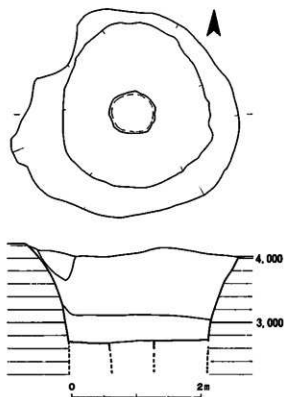
SE188は、F-4グリッドで検出される。1辺約2.1mの平面隅丸方形を呈する井戸で、検出面より1.5m下位の時点で、井筒の痕跡を確認し、完掘は行わなかった。出土遺物は小片のみで、時期を確定するものではなかったが、その平面形態や規模、井筒の検出状況が、SE159と類似することからほぼ同時期又はそれを前後する時期の所産と考えたい。

SE175 (第116図)

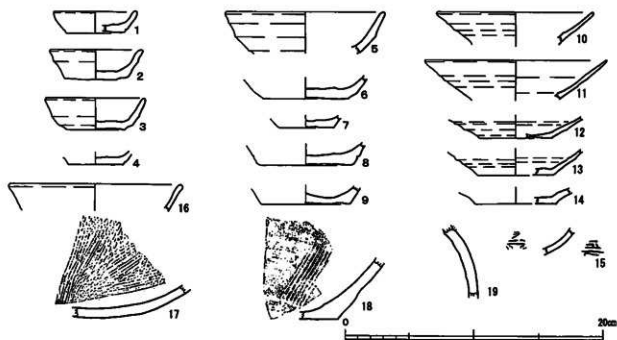
SE175は、E-5グリッドで検出される。長軸3.5m、短軸3.1mを測る平面楕円形を呈する井戸で、検出面より1.3m下位で、径0.7mの井筒の痕跡が確認されている。出土遺物には、土師器小皿、坏、朝鮮王朝青磁盤、青磁碗、瓦質土器播鉢、備前焼播鉢、不明陶器壺がある。



第115図 SE188遺構実測図(1/60)



第116図 SE175遺構実測図(1/60)



第117図 SE175出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第117図）

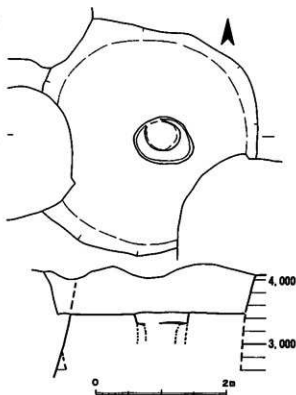
1～9は底部糸切り離しの土師器小皿と坏である。底部に板状圧痕及び内面見込ナデが施される1～6と、底部糸切り離しのみ及び、見込ナデが無い7～9の大きく2つに分類される。前者の内、1～4は小皿で、法量は、1で、復元口径6.4cm、器高1.7cm、底径4.6cm、2で、復元口径7.0cm、器高2.3cm、底径4.8cm、3で、復元口径7.6cm、器高2.5cm、底径4.4cm、4で、底径4.3cmをそれぞれ測る。5、6は、坏で、法量は、5で、復元口径12.4cm、6で、底径6.6cmを測る。後者は、7が小皿で、8、9が坏となる。法量は、7で、底径4.4cm、8で復元底径7.2cm、9で、復元底径7.0cmをそれぞれ測る。10～14は、白色系の緻密な胎土に極薄の器壁を特徴とする大内系の土師器である。法量は、10で、復元口径12.0cm、11で、復元口径14.0cm、12で、復元底径5.6cm、13で、復元底径5.8cm、14で、復元底径7.2cmをそれぞれ測る。15は、朝鮮王朝陶磁で、象眼青磁盤である。17は、瓦質土器播鉢である。18は、備前焼播鉢である。19は不明陶器壺である。その軸測から古瀬戸の可能性を有する。

SE195（第118図）

SE195は、F-4グリッドで検出される。径約3.6mを測る平面円形を呈する井戸で、検出面より0.6m下位で、径0.6～0.8mを測る井筒の痕跡が確認されて



第119図 SE195出土遺物実測図(1/3)



第118図 SE195遺構実測図(1/60)

いる。その平面形態や規模、井筒の検出状況が、SE159と類似することからほぼ同時期又はそれを前後する時期の所産と考えたい。出土遺物には、土鍾、滑石製石鍋がある。

出土遺物（第119図）

1は、土鍾である。2は、滑石製の石鍋である。

5. 道路状遺構（SF）

SF190（第120、121、122図）

SF190は、調査区の北面に沿う形で検出された東西方向に延びる道路状遺構である。この道路は、大友館推定地の北辺に沿って延びる東西道路の一部であり、その検出位置は、府内古園の現地比定作業（戦国時代府内復元想定図）の成果と一致するものであった。

調査の結果、東西に延びる溝状遺構を踏襲する形で3時期にわたる路面が形成されていることが確認された。最も古い第Ⅰ期路面は、溝状遺構の中央部、自然堆積土の上面に形成されている。やや砂の入った粘質の暗灰茶褐色土と硬質の淡暗灰褐色砂質土の2層からなり、特に路面と考えられる非常に堅く締まった感じの上層部は、溝の中心に当たり、周辺より1段低い位置になる。次に、第Ⅱ期の路面であるが、第Ⅰ期路面を覆う形で、構築されており、その路面は、版築状に積まれた硬質の粘質土の上に、やはり硬質の淡暗灰褐色砂質土の路面部が乗っている。第Ⅱ期路面の位置は、平面的には、ほぼ溝跡と同じ規模にまでひろがっており、盛土により周辺とのレベル差も無くなっている。Ⅲ期路面は、第Ⅱ期路面の中央部を更に粘質の暗灰褐色土による盛土を行い硬質の淡暗灰褐色砂質土による路面を形成している。道路幅は、第Ⅱ期道路より縮小するが、路面レベルは周辺と比べ若干高くなる。現状の土層断面の観察からは、側溝等の道路に伴う施設は確認されていない。

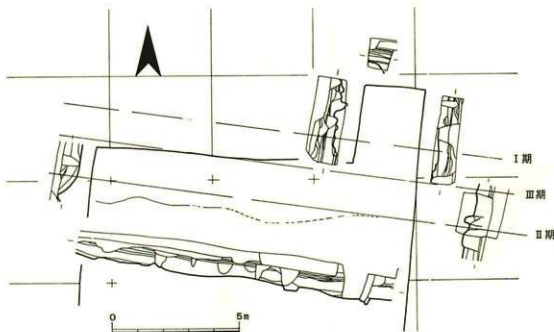
以上の道路状遺構の変遷は、第120図のとおりである。現状での路面幅は、Ⅰ期で2.1m、Ⅱ期で5.0m、Ⅲ期で3.5mを測り、小規模の第Ⅰ期から始まり、第Ⅱ期を最大幅として、第Ⅲ期には、再び縮小する変遷が推定される。

このような、既存の溝状遺構を踏襲する形で造られる道路については、近年「豊後型道路」として、古代～近世に到るまでの豊後地域特有の道路構築法として注目されている。この豊後型道路が、従来の土地の境界や、区画の機能を有する溝を道路に使用したという意味において、今回、こうした道路の構築法が中世府内町の道路に採用されていることは、16世紀中頃とされる府内町成立以前の様子を推定する上での貴重な情報と言えよう。

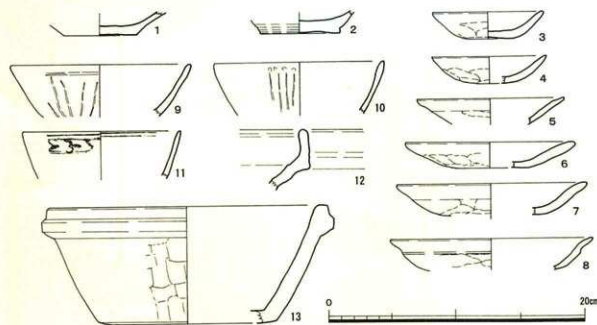
出土遺物については、土師器環、皿、青磁碗、染付碗、備前焼鉢、滑石製石鍋がある。これらの遺物は、随位別に取り上げたものではないが、大きく道路形成以前の溝を含めた道路状遺構の存続幅を示す資料として、注目される。

出土遺物（第123図）

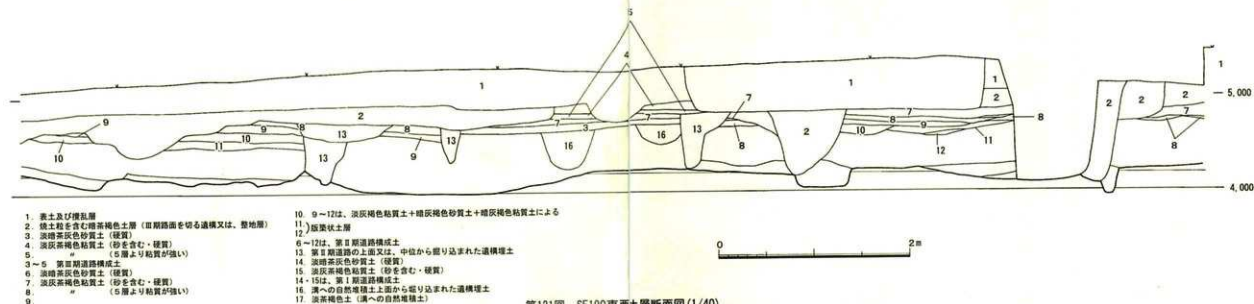
1、2は、底部糸切り離しの土師器環である。共に見込みナデ及び底部の板状圧痕は観察されない。法量は、1で、底径5.1cm、2で、底径6.6cmをそれぞれ測る。3～8は、京都系土師器皿である。薄い器壁の5、6厚い器壁3、4、6、7があり、口縁部形態では、素口縁の3、4、つまみ上げ状の口縁部の5、口縁部に向かい肥厚する6、大きく外反する7、口縁部が鋭角的で、外面指押さえ部との境が明瞭な8に分類することが可能である。法量は、3で、復元口径8.4cm、器高2.1cm、4で、復元口径8.4cm、器高2.1cm、5で、復元口径11.1cm、6で、復元口径13.0cm、器高2.0cm、7で、復元口径14.8cm、8で口径16.0cmをそれぞれ測る。9、10は、青磁碗である。ともに上田分類のB-Ⅳ類にあたる碗で、9は、剣頭が省略された幅広の連弁のもので、復元口径14.2cm、10は、剣頭が連弁としての単位を意識しないで施されているもので、復元口径13.2cmを測る。11は、小野分類E群にあたる染付碗で、復元口径、12.4cmを測る。12は、乗岡編年中世6期の備前焼鉢である。13は、滑石製の石鍋で、森田分類のC-2類にあたる。復元口径20.6cm、器高9.2cm、底径14.0cmを測る。



第120図 SF190遺構全体図 (1/150)

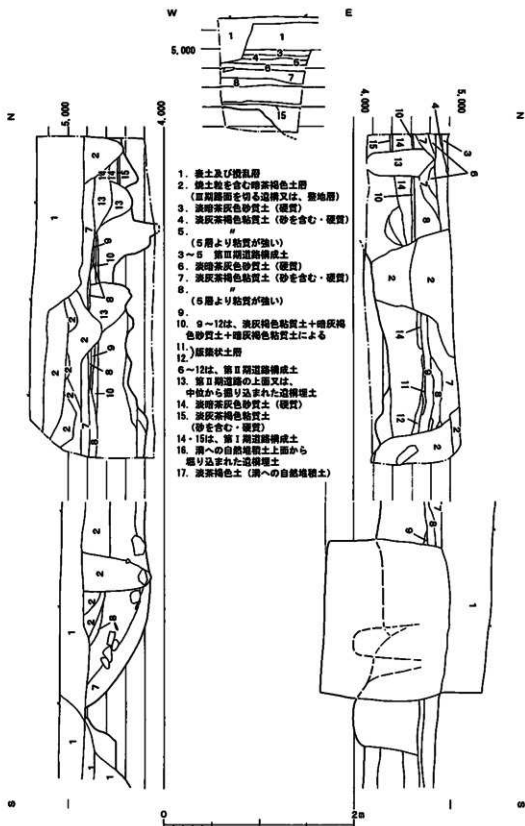


第123図 SF190出土遺物実測図 (1/3)



第121図 SF190東西土層断面図 (1/40)

1. 家土及び埋込層
2. 焼土粒を含む褐色土層 (II期道路を切る遺構又は、埋込層)
3. 波状茶灰色砂質土 (硬質)
4. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)
5. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)
6. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)
7. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)
8. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)
9. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)
10. 9~12は、波状茶灰色砂質土+埋込層砂質土+埋込層砂質土による
11. 埋込層砂質土
12. 埋込層砂質土
13. 9~12は、第II期道路構成土
14. 第II期道路の上層又は、中位から取り込まれた遺構埋土
15. 波状茶灰色砂質土 (硬質)
16. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)
17. 波状茶灰色砂質土 (砂を含む・硬質)



第122図 SF190南北・東西土層断面図 (1/40)

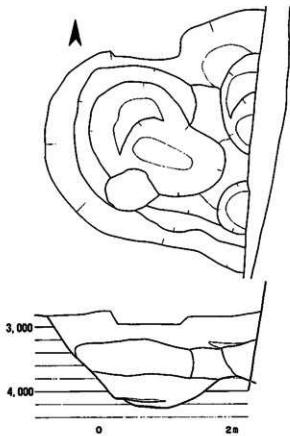
6. 不明遺構 (SX)

SX165 (第124図)

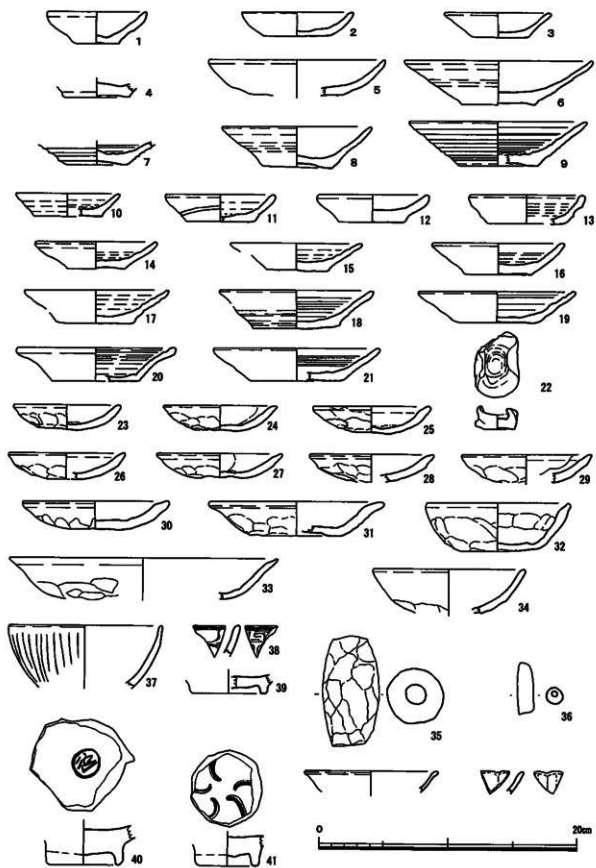
SX165は、G-1グリッドで検出される。複数の土坑が重複した大型遺構で、南北4.0m、東西3.1m以上を測る平面不定円形を呈し、深さは、1.0m～1.5mを測り、平面精査及びその土層観察等から、この遺構が、古い土坑が埋まりきらないうちにあらたな土坑が掘られるという形で形成されていることが確認された。出土遺物については、土師器小皿、杯、皿、碗、青磁碗、白磁皿、染付皿、褐釉陶器、瓦質土器火鉢、備前焼等がある。これらの遺物群は、時期幅を有しており、この時期差がSX165形成の時期幅を示すものと考えられる。

出土遺物 (第125～127図)

1～22は、底部糸切り跡の土師器である。1～4は、小皿で、1は、復元口径7.6cm、器高2.6cm、底径3.4cmを測る。2は、全体に丸みを帯びた扁平な器形を呈し、復元口径8.6cm、器高2.9cm、底径5.3cmを測る。3は、口径8.3cm、器高2.0cm、4.2cmを測る。4は、厚めの上げ底風の底部で、底径5.0cmを測る。5～9は、杯で、5は、全体に丸みを帯びた扁平な器形を呈し、復元口径13.7cm、器高2.7cm、底径7.0cmを測る。6は、口径14.4cm、器高3.4cm、底径5.8cmを測る。7～9は、上げ底風の底部を有するものである。法量は、7で、底径4.8cm、8で、口径11.6cm、器高3.2cm、底径5.6cm、9で、復元口径13.6cm、器高6.0cm、3.4cmをそれぞれ測る。10～21は、法量分化した皿で、内面にクロコ成型時に生じた段を残し、内面見込部にナデ、底部には板状圧痕跡が残る。法量は、10で、復元口径8.0cm、器高1.8cm、底径5.2cm、11で、復元口径8.4cm、器高2.1cm、底径5.3cm、12で、口径8.8cm、器高2.1cm、底径5.1cm、13で、復元口径8.6cm、器高2.2cm、底径5.8cm、14で、復元口径9.3cm、器高2.1cm、底径4.5cm、15で、復元口径10.4cm、器高2.0cm、底径5.0cm、16で、口径10.3cm、器高2.4cm、底径5.1cmを測る。17で復元口径11.0cm、器高2.6cm、底径6.0cm、18で、復元口径12.4cm、器高6.8cm、底径2.9cm、19で、復元口径11.9cm、器高2.4cm、底径5.8cm、20で、復元口径12.5cm、器高2.5cm、底径6.8cm、21で、口径12.5cm、器高2.5cm、底径7.4cmをそれぞれ測る。22は、耳皿である。内面にクロコ成型時に生じた段を有し、底径は、3.1cmを測る。23～33は京都系土師器皿である。23～29は小型のもので、口縁部形態は、素口縁の23、つまみ上げ状の口縁部を呈する24～29がある。法量は、23で、口径8.2cm、器高1.9cm、24で、口径8.9cm、器高2.0cm、25で、口径9.0cm、器高2.2cm、26で、復元口径9.0cm、器高2.1cm、27で、復元口径9.6cm、器高1.9cm、28で、復元口径9.4cm、29で、復元口径10.0cm、をそれぞれ測る。30、31は、中型のものである。30は、つまみ上げ状の口縁部を呈し、復元口径11.2cm、器高2.1cmを測る。31は、大きく外反する口縁部を呈し、復元口径13.2cm、器高2.6cmを測る。32は、つまみ上げ状の口縁部に器高が高い碗形態を呈するもので、口径11.0cm、器高3.8cmを測る。33は、大型のもので、器壁が薄く、つまみ上げ状の口縁部を有する。復元口径20.0cmを測る。34は、土師器碗である。体部下半部に、ヘラ削りが施されるもので、復元口径11.6cmを測る。35、36は、土罐である。35は、大型の土罐で、全長8.6cm、最大径で4.4cmを測る。36は、小型の土罐で、

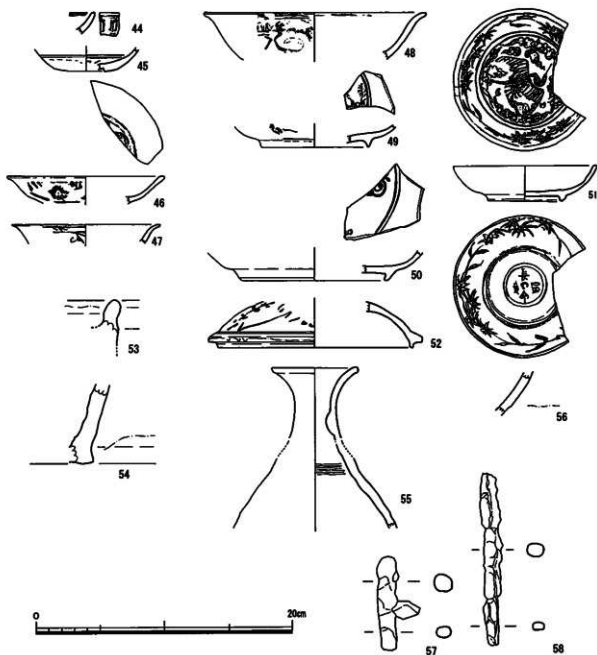


第124図 SX165遺構実測図 (1/60)



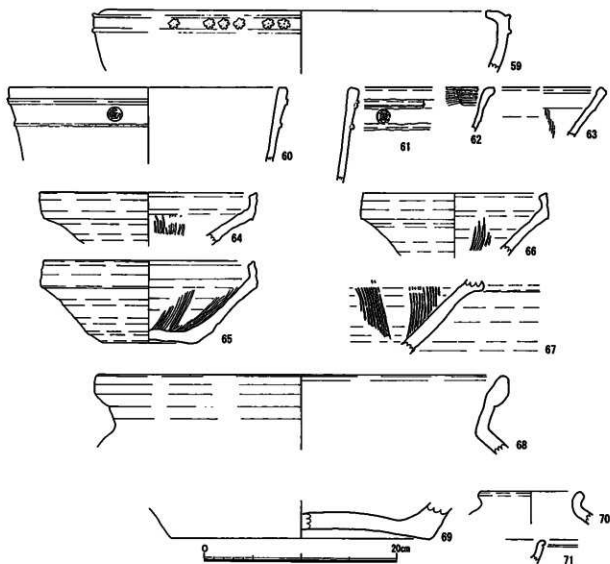
第125圖 SX165出土遺物実測圖 1 (1/3)

全長4.0cm、最大径で、1.2cmを測る。37～41は、青磁碗である。37は、上田分類のB-IV類にあたり、復元口径11.9cmを測る。38は、C-II類にあたる。39は、高台皿付から高台内部にかけて露胎となるもので、復元高台径5.8cmを測る。40、41は、E類か？、40は、見込部に「徳」銘がスタンプされるもので、高台径5.4cmを測る。41は、工具による文様が描かれるもので、高台径4.8cmを測る。42、43は、白磁皿である。42は、森田分類E-2群の皿で、復元口径10.0cmを測る。43は、E-4群の皿である。44～51は、染付皿である。44、45は、小野分類C群にあたるもので、45は、復元底径2.8cmを測る。46～48は、同B-1群の皿である。46は、復元口径12.1cm、47は、復元口径11.4cm、48は、復元口径17.4cm、をそれぞれ測る。49～51は、同分類E群にあたるもので、49で、復元高台径8.4cm、50で、復元高台径11.4cmを測る。51は、ほぼ完形の資料で、高台内面に「長命富貴」の銘が入る。法量は、口径11.0cm、器高2.8cm、高台径5.8cmを測る。52は、染付蓋である。陶器質の胎土に貫入が入った透明感の無い釉から涼州窯系の染付と考えられるもので、口縁部端部から内面にかけては露胎である。法量は、



第126図 SX165出土遺物実測図2 (1/3)

復元口径15.0cmを測る。53, 54は、不明褐釉陶器壺である。その軸測から同一個体として認識される遺物である。55は、朝鮮王朝産の陶器瓶である。復元口径6.6cmを測り、内面には、叩き痕跡が残る。56は、瀬戸・美濃窯産天目碗である。57, 58は、鉄釘である。59～61は、瓦質土器火鉢である。59は、口縁部が内側に向かって突出するもので、口縁部下の2条の突帯の間にはスタンプによる花文が入る。復元口径は、を測る。60, 61は、直立する口縁部のもので、口縁部下の2条の突帯の下にはスタンプによる文様が施されている。復元口径は、60で、26.4cmを測る。62は、瓦質土器鍋である。63は、須恵質の擂鉢である。64～71は備前焼である。64～67は、樂岡編年中世6期の擂鉢である。法量は、64で、復元口径22.8cm、65で、復元口径22.2cm、66で復元口径18.6cmをそれぞれ測る。68, 69は、同編年の中世6期にあたる甕である。法量は、68で、復元口径42.4cm、69で、復元口径25.2cmを測る。70は、復元口径10.2cmを測る小壺である。71は、水指か？



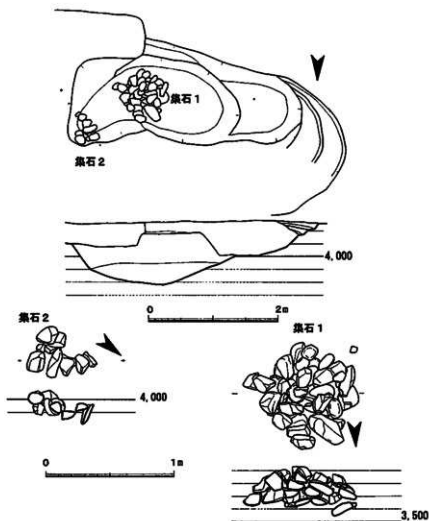
第127図 SX165出土遺物実測図3 (1/4)

SX121 (第128図)

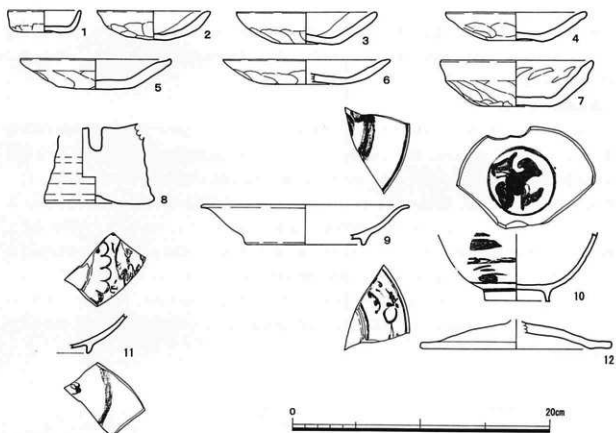
SX121は、F-4グリッドで検出される。その上面を擾乱によって失われており、平面形の詳細は不明であるが、現状で、長軸4.2m、短軸1.5m。深さ1.0mを測る。その最深部には、2カ所の集石が存在している。出土遺物には、土師器皿、燵台、染付皿、碗、瓦質土器蓋、鍋、備前焼花入、壺、播鉢、甕がある。

出土遺物 (第129、130図)

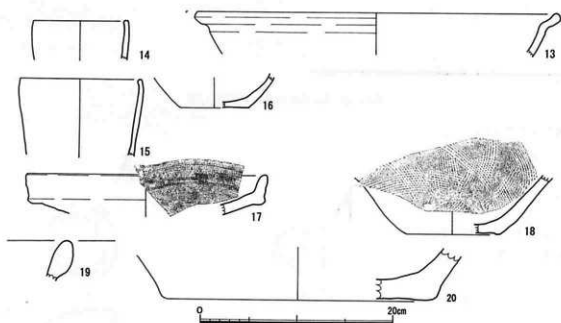
1～7は、京都系土師器皿である。1は、焼塩壺の蓋としての報告例もあるものですが、近年焼塩壺本体を伴わない出土例が増えていることから、今回は、小皿としてあつかう。法量は、口径5.6cm、器高1.7cmを測る。2、3、5、6は、つまみ上げ状の口縁部を有するもので、法量は、2で、口径8.7cm、器高2.3cm、3で、口径10.9cm、器高2.5cm、5で、復元口径11.6cm、器高2.5cm、6で、復元口径13.0cm、器高1.9cmを測る。4は、短く外反する口縁部のもので、口径10.8cm、器高2.2cmを測る。7は、つまみ上げ状の口縁部に碗形態を示すもので、口径11.6cm、器高3.6cmを測る。8は、底径8.0cmを測る燵台である。前述の京都系土師器と同じ白色系の胎土に非ロクロによる成形がなされたもので、赤色系胎土によるロクロ成形の燵台との比較において注目される遺物である。底径は8.5cmを測る。9は、小野分類B-1群にあたる染付皿である。復元口径16.0cm、器高3.1cm、高台径9.0cmを測る。10は、同分類のE群とC群の中間形態の碗である、高台径5.0cmを測る。11は、同分類のC群にあたる碗である。12は、復元口径14.6cmを測る瓦質土器の蓋である。13は、復元口径37.2cmを測る瓦質土器鍋である。玉縁状の口縁部に体部はへら削りが施される。14～20は、備前焼である。14、15は花入れである。法量は、14で復元口径9.8cm、15で、復元口径12.6cmを測る。16は、徳利で、復元底径7.1cmを測る。17、18は、播鉢である。共に東岡編年近世1期bにあたるもので、17で、復元口径24.8cm、18で、復元底径8.8cmを測る。19は、同編年中世6期にあたる甕である。20は同編年近世1期にあたり、復元底径28.2cmを測る。



第128図 SX121遺構実測図 (1/60、1/30)



第129図 SX121出土遺物実測図 1 (1/3)



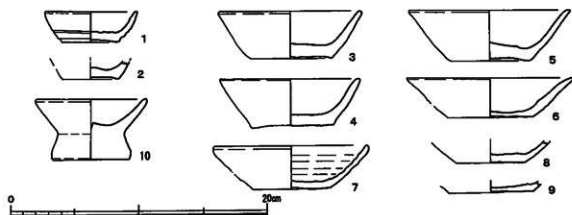
第130図 SX121出土遺物実測図 2 (1/4)

SX196

SX196は、D-5 グリッドで検出される。深さ0.3m程の大型の掘り込みで、その切り合いと、遺構の南半部が調査区外となるため遺構の全容は不明である。SE195より古く位置づけられる。出土遺物には、土師器小皿、付。燭台がある。

出土遺物 (第131図)

1～10は、底部系切り離しの土師器である。1, 2は、小皿である。1は、見込ナデ及び底部に板状圧痕が残るもので、口径9.6cm、器高2.3cm、底径4.4cmを測る。2は、見込みナデ及び底部の板状圧痕が無いもので、底径4.4cmを測る。3～9は坏である。3～6は、見込ナデ及び底部の板状圧痕が観られないもので、法量は、3で、復元口径11.1cm、器高3.6cm、底径6.4cm、4で、口径10.9cm、器高6.5cm、底径3.3cm、5で、復元口径12.6cm、器高4.0cm、底径6.0cm、6で、復元口径12.8cm、器高6.0cm、底径6.5cmを測る。7は、内面にクロロ成型時に生じた段を荒くナデ消した痕跡が認められるもので、見込ナデ及び底部の板状圧痕が認められる。復元口径12.0cm、器高3.4cm、底径6.1cmを測る。8は、見込ナデ及び底部の板状圧痕が認められるもので、底径5.4cmを測る。9は、白色系の胎土に薄い器壁を特徴とする大内系の土師器皿である。復元底径6.6cmを測る。10は、燭台である。口径8.6cm、器高4.7cm、底径6.0cmを測る。皿部の中央には窪みが存在する。その技法及び形態から古い属性を有する燭台である。



第131図 SX196出土遺物実測図 (1/3)

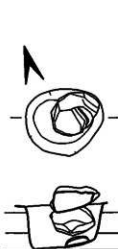
7. 柱穴・小穴 (Pit)

Pit 1 (第132図)

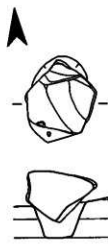
Pit 1は、F-3 グリッドで検出される。柱穴内に3段の石が積まれており、最上段の石は、地表面に石が露出し、礎石状を呈する。柱穴は、長軸0.4m、短軸0.35m、深さ0.2m平面楕円形を呈する掘り方である。

Pit 2 (第133図)

Pit 2は、G-3 グリッドで検出される。柱穴をふさぐような形で礎石状の石が



第132図 Pit1遺構実測図 (1/20)



第133図 Pit2遺構実測図 (1/20)

付設されているもので、柱穴は、径0.25m、深さ0.2mの円形を呈する掘り方である。

Pit 3 (第134図)

Pit 3は、G-1グリッドで検出される。攪乱等によりその全容は不明であるが、長軸1.1m、深さ0.1mを測る浅い掘り方に礎石状の扁平な石が据えられている。

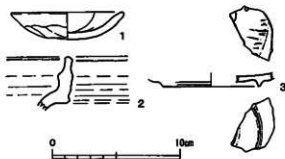
上述した建物礎石の可能性を有する遺構の関連については、全ての礎石の上面レベルにばらつきがあることに加え、Pit 1とPit 2が礎石の中心間で、2.8m、Pit 2とPit 3が同じく5.7mを測り、その間隔が広いことからこれらの礎石をもって一連の建物とすることは、現状では無理であると考えたい。

Pit 4 (第135図)

Pit 4は、C-5グリッドで検出される。柱穴の中に石が詰まった柱の根石状の遺構である。柱穴は、径0.6m、深さ0.2mを測る平面円形を呈する掘り方である。

Pit 5 (第136図)

Pit 5は、D-4グリッドで検出される。柱穴の中に石が詰まった柱の根石状の遺構である。柱穴は、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る平面楕円形を呈する掘り方である。出土遺物には、土師器皿、備前焼播鉢、染付皿がある。



第137図 Pit5出土遺物実測図(1/3)

出土遺物 (第137図)

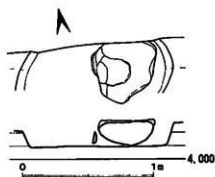
1は、京都系土師器皿である。素口縁を呈するもので、口径8.6cm、器高2.1cmを測る。2は、備前焼播鉢で、乗園編年中世6期にあたる。3は、小野分類のE群にあたる染付皿である。復元高台径は、7.4cmを測る。

Pit 6 (第138図)

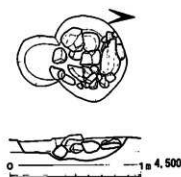
Pit 6は、E-4グリッドで検出される。柱穴の中に石が詰まった柱の根石状の遺構である。柱穴は、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.3mを測る平面楕円形を呈する掘り方である。

Pit 7 (第139図)

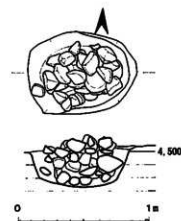
Pit 7は、C-4グリッドで検出される。柱穴の中に石が詰まった柱の根石状の遺構である。柱穴の掘り方は、長軸0.6m、短軸0.5m、平面楕円



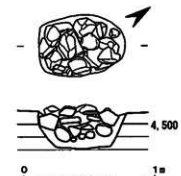
第134図 Pit3遺構実測図(1/30)



第135図 Pit4遺構実測図(1/30)



第136図 Pit5遺構実測図(1/30)



第138図 Pit6遺構実測図(1/30)

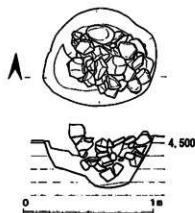
形を呈し、深さは、テラスを有し0.2~0.4mを測る。出土遺物には、石臼、備前焼播鉢、不明土師質土器がある。

出土遺物 (第140図)

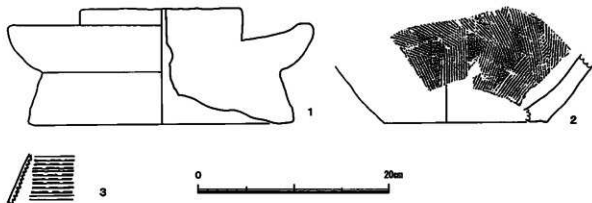
1 は、茶臼の下臼である。復元播面径16.8cm、受け部径28.4cm、底径28.0cmを測る。2 は、備前焼播鉢である。放射播目に斜め播目が交差する乗岡編年近世1期bの播鉢で、復元底径17.0cmを測る。3 は、不明土師質土器である。

Pit 8 (第141図)

Pit 8 は、D-3 グリッドで検出される。柱穴の底面に集石が観られるもので、やはり柱の根石状の施設と考えられる。柱穴は、1 辺約0.8mの隅丸方形を呈し、深さは0.8mを測る。出土遺物には、染付碗、備前焼甕、播鉢がある。



第139図 Pit7遺構実測図 (1/30)



第140図 Pit7出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物 (第142図)

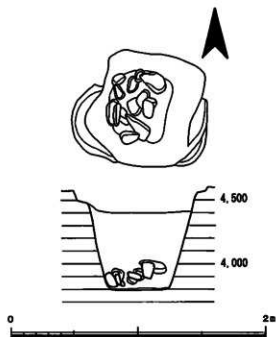
1 は、小野分類E群にあたる染付碗である。底径5.2cmを測る。2~4 は、備前焼である。2 は、乗岡編年の近世1期にあたる甕である。肩部に刻畫が観られるもので、復元口径31.4cmを測る。3、4は、播鉢である。3 は、放射播目が施される乗岡編年中世6期の播鉢で、復元底径9.0cmを測る。4 は、放射状播目に斜め播目が交差する同編年の近世1期bの播鉢で、復元口径19.8cmを測る。

Pit 9

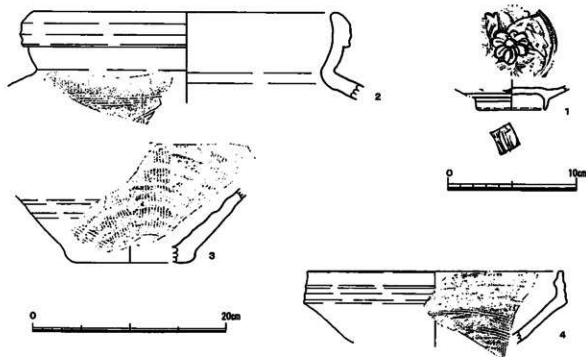
上記の柱穴の他、京都系土師器皿、染付碗等遺物を出土した小穴 (Pit 9) がある。以下、Pit 9 出土遺物の詳細について記す。

出土遺物 (第143図)

1、2 は、京都系土師器皿である。1 は、短く外反する口縁部のもので、復元口径8.4cm、器高2.4cmを測る。2 は、碗形態のつまみ上げ状の口縁部を呈す



第141図 Pit8遺構実測図 (1/30)

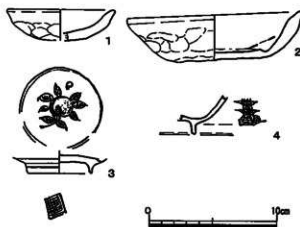


第142図 Pit8出土遺物実測図(1 1/30、2~3 1/4)

るものである。復元口径13.6cm、器高3.6cmを測る。
3、4は、小野分類E群の染付碗である。法量は、
3で、高台径4.8cmを測る。

Pit061 (第144図)

Pit061は、D-6グリッドで検出される。長軸0.7m、短軸0.5mを測る平面楕円形を呈する小穴で、深さは0.7mを測る。その切り合いからSK042より古く位置づけられる。検出面より0.2m下位に完形の京都系土師器が埋置され、その下層から、底部糸切り離しの土師器、京都系土師器、破砕した硯が出土している。この出土状況からなんらかの特殊遺構である可能性を有する小穴である。



第143図 Pit9出土遺物実測図(1/3)

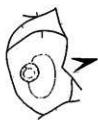
出土遺物 (第145図)

1、2は、底部糸切り離しの土師器で、共に見込みナデ及び底部の板状圧痕は観られない。1は、小皿で復元口径10.0cm、器高1.8cm、底径4.0cmを測る。2は、坏で、復元口径13.4cm、器高3.2cm、底径4.8cmを測る。3、4は、京都系土師器の皿である。共に内面「2」字ナデが施されるもので、法量は、3で、口径10.8cm、器高2.0cm、4で、口径14.0cm、器高2.4cmを測る。5は、赤間硯である。全長18.6cm、全幅8.0cm、厚さ2.4cmを測る。特に底部糸切り離しの土師器と京都系土師器の資料について、共に大小2法量であることに注目したい。

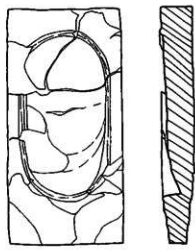
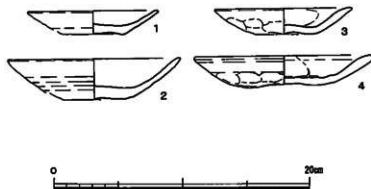
8. 包含層出土遺物

今回の調査では、複雑な整地の状況に加え、複雑な遺構の切り合い状況から、各整地層及び遺構に帰属できない遺物が一定量生じた。以下、これら遺物についての詳細を記し、後に触れる出土遺物の型式学的な作業において、その位置づけを行いたい。

1～68は、底部に糸切り離し痕が残るロクロによって成形された土師器の一群である。1～20、33は、全体に逆「ハ」字状を呈する、太宰府分類の「**杯（小皿）b**」の形態を示すもので、調整では、見込ナデが施されず、底部の板状圧痕も認められない。1～5、33は、全体に大型で、器高が高い杯と小皿の一群である。6から12は、器高が低く全体の法量も小さくなった杯と小皿の一群である。13～20は、更に器高が低く、皿化が進んだ一群で、特に20の資料に観るよう、法量分化した可能性のある一群である。21～28は、同じく杯の形態を示すもので、内面及び外面にロクロ成型時に生じた段を残すもので、見込ナデ、板状圧痕は認められない。21～24は、全体に大型で、器高が高い杯と小皿の一群である。25～28は、上げ底風の底部に、器高が低く全体の法量も小さくなる杯と小皿の一群である。29は、扁平な器形に、体部が大きく外反して立ち上がる杯である。見込ナデ及び底部の板状圧痕は認められない。30は、扁平な器形に丸みをもって立ち上がる体部を呈する小皿である。見込ナデ及び底部の板状圧痕は認めら

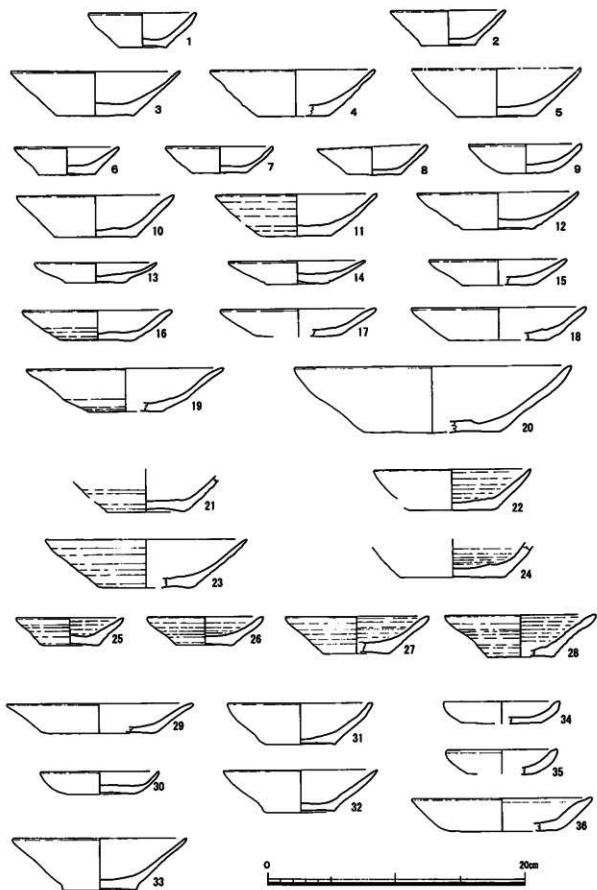


第144図 Pit061遺構実測図(1/30)



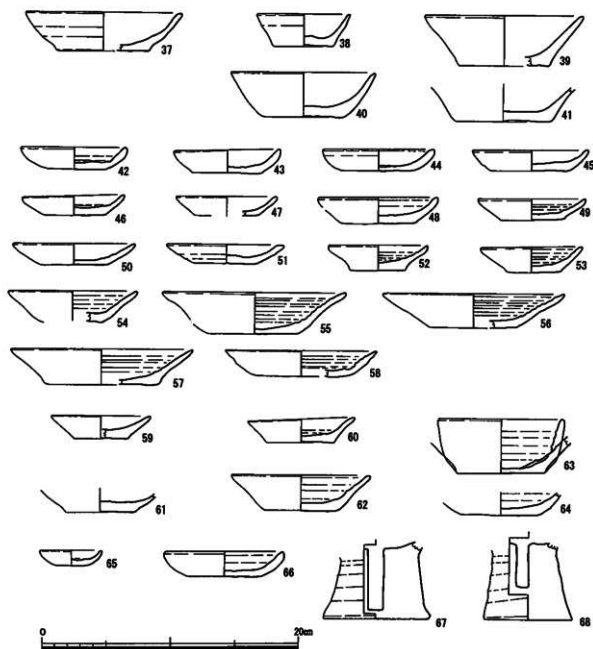
第145図 Pit061出土遺物実測図(1/3)

れない。31、32は、杯の形態で、見込ナデと底部の板状圧痕が認められないもので、特に内面のナデが巴状を呈するものである。34～36は、口縁部の仕上げの調整において、京都系土師器との共通性が指摘される小皿と杯である。37は、全体に扁平な器形の杯で、体部外面の中位に稜を有する。見込ナデ及び底部の板状圧痕は認められない。38～41は、器高は高いが、口径に対する底径が大きい小皿と杯の一群である。見込ナデ及び底部の板状圧痕は認められない。42～45、48は、扁平な器形に丸みをもって立ち上がる体部を呈する小皿である。見込ナデ及び底部の板状圧痕が認められ、内面には、ロクロ成型時の段を若干残す一群である。46～58は、見込ナデ及び底部の板状圧痕が認められ、内面には、ロクロ成型時の段を残す一群である。法量分化の可能性が指摘されるもので、やや器高の高いものや、器高が低く皿化したものが認められる。59～64は、見込ナデ及び底部の板状圧痕が認められるものである。内面には、ロクロ成型時に生じた工具等によるものではないと考えられる浅い段が残る小皿と杯である。65、66は、扁平な器形に丸みをもって立ち上がる体部を呈する。見込ナデ及び底部の板状圧痕は認められず、内面には、ロクロ成型時の段を若干残す小皿である。67、68は、底部に糸切り離し痕が残るロクロ成形による燵台である。

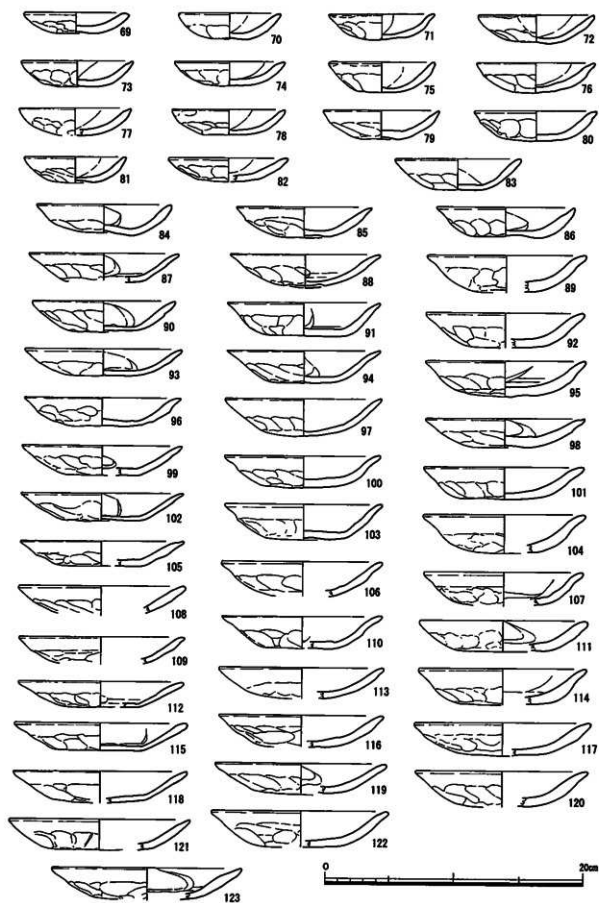


第146图 包含层出土物突洞图 1 (1/3)

69～142は、京都系土師器の皿である。69～82は、小型のもの（口径で、7.8cm～9.6cmを測る）で、内面に「の」字ナデが施される。口縁部形態には、「素口縁」「つまみ上げ状口縁」「小さく外反する口縁」がある。器壁の「薄いもの」と「厚いもの」が存在する。83～123は、中型からやや大型のもの（口径で、9.8cm～14.8cmを測る）で、内面には「2」字ナデが施される。口縁部形態には、「素口縁」「つまみ上げ状口縁」「小さく外反する口縁」「大きく外反する口縁」「体部から大きく外反する口縁部」「口縁部に向かって肥厚するもの」「鋭角的な口縁部に、外面指押さえ部との境が明瞭なもの」がある。器壁については、「5mm前後」「8mm前後」「両者の中間6～7mm」がある。124～136は、やや大型のものから大型のもの（15.4cm～22.8cmを測る）で、口縁部形態には、「つまみ上げ状口縁」「小さく外反する口縁」「大きく外反する口縁」「口縁部に向かって肥厚するもの」「鋭角的な口縁部に、外面指押さえ部との境が明瞭なもの」がある。器壁については、「厚いもの」と「薄いもの」がある。138～142は、器高が高く碗形態を呈するもので、口縁部形態は、「つまみ上げ状口縁」のみである。器壁に



第147図 包含層出土遺物実測図2 (1/3)



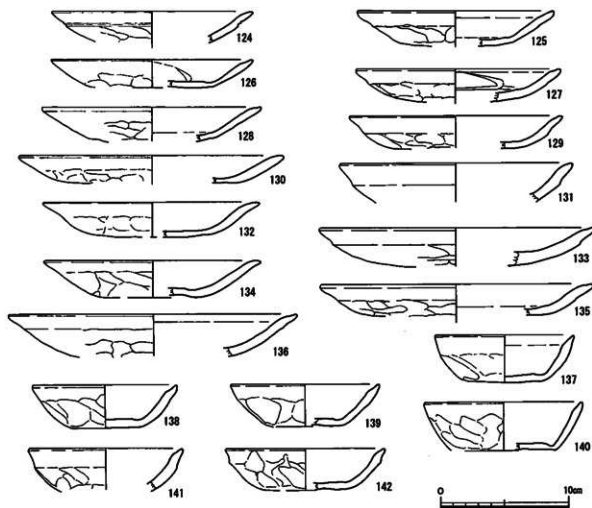
第148圖 包含層出土遺物実測圖 3 (1/3)

つては、ほぼ均一である。

143～153は、土師質又は瓦質土器の鍋である。143～151は、玉縁状の口縁部を呈する鍋である。143は、土師質土器で、しっかりと玉縁状の口縁部に体部外面にはへう削りが施される。144～147は、瓦質土器で、やや退化した玉縁状の口縁部に体部外面にはへう削りが施される。深手の144～146と浅手の147の2つの器形が存在する。法量は、147で、復元口径49.4cmを測る。148～150は、瓦質土器で、退化した玉縁状口縁部で、外面の調整についても、149、150については、へう削りから指押さえになっている。151は、独特の玉縁状の口縁部を呈するものであるが、外面のへう削り等一連の鍋の系統と考えられるものである。152、153は、口縁部が短く外反する鍋である。外面には荒いへう磨きが施される。法量は、152で、復元口径43.6cmを測る。

154～156は、瓦質土器擂鉢である。154は、防長系の擂鉢である。155は、玉縁状の口縁部に外面へう削りが施される、前述した鍋との共通点を見いだせる擂鉢である。156は、口縁部が内側に屈曲する擂鉢で、復元口径35.4cmを測る。

157～169は、青磁である。157、158は、稜花皿である。159が稜花皿Bである。法量は、157で、口径11.4cm、器高3.0cm、高台径4.0cmを測る。160～166は、碗である。160は、器形及び施釉法についてはC-Ⅲ類に共通している、口縁部が内湾する上田分類E類の碗である。法量は、口径12.8cm、器高5.0cm、高台径5.2cmを測る。161、162は、外面口縁部付近に雷文帯をもつ同文類C類の碗である。共に便化した波状の雷文帯を持つC-Ⅲ類にあたる。特に161については、B-Ⅳ類の蓮弁を併せ持つC-Ⅱ類のからの変化が推定

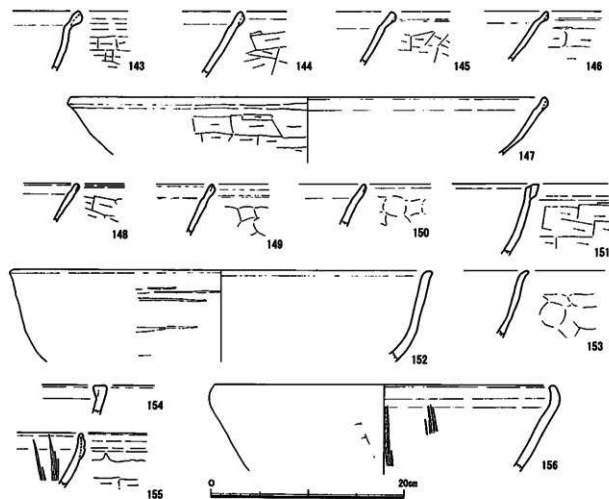


第149図 包含層出土遺物実測図4 (1/3)

されるものである。163～166は、へう先による細先の線描蓮弁文をもつ同文類B-IV類の碗である。167～169は、景徳鎮系の青磁皿である。形態的には、167、168が森田分類における白磁皿のE-4群、169がE-3群の形態を呈する。

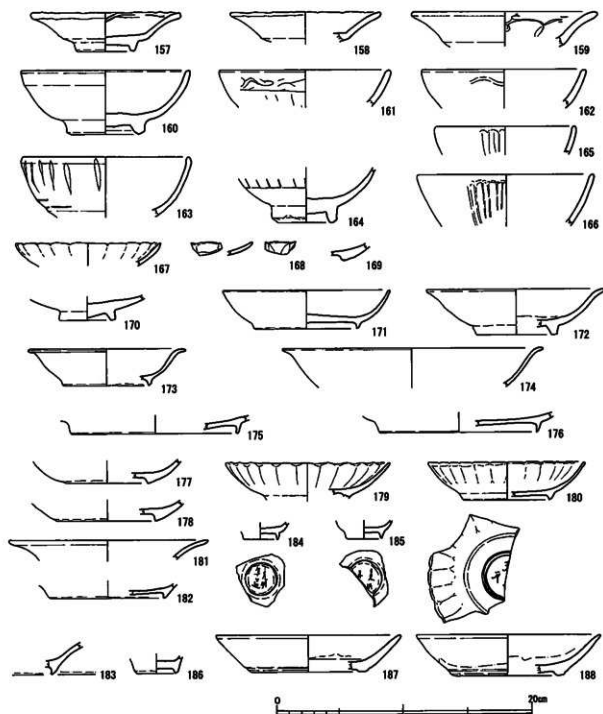
170～188は、白磁である。170は、梶府磁とよばれる森田分類B群の皿である。171は、同文類E-1群の皿であるが、陶器質の胎土に透明感の無い灰色の釉調である。法量は、口径13.0cm、器高3.0cm、高台径8.0cmを測る。172～176は、同分類E-2群の皿である。172は、内面見込部及び外底部が露胎となるE-2-a、173～176は、畳付のみ露胎のE-2-bにあたる。法量は、172で、口径13.6cm、器高3.6cm、高台径5.4cmを測り、173で、口径12.0cm、器高2.9cm、高台径6.5cmを測る。177、178は、底部が荻筒底を呈する同分類E-3群の皿である。179、180は、菊皿E-4群である。180の高台内には「天下太平」銘が入る。法量は、口径12.0cm、器高3.0cm、高台径6.4cmを測る。182～184は、同分類E-2群の坏である。斑点状の灰色の釉調の181、182と、乳白色の釉調の183がある。法量は、181で復元口径15.4cm、182で、復元高台径8.6cmを測る。184、185は、小坏である。184、185の高台内面には「大明年造」銘が入る。高台径は、共に2.6cmを測る。187、188は、内面見込部及び外底部が露胎となるもので、低く削りだした高台に、口縁部は外方に向かいほぼ直線的に立ち上がるものである。法量は、187で、口径14.4cm、器高2.9cm、高台径8.0cm、188で、口径14.4cm、器高3.3cm、高台径7.8cmを測る。

189～254は、染付である。189～208は碗で、189～195は、見込が高台内に凹むいわゆる蓮子碗の系統に属する小野分類C群の碗である。法量は、191で、口径12.5cm、器高6.0cm、高台径4.2cmを測る。196～203は、見込が緩やかに盛り上がるいわゆる餛飩心碗の系統に属する同分類E群の碗である。特に196、201には「萬福攸同」、200

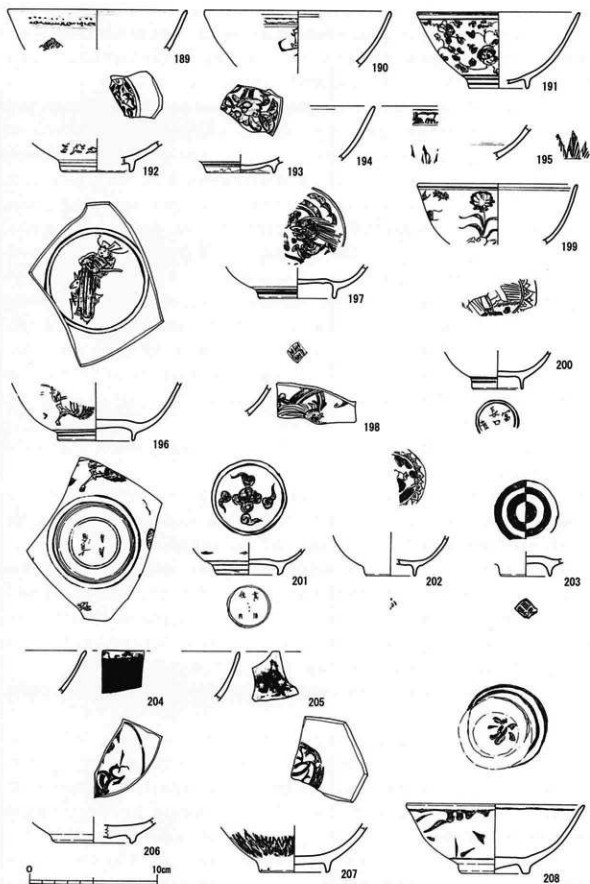


第150図 包含層出土遺物実測図5 (1/3)

には、「長命富貴」、202には、「福」の銘が高台内に観られる。法量は、196で高台径5.8cm、199で、口径12.2cm、203で、高台径3.8cmを測る。204、205は、同じくE群の碗であるが、204が黄褐色の釉、205には瑠璃釉が施されている。206～208は、漳州窯系の染付碗である。207は、C群の碗を、208は、F群の碗をそれぞれ模倣しているものと考えられる。法量は、208で、口径13.6cm、器高5.6cm、高台径4.8cmを測る。209～243は皿で、209～212は、端反り口縁部のB-1群の皿である。法量は、209で、口径15.0cm、212で、口径12.4cm、器高2.7cm、高台径6.8cmを測る。213～220は、蒔苧底を呈するC群の皿である。特に中央に赤色の魚形を置く218～220については、S140から出土したものもあわせると4枚となり複数枚でのセットで存在したことが想定される。法量は、214で、底径2.0cm、216で、底径2.8cm、220で、底径4.2cmを測る。221～229は、内湾する口縁部のE群の皿である。法量



第151図 包含層出土遺物実測図6 (1/3)



第152圖 包含層出土遺物実測圖 7 (1/3)

は、221で、口径12.6cm、器高2.9cm、高台径6.6cmを測る。230～235は、白磁坏E-2群の器形を呈するものである。法量は、231で、口径14.2cm、器高2.6cm、高台径8.0cmを測る。軸調は、通常の染付の軸調の231以外は、青い斑点がまだら状に入る透明感の無い軸調を呈する。236～238は、稜をもって外反する皿で、口縁部は輪花状を呈する。法量は、238で、口径13.8cm、器高2.2cm、高台径7.4cmを測る。

239～243は、漳州窯系の染付皿である。239は、B群模倣のもので、口径13.5cm、器高3.2cm、高台径6.2cmを測る。240～242はC群模倣の皿である。法量は、242で、口径10.8cm、器高3.0cm、底径3.8cmを測る。243は、E群模倣の皿で、口径12.6cm、器高2.9cm、底径6.6cmを測る。244、245は、大皿である。法量は、244で、復元口径29.0cm、245で、復元高台径11.5cmを測る。246は、小皿で高台径4.8cmを測る。247は、小坏で、口径6.4cm、器高3.5cm、高台径2.4cmを測る。248、249は、菊皿の器形を呈する染付である。法量は、249で、復元高台径6.6cmを測る。250は、その器形及び内面が露胎であることから壺又は瓶である。251は、色絵（赤絵）染付の蓋である。復元口径5.6cmを測る。252～254は、漳州窯系染付大皿である。252は、復元口径26.8cm、器高7.6cm、高台径9.2cmを測る。253は、復元口径25.0cm、254は、復元高台径10.0cmを測る。

255～260は、三彩系の陶磁器である。255、256は、華南三彩の水注である。内面には指押さの痕跡が残る型作りによる成形のもので、255については、水鳥の足の部分となる。257、258は、華南三彩水滴である。やはり内面には指押さの痕跡が残る型作りが想定されるもので257は、鳥形、258は、龍又は麒麟の顔を表したものである。259、260は、磁胎の三彩である。おそらくは、同一個体の上半部と下半部ととなるもので、口縁部の形態から蓋付きの容器になりそうである。復元口径10.0cm、底径8.0cmを測る。

261は、中国南部産との指摘がされる褐釉の四耳壺である。

262、263は、同じく中国南部が産地になるであろう焼締陶器である。262が蓋で、復元口径16.2cmを測り、263は鉢で、復元底径18.0cmを測る。

264～266は、朝鮮王朝産の陶器である。264は、壺又は瓶で、内面に同心円の叩きが残る。復元底径9.4cmを測る。265は、外面に刷毛目装飾が施された壺で、底部には砂が付着する。復元底径7.2cmを測る。266は、内面に描目状の沈線が2本入る鉢である。乳灰白色の軸調で、復元底径13.2cmを測る。

267～270は、備前焼である。267、268は、乗間編年近世1期の襷鉢である。法量は、267で、復元口径44.4cm、268で、同じく28.0cmを測る。269は、外面に描目を有する壺である。270は、壺で、復元底径14.4cmを測る。

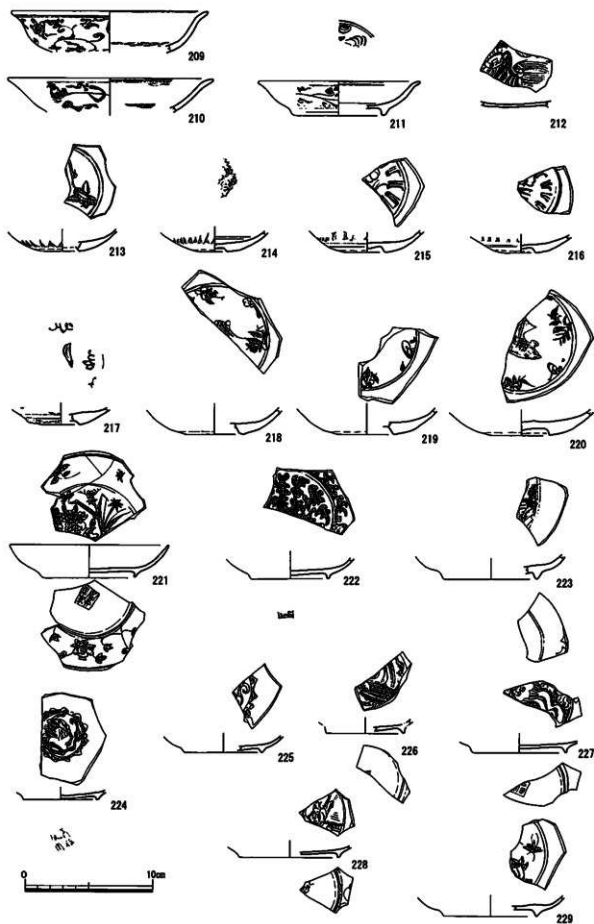
271～277は、瀬戸・美濃産の陶器である。271は、香炉で、復元口径7.2cm、器高5.4cm、高台径4.2cmを測る。272は、小坏で、口径6.5cm、器高3.0cm、高台径3.0cmを測る。273は、復元高台径4.4cmを測る皿である。274は、高台径3.4cmを測る碗である。275～277は天目碗である。法量は、277で、復元口径11.4cmを測る。

278は、復元口径11.0cm、器高4.9cm、高台径4.4cmを測る土師器碗である。外面に暗文風に施された文様が覗られる。

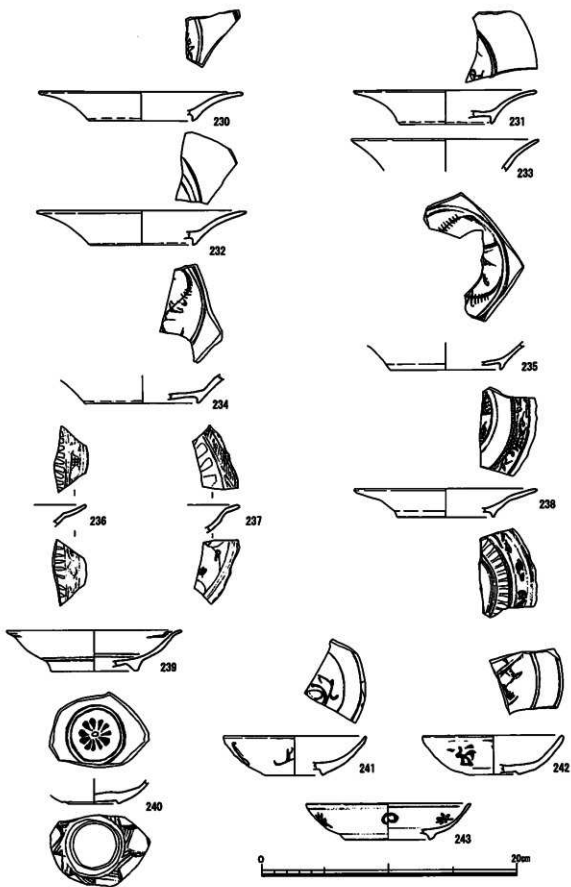
279は、碗である。いわゆる赤間碗で、表面には波状の文様が彫刻されている。全幅8.6cm、厚さ1.8cmを測る。

280は、丸瓦の転用品である。この遺物の性格を考える時、大型の鋳物を鋳造する際に、甗炉から鋳造坑内の鋳型へ溶けた金属を流し込む樋状の施設があるが、この遺物の、① 丸瓦の窪みに付着した大量の金属塊 ② 瓦の連結痕跡、③ 2次被熱により、備前焼の様に焼締られた瓦の状態、等を考え併せると、まさにこの樋状の施設の一部と考えるのが妥当である。

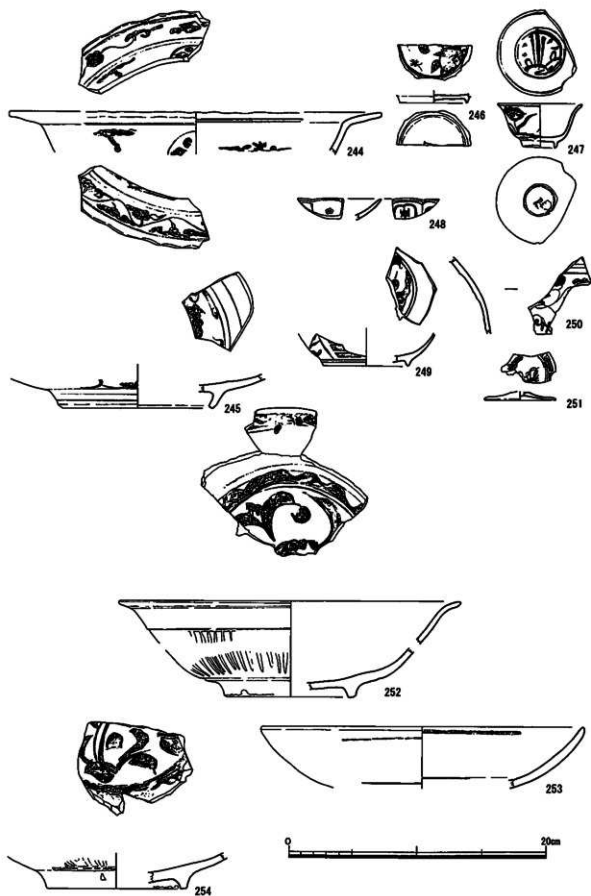
281、282は、鋳型状の土製品である。281は、底径26.0cm（内径）、31.0cm（外径）を測る筒状を呈する。その断面観察からは、軽石状に発泡した状態が観察され、外面の1mm幅に微細な粘土が使用されている。内側には、二次的な焼成痕跡が認められ、若干の凹凸も観られる。282も含めたこの土製品の性格については、特に類例が見あたらないのであるが、前述した、鋳造施設関連遺物の存在も併せて推定すると、現状で、鋳型である可能性が非常に高い。



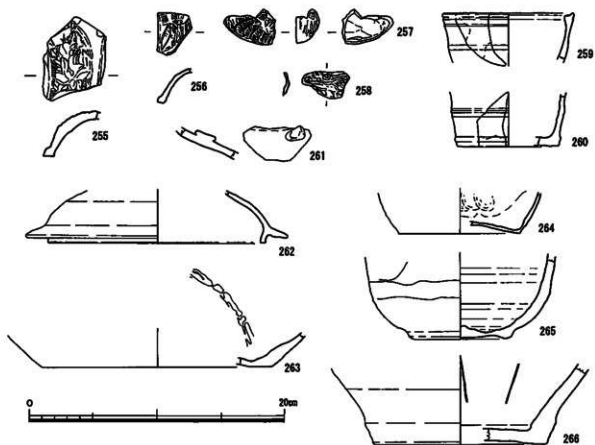
第153圖 包含層出土遺物實測圖 8 (1/3)



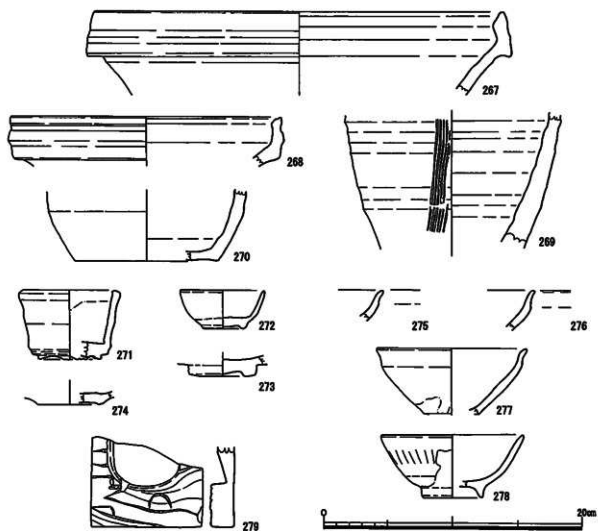
第154圖 包含層出土遺物実測圖9 (1/3)



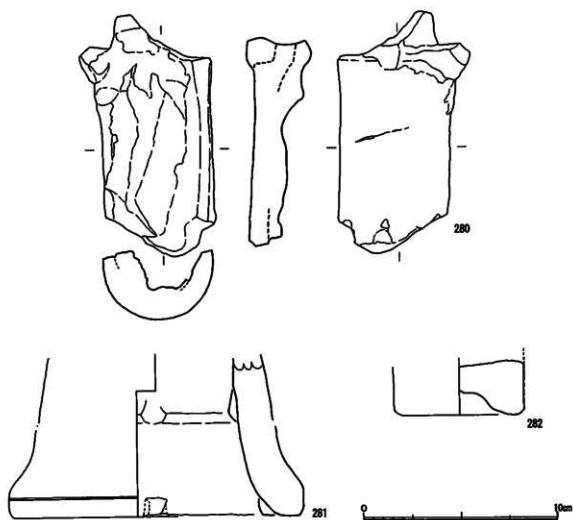
第155圖 包含層出土遺物實測圖10(1/3)



第156图 包含层出土物实测图11(1/3)



第157圖 包含層出土遺物實測圖12(1/4)



第158圖 包含層出土遺物実測圖13(1/4)

IV 自然科学的調査

1. 中世大友府内町跡第4次調査より出土した土師器皿の脂肪酸分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大友城下町跡第4次調査区の発掘調査では、中世の構内（SD140）から2枚の皿が合わさった状態で出土している。この出土状態から、皿内には何らかの内容物が存在していた可能性が考えられており、今回は内容物に関する情報を得るために脂肪酸分析を実施する。

1. 試料

分析した試料は土器内の土壌1点、および土器皿1点の合計2点である。

土器内には土壌が充填しており、土器と接する部分は黒色化しており、この部分を分析試料とした。また、土器皿本体に内容物に由来する脂肪酸が浸潤している可能性が考えられるため、土器皿本体も分析試料とした。

2. 分析方法

脂肪酸分析定法（坂井ほか、1996）を参考に、以下のように進めた。

試料を十分な量のクロロホルム：メタノール（2：1）に浸し、超音波によるソニケーションを行い、脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールによりメチル化する。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップバックシリカを使用して、脂肪酸メチルエステルとステロールを分離する。

脂肪酸メチルエステルの分離には、キャピラリーカラム（ULBON、HR-SS-10、内径0.25mm、長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（GC-14A、SHIMADZU）を使用する。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。

ステロールの分析では、別のキャピラリーカラム（J&W SCIENFIC、DB-1、内径0.36mm、長さ30m）を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

3. 結果

結果を図1に示す。

土器内の土壌と土器皿では、脂肪酸組成は類似する。いずれの試料もC14～C18の飽和脂肪酸や不飽和脂肪酸の割合が高い。また、哺乳類の脳・神経・臓器に多く分布する（中野、1993）と言われる高級脂肪酸のアラキジン酸（C20：0）、ベヘン酸（C22：0）、リグノセリン酸（C24：0）もわずかに検出される。

一方、ステロール組成においても、両試料とも動物由来のコレステロールが高く比較的類似する。また、土器皿からは植物に由来するスティグマステロールやシトステロールなども認められる。

4. 考察

脂肪酸は炭素の数により高級脂肪酸、中級脂肪酸、低級脂肪酸などに分けられており、また炭素の鎖の途中に二重結合を持つ不飽和脂肪酸と二重結合をもたない飽和脂肪酸がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸が比較的多い傾向があり、動植物は種ごとに固有の脂肪酸組成をもっている。

今回の結果から見る限り、C16～C18の中級脂肪酸ではパルミチン酸（C16：0）、ステアリン酸（C18：0）の飽和脂肪酸が比較的多い。ただし、パルミチン酸については不飽和脂肪酸のオレイン酸（C18：1）やリノール酸（C18：2）が経年変化し生成した可能性もある。さらにC20以上の高級脂肪酸も含まれるがわずかなため、今回検出された脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかを特定することは難しい。

一方、ステロール組成では動物由来のコレステロールの割合が非常に高い。したがって、土器内には何らかの動物遺体が存在した可能性がある。

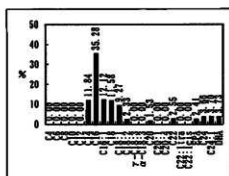
今後さらに、土器内土壌に見られた黒色部の理化学的性質について調べるとともに、周囲の土壌との比較・検討により脂肪酸の濃集の有無を明確にし、考古学的な調査成果と併せて今回の結果を評価したい。

〔引用文献〕

中野益男（1993）脂肪酸分析法、「第四紀試料研究法2 研究対象別分析法」、p.388-403、東京大学出版会

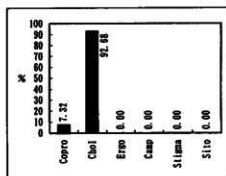
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄（1996）灯明皿の脂質分析、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第7集

「梅原胡堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）第二分冊」、p.24-37、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

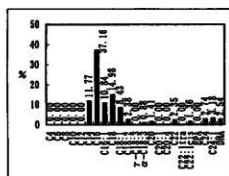


脂肪酸組成

試料：土器内の土壌

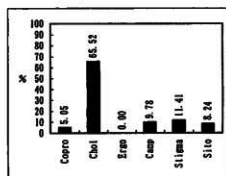


ステロール組成



脂肪酸組成

試料：土器皿



ステロール組成

第159図 土師器皿の脂肪酸組成

V まとめ

1. 出土土師器・皿類及び瓦質土器雑器の分類と編年

近年、中世後半期貿易陶磁器の分類と編年研究が進み、その編年観の確立と、広域流通遺物として、全国規模での比較研究が行われている中で、その対局に位置するであろう在地系の土師器・皿類や瓦質土器の雑器類については、前者に比べると遅れ気味の感はある。特に豊後地域においては、その政治的・経済的中心となると考えられる中世府内町の資料の不足から、他地域に比べても遅れをとっているのが現状である。一方、貿易陶磁器類についても、それ自体がもつ時間軸の幅から、そのみでの細かい時期設定を行うには限界があると考えられており、これらを補てんする資料の必要性といった意味からも、在地土器の分類・編年作業が急務となっている。以下、中世府内町の一角にあたる本遺跡から出土した土師器・皿類及び瓦質土器の雑器類についてその分類と編年を行い、後述する遺構変遷の参考としたい。

今回の調査で出土した土師器・皿類は、以下の7類に分類された。

A類 (第160図)

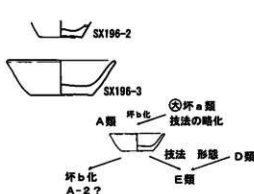
SX196-2, 3に代表される太宰府分類における環aと環bの中間形態で、環bに比べ、口径に対する底径が広いものである。内面見込部は、ロクロによるナデのみで、底部には板状圧痕は残らない。赤褐色系の胎土で、法量は、基本的に大小(環・小皿)の2法量である。

変化の方向は、法量の縮小化、環b化(底径の縮小化・器高の伸張化)が想定される。

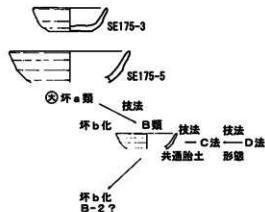
B類 (第161図)

SE175-3, 5に代表される太宰府分類における環aと環bの中間形態で、全体に扁平な形態を呈するが、口径に対する器高がやや高い。内面見込部には横方向のナデが施され、底部には板状圧痕が認められる。赤褐色系の胎土で、法量は、基本的に大小(環・小皿)の2法量である。

変化の方向は、法量の縮小化、環b化(底径の縮小化・器高の伸張化)が想定される。



第160図 A類土師器及び変遷モデル

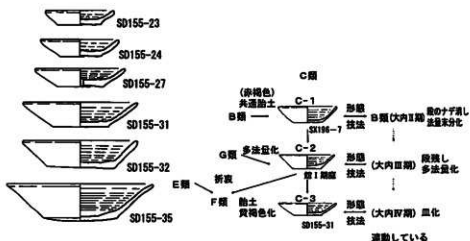


第161図 B類土師器及び変遷モデル

C類 (第162図)

SD155-23, 24, 27, 31, 32, 35に代表される太宰府分類における環bの形態で、全体に逆「ハ」字状を呈し、その器高の高さから、C-1(高)C-2(中)C-3(低)に細分される。内面見込部には、横方向のナデが施され、底部には、板状圧痕やムシロ痕が認められる。内面には、ロクロ成形時に生じた工具による段が認められるが、この段を荒くナデ消すC-1類と段を残すC-2, 3類に分けられる。この他、胎土については、赤褐色系の胎土のC-1, 2類と黄灰色系のC-3類に、法量については、基本的に大小(環・小皿)2法量のC-1類、多法量存在するC-2, 3類にそれぞれ分けられる。

変化の方向については、皿化（器高の低縮化）、技法の省略化（段をナデ消さない）、多法量化、胎土の黄灰色化等が挙げられる。特に技法の省略化や、多法量化、皿化については、後述するD類（大内系土師器）と共通しており注目される。



第162図 C類土師器及び変遷モデル

D類（第163図）

SE175-11, 12に代表される太宰府分類における坏bの形態で、全体に逆「ハ」字状を呈する。白色系の微細な胎土と器壁の薄さを特徴とする「大内系」の土師器で、内面見込部には、横方向のナデが施され、底部には板状圧痕が認められる。基本的に大小（坏・小皿）2法量であること、内面の段をナデ消す工程が存在することから大内氏遺跡出土土師器編年の大内Ⅱ期に比定されるものである。

変化の方向については、上述の編年により、技法の省略化（内面段をナデ消さない）、多法量化、皿化が指摘されている。

E類（第164図）

SK181-4, 10に代表される太宰府分類における坏bの形態で、全体に逆「ハ」字状を呈し、その器高の高さから、E-1（高）E-2（低）に細分される。内面見込部は、ロクロによるナデのみで、底部の板状圧痕は認められない。黄灰色系の胎土で、法量は基本的に大小（坏・小皿）の2法量である。

* 包含層出土遺物20に還元口径21.6cm、器高5.1cm、底径10.4cmを測る資料も存在することから、E類の多法量化の可能性も残したい。

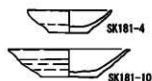
変化の方向については、皿化が挙げられる。

F類（第 図）

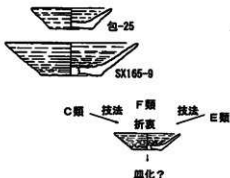
包-25, SX165-9に代表される太宰府分類における坏bの形態で、全体に逆「ハ」字状を呈する。内面には、ロクロ成型時に生じる工具による段成形が見込部にまで及び、底部には板状圧痕は認められない。C類とE類の折衷様の土師器で、法量は、基



第163図 D類土師器及び変遷モデル



第164図 E類土師器及び変遷モデル



第165図 F類土師器及び変遷モデル

(坏・小皿)の2法量である。

変化の方向については、資料が少なく不明な点があるが、法量の縮小化及び、皿化が想定される。

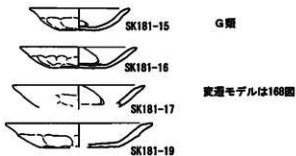
G類 (第166、167図)

SK181-15、16、17、19に代表される京都系土師器で、大友氏による「式三献」といった儀礼の導入に際して、新たに採用された土師器で、微細な白色系の胎土、非ロクロ成形、多法量の特徴とする。特に、多法量の特徴とする土器であるが故に、これまでその分類が極めて困難な状況にあった京都系土師器であるが、今回、口径で、13.0cm前後の資料を中心に分類を行うことで、法量差によるものと考えられる違い(ノイズ)を取り除き、近接した法量内での違いの抽出を試みた。この分類の結果、口縁部形態の違いにより、口縁部に向かい肥厚する「a類」、口縁部外面は短く外反、内面は平坦又は内湾部を有し、先端部が突出するつまみ上げ状の口縁部を有する「b類」、口縁部が大きく外反する「c類」、口縁部が鋭角的で、外面指押さえ部との境が明瞭な「d類」、b類とc類の折衷様で、口縁部が短く外反する「e類」、体部から大きく外反する「f類」、b類のつまみ上げ状の口縁部に深い碗形を呈する「g類」の7つに分類され、更にその厚さによってG-1、G-2、G-3の3つの細分がなされた。

変化の方向については、器壁の肥厚化が挙げられる。このことに加え、特に京都系土師器については、上述したロクロ成形の土師器に対する影響が大きく、京都系土師器採用前後におけるロクロ土師器の多法量化や、その口縁部形態における影響も注目されるところである。

尚、今回の分類を行う上での属性の一つに「法量分化」があるが、「基本的に大小(坏・小皿)の2法量」としたA・B・D・E・F類の資料の法量分布をみると、坏、小皿共に2法量存在し、計4法量存在していることが確認されている。この状況をさして「法量分化」しているとする可否かとする問題であるが、4法量存在するとはいえ、坏と小皿の間の法量差が大きいことや、これに関連して、実際に法量分化した資料との比較において、その法量分布に違いが観られることが指摘でき、この4法量を法量分化した状況としては認め難い部分がある。更に、この時期の土師器坏・小皿の時期変遷の方向として、法量の変化(縮小化)が考えられていることから、古段階の土師器中に新段階の土師器が入っている過渡期的な様相としてとらえることも可能である。

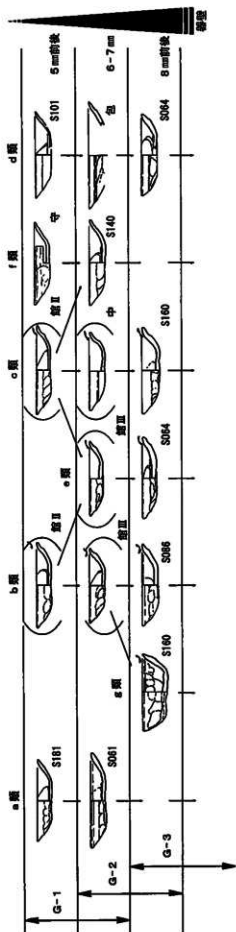
以上の理由から、土師器坏・小皿がそれぞれ2法量存在し、計4法量という現象について、今回は、基本的に2法量とし、法量分化した資料との区別化を行っている。



第166図 G類土師器

- a類 口縁部に向かい肥厚する。
- b類 口縁部外面は短く外反する。
内面は平坦部又は内湾部を有し、先端部が突出する。
- c類 口縁部が大きく外反する。
- d類 口縁部が鋭角的で、外面指押さえ部との境が明瞭である。
- e類 b類とc類の折衷で、口縁部が短く外反する。
- f類 体部から大きく外反する。
- g類 b類から派生したもので、つまみ上げ状の口縁部である。

第167図 G類土師器口縁部形態

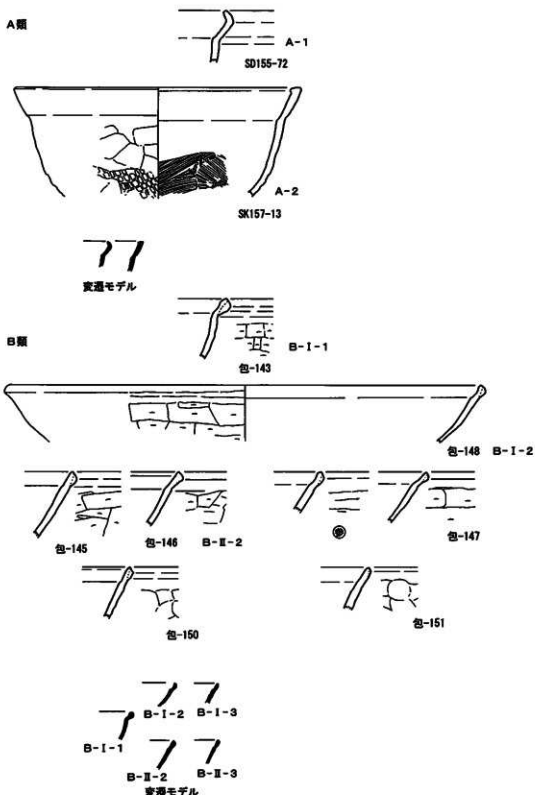


第168図 G 類土師器及び変遷モデル

今回の調査で出土した瓦質土器鍋は、以下の7類に分類された。

A類

SD155-72, SK157-13に代表されるいわゆる防長系の鍋である。口縁端部を内側に屈曲させる防長系足鍋分類のIV型式にあたるSD155-72の資料及び、口縁端部折り返しの痕跡と考えられるわずかな突起を有し、外面下に叩き痕を残す、同分類VI B型式にあたるSK157-13の資料がある。



第169図 鍋分類及び変遷モデル 1

変化の方向は、緩やかな口縁部の折り返し（Ⅳ型式）から、本遺跡での出土例は無いが強く折り返した（Ⅴ型式）を経て、折り返が失われる（Ⅵ型式）が、指摘されている。

B類

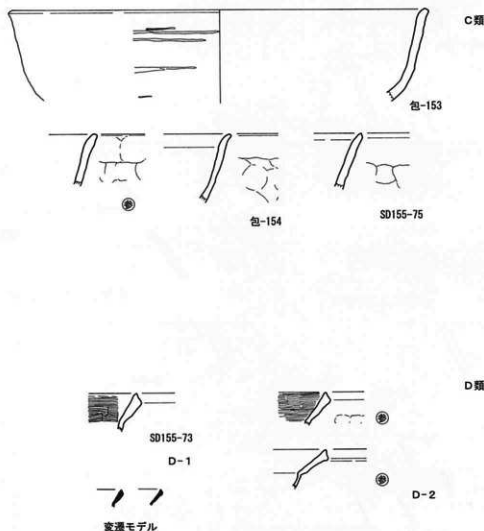
包-143, 145~148, 150, 151に代表される玉縁状の口縁部に外面へら削りが施される鍋である。深い器形（Ⅰ）と浅い器形（Ⅱ）の二つに細分される。更に、玉縁状の口縁部形態と外面調整方法の組み合わせで、大きな玉縁+へら削り（1）、やや小さめの玉縁+へら削り（2）、小さな玉縁+指おさえ（3）と、更なる細分が可能である。

変化の方向は、浅い器形、深い器形それぞれに玉縁の退化（玉縁大から小へ）、へら削りの省略（へら削りから指押さえへ）が想定される。

C類

包-153, 154, SD155-75に代表される口縁部が外反し、外面指押さえと荒いへら磨きが施される鍋である。現状で資料が少ないためその細分に関しては不明であるが、その口縁部形態と調整方法の組み合わせでの細分の可能性を有する。

変化の方向は、現状では不明である。



第170図 鍋分類及び変遷モデル2

D類

SD155-73に代表される口縁部が大きく外側に折れ、端部に面を有する鍋である。内面に刷毛目調整を施し、外面は指押さえが施される。瀬戸内海沿岸地域にその類例が観られる鍋で、器高の高いもの（D-1）と低いもの（D-2）に細分される。

変化の方向は、器高の縮小化（浅くなる）が指摘されている。

今回の調査で出土した瓦質土器摺鉢は、以下の3類に分類された。

A類

包-155に代表される口縁部内面に断面三角形ないし半円形の肥厚帯を貼り付けた防長系の摺鉢である。

変化の方向は、不明である。

B類

包-157に代表される口縁部が内湾する摺鉢である。

変化の方向は、不明である。

C類

包-156, SD155-76に代表される玉縁状の口縁部に外面へう削りが施される摺鉢である。その玉縁状の口縁部と外面にへう削りを施す技法において、前述した鍋との共通点を見いだせる摺鉢である。玉縁状の口縁部形態と外面調整方法の組み合わせで、大きな玉縁+へう削り（C-1）、小さな玉縁+指おさえ（C-2）と、更なる細分が可能である。

変化の方向としては、玉縁の退化（玉縁大から小へ）、へう削りの省略（へう削りから指押さえへ）が想定される。



A類



B類



B-1



B-2

C類



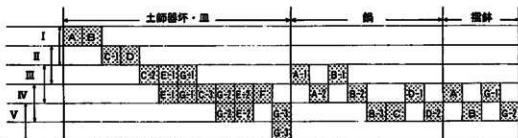
変遷モデル

第171図 摺鉢分類及び変遷モデル

さて、以上の各資料の分類と変遷について、その共伴関係と、出土遺構の検出面及び切り合いによる新旧関係によって以下の5期が設定された。尚、この5期については、前述した土師器の坏・皿と同様、一括性の高い資料中に、古相と新相の遺物群が混在する状況が他の遺物についても観察されたことから、「期」を構成する遺物群を古相と新相の2つに分け、常に前後の時期との重複関係を保ちながらの変遷を想定している。(第172図)

- I期……坏・皿のA、B類(古)とC-1、D類(新)からなり、主な共伴陶磁器類については、青磁碗D、E類、中世5期の備前焼擂鉢等がある。
- II期……坏・皿C-1、D類(古)と、坏・皿C-2、E-1、G-1類、鍋A-1、鍋B-1類(新)からなり、主な共伴陶磁器類については、中世5期bの備前焼擂鉢があるが、当該期の資料が少ないため青磁、白磁の資料は不明である。
- III期……坏・皿C-2、E-1、G-1類、鍋A-1、鍋B-1類(古)と、坏・皿C-3、E-1、E-2、G-1、G-2、F類、鍋A-2、B-2、D-1類、擂鉢A、D-1類(新)からなり、主な共伴陶磁器類については、青磁碗B-IV類、D、E類、染付皿B-1群、碗・皿C群、中世6期の備前焼擂鉢、甕等がある。
- IV期……坏・皿C-3、E-1、E-2、G-1、G-2、F類、鍋A-2、B-2、D-1類、擂鉢A、D-1類(古)と、坏・皿E-2、G-2、G-3類、鍋B-3、C、D-2類、擂鉢B、D-2類(新)からなり、主な共伴陶磁器類については、染付皿B-1群、碗・皿C群、碗・皿E群、漳州窯系染付碗・皿、青磁碗C-III類、白磁皿E-1、E-2、E-3、E-4群、中世6期～近世1期bにかけての備前焼擂鉢、甕等がある。
- V期……坏・皿E-2、G-2、G-3類、鍋B-3、C、D-2類、擂鉢B、D-2類(古)と坏・皿G-3(新)からなり、主な共伴陶磁器類については、染付碗・皿E群、碗・皿F群、漳州窯系染付碗・皿、青磁碗C-III類、白磁皿E-1、E-2、E-3、E-4群近世1期bの備前焼擂鉢、甕、唐津編年のI-1期唐津焼碗等がある。

以上の各時期の暦年代に関して、I期については、共伴する陶磁器(青磁碗、備前焼)が古い様相を示していることに加え、D類土師器(大内II期)の位置づけから15世紀後葉とし、続くII期については、備前焼(中世5期b)及びD類土師器の古相の遺物群に、G類土師器(京都系土師器)及びE-1類土師器といった新相の遺物群が共伴する状況から16世紀前葉、III期については、染付皿B-1群、同碗・皿C群の年代観に加え、土師器にC-3、E-2、F、G-2類といった新相の遺物群が入ることから16世紀中葉、IV期については、III期新相の遺物群に加え、染付碗・皿E群、一部に漳州窯系染付や、近世1期bの備前焼擂鉢の存在から16世紀後葉、V期については、ほぼIV期の遺物組成と重なっているが、染付碗・皿F群や、唐津編年のI-1期の唐津焼碗の存在から16世紀末とそれぞれ位置づけたい。



第172図 出土遺物編年表

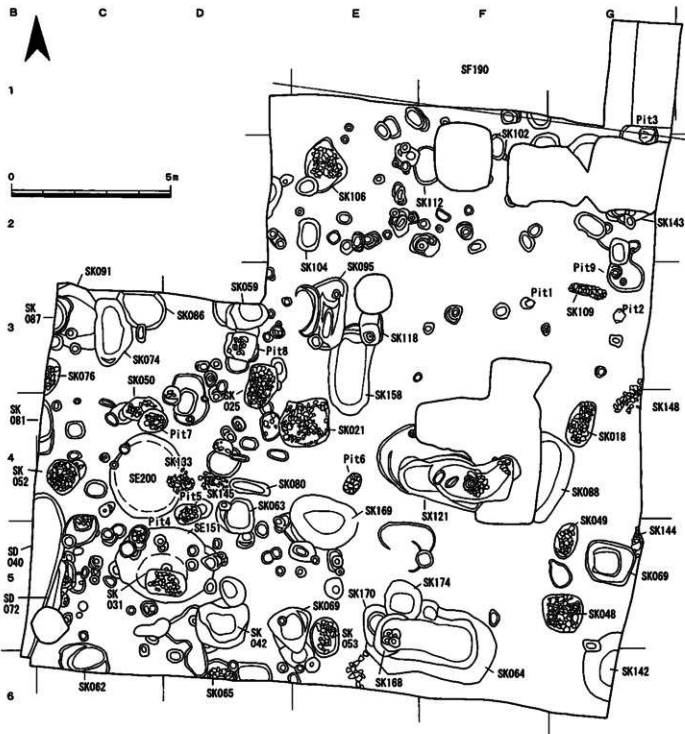
2. 遺構の変遷

前述した出土遺物の編年と、調査段階における遺構の検出層位及び切り合いによる新旧関係を加味した遺構の変遷は、以下のとおりである。

V期 (16世紀末)

V期は、表土直下で検出された遺構群である（同じく表土直下で検出された、近世～近代に位置づけられる畑の畝状遺構・埋甕・井戸・廃棄土坑等は含まない）。土坑（SK）、井戸（SE）、溝（SD）、不明遺構（SX）、小穴（Pit）、道路（SF）等の遺構群で構成される。

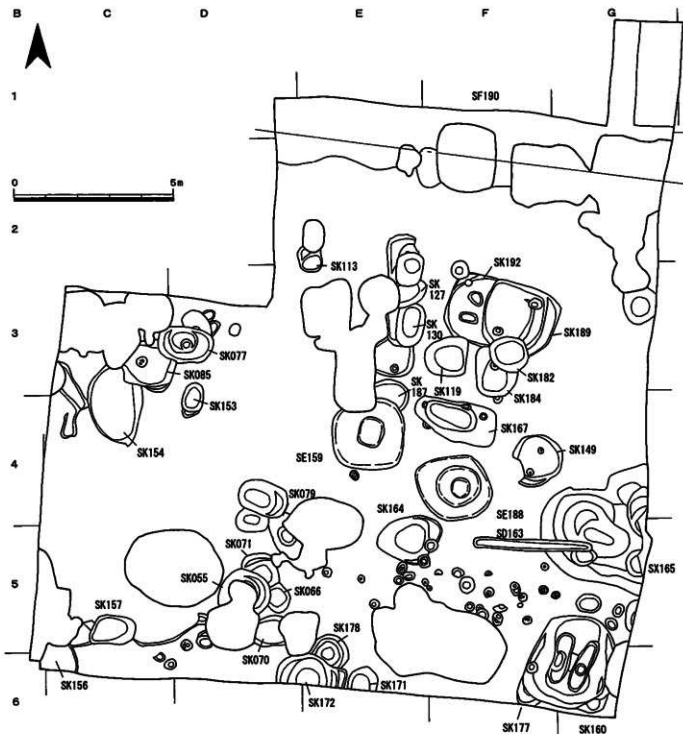
これらⅤ期の遺構群について、まず、土坑については、その大半が焼土の詰まった土坑及び、焼けた石が詰まっ



第173圖 V期遺構配置圖(1/120)

土坑であり、これらの土坑が火災処理に使用されたことを物語ると同時にⅤ期における火災の存在を示している。次に、井戸については、ほぼ同一規模の井戸が、同一時期内で、比較的短期間のうちに造りかえられたことが推定されている。そして、道路については、前述した道路状遺構の第Ⅲ期路面が当該期の路面となり、道路幅は、現況で、3.5mを測り、路面レベルは周辺より若干高くなることが確認されている。

Ⅴ期の遺構群の配置に関して、これらの遺構群が、当地に残された短冊状地割の範囲内での配置であること、そして廃棄施設や、井戸の配置が、この地割の中でもより西側に集中した配置となっていることが指摘される。特に、廃棄施設や井戸の配置については、今回の調査区が、短冊状地割の中でも南北道路に面した間口より、30mほど奥に入った位置となることに起因すると考えられる。即ち、南北道路に面した間口に対し裏庭にあたる部



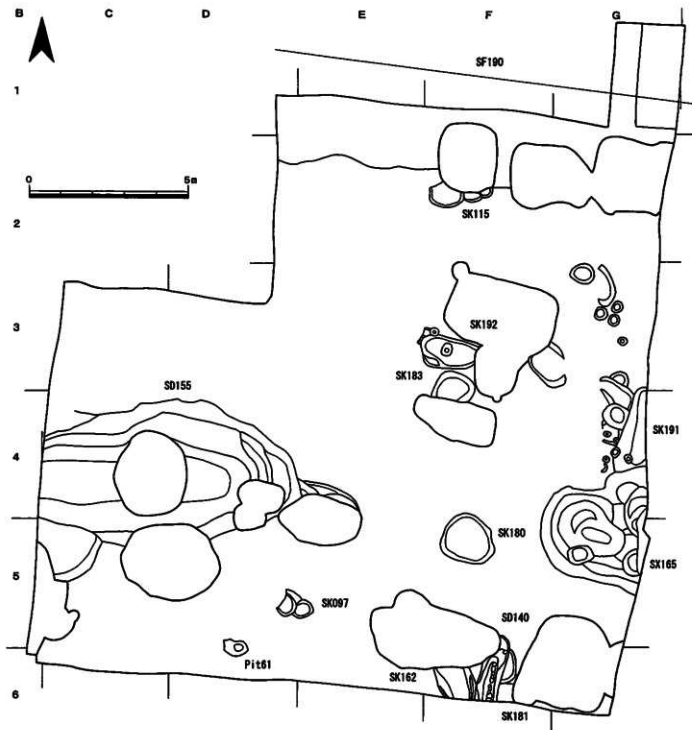
第174図 Ⅳ期遺構配置図 (1/120)

分に廃棄空間や、井戸等が配されていたことがわかるのである。

Ⅳ期（16世紀後葉）

Ⅳ期は、Ⅴ期の遺構検出面から整地層及び焼土層を挟んで検出された遺構群である。土坑（SK）、井戸（SE）、溝（SD）、不明遺構（SX）、小穴（Pit）、道路（SF）等の遺構群で構成される。

これらⅣ期の遺構群について、まず、調査区北東部に広がる焼土層及びSK189に観られる火災処理土坑の存在については、Ⅴ期に観られる火災の痕跡とは別の火災の存在を示しているものと推定される。次に井戸については、やはり、同一規模で、平面形態も類似した井戸が2基造られておりⅤ期同様短期間での造り変えが想定されている。そして道路については、第Ⅱ期路面が当該期の路面となり、道路幅は、現況で、5.0mを測り、路面レ



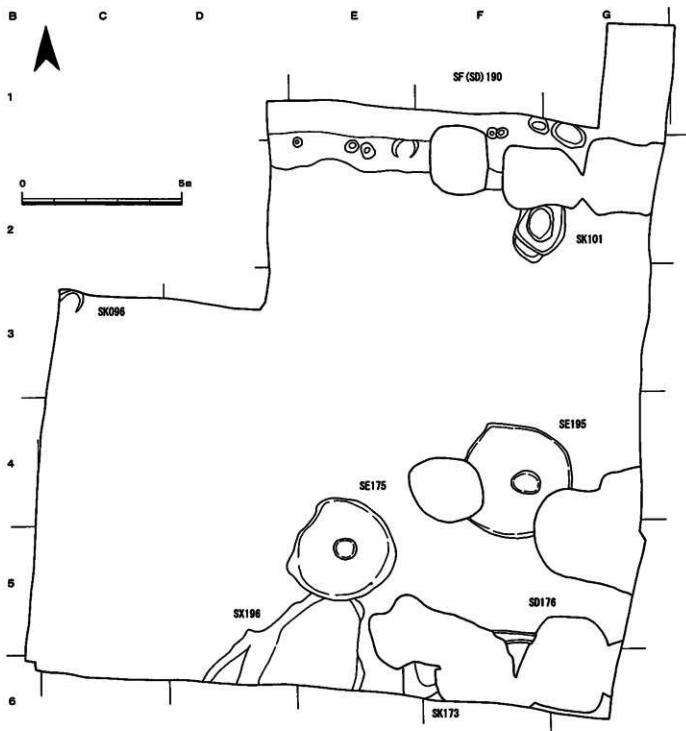
第175図 Ⅳ期遺構配置図(1/120)

ベルは、周辺と同一レベルとなる。この他、SK160等に観られる峠造関連施設（推定）が想定されるのもこの時期である。

Ⅳ期の遺構群の配置に関しては、基本的にⅤ期と同じ、短冊状地割の範囲での配置が想定され、南北道路に面した間口に対する裏庭にあたる部分との位置づけは変わらないものの、Ⅴ期と比べ、その廃棄施設や、井戸の位置が東側にその中心を置く状況が窺える。

Ⅲ期（16世紀中葉）

Ⅲ期は、Ⅳ期の検出面から整地層を挟んだ下層で検出された（一部は、Ⅳ期と同一の検出面）遺構群である。土坑（SK）、溝（SD）、不明遺構（SX）、小穴（Pit）、道路（SF）等の遺構群で構成される。



第176図 I・Ⅱ期遺構配置図(1/120)

これらⅢ期の遺構群について、まず、SD155に観られる大型の区画施設の存在から、Ⅳ・Ⅴ期とは、主軸は同じながらも、短冊状地割とは異なる大きな区画が存在した可能性が考えられる。次に、京都系土師器を含んだ糸切り土師器の環・小皿の大量廃棄が確認されたSK181や、京都系土師器が埋置された特殊遺構の可能性を有するPit061の存在等、Ⅳ・Ⅴ期とは、明らかに出土する遺物の種類（後述）や、出土状況に違いが観られるのもこのⅢ期の遺構群の特徴と言える。そして、道路については、この時期に成立したものと考えられ、第Ⅰ期路面が当該期の路面となる。道路幅は、現状で、2.1mを測り、路面レベルは、周辺より一段低い位置となる。

Ⅰ・Ⅱ期（15世紀後半～16世紀前半）

Ⅰ・Ⅱ期は、Ⅲ期と同じ遺構面で検出された遺構群の内、古相の遺物を出土する遺構と、その切り合い的にも古く位置づけられる遺構を抽出したものである。その内訳は、Ⅰ期が、SK096、173、SE175、195、SX196で、Ⅱ期が、SK101、SD176である。

これらの遺構群については、Ⅰ期の井戸については、やはり、同一規模で、平面形態も類似した井戸が2基造られておりⅤ期同様短期間での造り変えが想定されている。道路については、道路構築以前の溝の段階がこの時期にあたり、Ⅲ期同様の大型の区画が想定される。ただしこの溝の初現がⅠ期とⅡ期のどちらになるのかについては現状では不明である。

以上が、本調査区における遺構の変遷である。特に、その遺構配置及び遺構種の部分から、現状で、Ⅰ～Ⅲ期とⅣ・Ⅴ期との間に一つの画期が設定できそうである。この遺構変遷の画期については、後述する出土遺物の組成の部分で補てんする。

3. 出土遺物の組成変化について

前述した遺構の変遷でも触れられているが、出土遺物の組成についても、その時期的な変遷に応じて変化しており、本遺跡を評価するにあたっての重要な位置づけとなるものと考えられる。以下、各時期の中から良好な遺物出土状況を示したSK064（Ⅴ期）、SK160（Ⅳ期）、SK181（Ⅲ期）のそれぞれについての出土遺物の定量分析を行い、出土遺物の組成変化を考察する。尚、Ⅰ・Ⅱ期に資料については、遺物量が少ないことから、比較の資料からは外している。

Ⅴ期（16世紀末）

SK064の出土遺物について、実測図作成遺物に加えて図示していない選別遺物の定量を行った。（尚、選別遺物の定量ということで、土師器・瓦質土器の資料が実際よりもやや少な目である。）定量の結果は、以下のとおりである。

輸入陶磁器、国産陶磁器、土師器・瓦質土器の割合では、輸入陶磁器は80点で、全体の63%、国産陶磁器は35点で、全体の28%、土師器・瓦質土器は12点で、全体の9%をそれぞれ占めている。

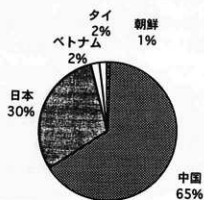
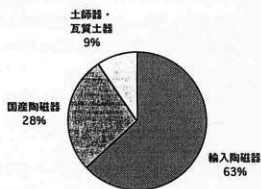
出土陶磁器の産地別の割合では、中国が76点で、全体の65%、日本が35点で、全体の30%、ベトナムが2点で、全体の2%、タイも同じく2%、そして、朝鮮王朝産が、1点で、全体の1%をそれぞれ占めている。

中国陶磁器の割合は、染付が45点で、全体の61%、白磁が17点で、全体の23%、漳州窯系の製品が9点で、全体の12%、青磁が3点で、全体の3%をそれぞれ占めている。

糸切り土師器と京都系土師器の割合は、京都系土師器が9点で、90%、糸切り土師器が1点で10%をそれぞれ占めている。

Ⅳ期（16世紀後半）

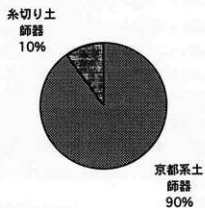
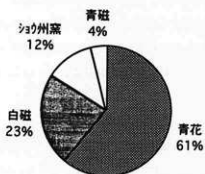
SK160の出土遺物について、実測図作成遺物に加えて図示していない選別遺物の定量を行った。（尚、選別遺物の定量ということで、土師器・瓦質土器の資料が実際よりもやや少な目である。）定量の結果は、以下のとおりである。



S 0 6 4

輸入陶磁器	80
国産陶磁器	35
土師器・瓦質土器	12
	127

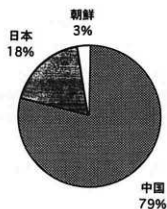
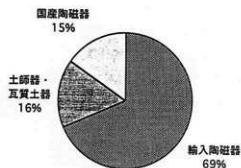
中国	76
日本	35
ベトナム	2
タイ	2
朝鮮	1
	116



青花	45
白磁	17
瀬州窯	9
青磁	3
	74

京都系土師器	9
瀬州系土師器	1

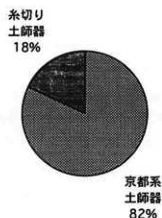
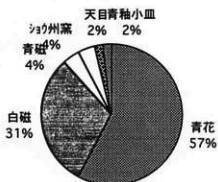
第177図 SK064出土遺物組成表



S 1 6 0

輸入陶磁器	54
土師器・瓦質土器	13
国産陶磁器	12
	79

中国	52
日本	12
朝鮮	2
ベトナム	0
タイ	0
	66



青花	30
白磁	16
青磁	2
ショウ州窯	2
天目	1
青釉小皿	1
	52

京都系土師器	9
糸切り土師器	2

第178図 SK160出土遺物組成表

輸入陶磁器、国産陶磁器、土師器・瓦質土器の割合では、輸入陶磁器は54点で、全体の69%、土師器・瓦質土器は13点で、全体の16%、国産陶磁器は12点で、全体の15%をそれぞれ占めている。

出土陶磁器の産地別の割合では、中国が52点で、全体の79%、日本が12点で、全体の18%、朝鮮王朝産が、2点で、全体の3%、そしてベトナム・タイは0点で、0%をそれぞれ占めている。

中国陶磁器の割合は、染付が30点で、全体の57%、白磁が16点で、全体の31%、漳州窯系の製品が2点で、全体の4%、青磁が2点で、全体の4%、天目が1点で、全体の2%、青釉小皿が1点で、全体の2%をそれぞれ占めている。

糸切り土師器と京都系土師器の割合は、京都系土師器が9点で、82%、糸切り土師器が2点で18%をそれぞれ占めている。

Ⅲ期（16世紀中葉）

SK181の出土遺物について、実測図作成遺物に加えて図示していない選別遺物の定量を行った。定量の結果は以下のとおりである。

輸入陶磁器、国産陶磁器、土師器・瓦質土器の割合では、土師器・瓦質土器は88点で、全体の97%、国産陶磁器は3点で、全体の3%、輸入陶磁器は0点であった。

糸切り土師器と京都系土師器の割合は、糸切り土師器が66点で77%、京都系土師器が20点で、23%をそれぞれ占めている。

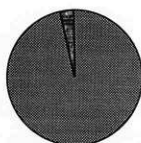
以上が、各時期における主要遺構から出土した遺物の定量分析の結果である。まず、輸入陶磁器、国産陶磁器、土師器・瓦質土器の割合からであるが、Ⅲ期における土師器・瓦質土器の占める割合の高さが特筆される。特にこれらの遺物の中で大半を占めるものは、土師器の坏・皿類であり、このことは、輸入陶磁器や、国産陶磁器も出土するこの他のⅢ期の遺構群及び、Ⅰ・Ⅱ期の遺構群についても共通していることである。即ち、Ⅰ～Ⅲ期と、Ⅳ・Ⅴ期の間に遺構（遺跡）の質的な変化があったことがあったことが推定される。Ⅳ期・Ⅴ期については、Ⅳ期に比べ、Ⅴ期の方が国産陶磁器の割合が高くなる状況が窺われた。このことは、Ⅴ期における唐津焼（Ⅰ点）の存在や、備前焼の茶器の増加から、両者の時間的な差を示すと同時に、「茶の湯」が武家から商家へと普及した状況を示すものと推定される。

次に出土陶磁器の産地別の割合から、やはり、Ⅳ期からⅤ期に掛けての国産陶磁器の割合の増加が指摘できる。他、本調査区におけるベトナム・タイの陶磁器の出土は、Ⅴ期に到ってからであるとの所見が得られた。特に定量を行ったSK064については、火災処理に使用されたものであり、その時期及び火災の位置づけが注目されることである。

中国産の陶磁器の種別については、漳州窯系染付の割合が注目されることであったが、Ⅳ期からⅤ期に架けての割合の増加が確認されたが、割合の増加したⅤ期においても全体の12%と、その主体となる状況は確認されなかった。

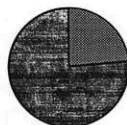
最後に、土師器の坏・皿類の割合から、Ⅲ期までの段階では、糸切り土師器の割合が高く、Ⅳ期以降は、その割合が逆転し、京都系土師器が主体となる状況が確認されている。加えて、京都系土師器と糸切り土師器の割合が逆転するⅣ期の段階に、京都系土師器の肥厚化、大・小の2法分化が顕著になっており、京都系土師器の在地化を考える上での重要な情報と言えよう。

国産陶磁器
3%



土師器・瓦質
土器
97%

京都系土
師器
23%



糸切り土
師器
77%

S 1 8 1

土師器・瓦質土器	88
国産陶磁器	3

京都系土師器	20
糸切り土師器	66

第179図 SK181出土遺物組成表

4. 中世大友府内町第4次調査（上市町）総括

以上、出土遺物の分類と編年、遺構の変遷、遺物組成のそれぞれの面から、今回の調査をまとめてきたが、これらの成果をもとに、a. 中世大友府内町の変遷～その成立と変容～、b. 京都系土師器の諸問題～その導入と在地化～、c. 中世大友府内町における火災関連遺構出土遺物の位置づけ、の3点の課題について考察し、今回の調査の総括に変えたい。

a. 中世大友府内町の変遷～その成立と変容～

中世大友府内町の変遷に関して、今回の調査の結果、遺構の変遷及び出土遺物の組成において、Ⅰ～Ⅲ期（15世紀後葉～16世紀中葉）と、Ⅳ・Ⅴ期（16世紀後葉～末）の間に存在する遺構（遺跡）の質的な変化が指摘された。具体的には、土師器の大量廃棄が観られる特殊遺構等、土師器の坏・皿が出土遺物の主体となる大型の溝によって区画される段階（屋敷地）から、特に主体となる遺物の無い全ての種類の遺物が出土する短冊状地割の段階（町屋）への変容である。このことは、中世府内町における短冊状地割（町屋）の成立（取り込み）が16世紀後葉であることを示すと同時に、それ以前の屋敷地を中心とした区割りが存在したことを示すものであり、中世府内町の画期がここに想定できるであろう。加えて、調査区の北側に面したSF190とした東西道路（小路）の成立に関して、もう一つの画期が想定可能である。即ちこの道路が、Ⅰ期もしくはⅡ期の段階の区画溝を踏襲する形で造られる「豊後型道路」であり、Ⅲ期（16世紀中葉）の段階には成立していることが確認されていることから、万寿寺を起点とする南北道路の成立に後出する新たな区割りの形成¹⁾を意識して造られたこの東西道路（小路）の成立をもっともう一つの画期としたい。

上記の画期をまとめると、①15世紀後葉の万寿寺を起点とする南北道路を基準とする屋敷地が存在する段階。②16世紀中葉の東西道路（小路）の成立に見る府内古図に描かれた町割りの原形となる区割りが成立する段階。③16世紀後葉の短冊状地割成立に観られる町屋の成立する（取り込む）段階。の3つの変遷が想定される。これらの変遷の中で、特に③に関しては、その成立が16世紀後葉に位置づけられることにより、これまで平安時代末「市河」と呼ばれた大分川の、下流左岸一帯（今回調査が行われた「上市町」及び「工座町」周辺）を、中世府内町のルーツとする説²⁾に代表されるよう、古代末からの国府域に付随する市町からの発展が想定されてきた中世大友府内町の成立に関して一石を投じると同時に、それ以前の町屋が存在した場所や、その性格に関して新た

な問題を投げかける結果となった。

ここで、今回の調査区では当該期に遡るであろう遺構群は認められなかった中世大友府内町の成立期に関わる問題に触れることとする。中世府内町の成立に関しては、まず大友氏による守護所の設置に注目したい。大友氏が実際に豊後に入国したのは3代頼崇の頃（1254～1270）といわれており、最初に守護所をおいた場所については、主に古文書からのアプローチにより、上原館と大友館とする²説³が存在する。しかしながら、現在の所この二つの遺跡の発掘調査の結果、13世紀代に遡る遺物の出土はあってもこれらの遺物に伴う遺構は検出されておらず⁴、共に決め手を書く状態である。このような状況の中、近年、昭和50年代に調査が行われた古国府石明地区で行われた調査を再評価⁵する動きがある。この再評価の作業の中で、13世紀代を中心とした池や区画溝が存在するその遺跡の内容と、万寿寺や、円寿寺といった主要な宗教施設の創建や整備が行われる13世紀末から14世紀初頭に終焉する遺跡の存続時期を注目し、これまで不明であった守護所の所在に関して問題を投げかけている。これらのことから、大友氏による初期守護所の設置については、その所在はもちろんのこと、その移転等も含めた存続期間についても再考の段階に入ったといえよう。

上記を踏まえて、近年発掘調査の進む中世大友府内町の発掘調査成果を見てみると、万寿寺の南側を調査した第6次調査における大溝⁶、大友館の南西部を調査した第5・8次調査における土坑⁷、大友館の主殿部を調査した館の第6次調査における整地地業と14世紀代に位置づけられる遺構群⁸が確認され始めている。これら少ない資料ではあるが、一つの可能性として、大友館や万寿寺といった大友氏関連の主要施設の成立及びその周辺施設の成立を14世紀代に想定し、これらと中世大友府内町の成立と結びつけ、今後の資料蓄積を待ちたい。

以上、中世大友府内町の変遷について、今回の調査成果を中心に考察してきたが、これらの変遷について、①14世紀代とした大友氏関連の主要施設成立及び周辺関連施設に関する具体的な調査事例の蓄積。②今回検出された遺構群は、基本的に万寿寺を起点とする南北道路の主軸方位を基本に形成された地割を踏襲する形でつくられており、この万寿寺を起点とする南北道路の起源の問題や、中世大友府内町におけるこの他の南北道路との主軸方位の違いに関する問題。③家臣団の集住に関して、今回は15世紀代とした屋敷地の成立時期に関する問題。（段階を追うものなのか、一定の時期に集中するものなのか）④短冊状地割への変容に関して、屋敷地であった場所を町屋（商業区域）とした歴史的な背景及び、この地に町屋が取り込まれる以前の町屋⁹の位置に関する問題。等が残される形となった。今後、これらの問題に関する考古・古文書両面からの資料の蓄積を期待するところである。

〔参考文献〕

前川要 1991『都市考古学の研究～中世から近世への展開』

千田富博・小島達裕・前川要 1993『城館調査ハンドブック』

小島達裕 2000『近世城下町の成立過程』『シンポジウム近世城下町の跡相発表資料』

〔注〕

1) 府内古図に描かれた町割りの原形となるであろうと考えられる。

2) 鹿毛敏夫 2001『文献・絵図からみた大友館と府内の町～都市と空間性～』『南宮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会 他

3) 上原館の立場をとるのは、渡辺遼夫 1982『豊後国府と守護所』『増訂豊後大友氏の研究』及び大分市 1987『大分市史中巻』他。大友館の立場をとるのが木村幾多郎 1997『古国府・勝津留學』『大分・大友土器研究18・19号』

4) 坪根伸也・河野史郎 1999『上野大友館跡（上原館跡）』大分市教育委員会

高島豊・堀地潤一・河野史郎 2000『大友館跡～発掘調査概報Ⅰ』大分市教育委員会

塔島光司・上野淳也・小住武史 2001『大友館跡～発掘調査概報Ⅱ～』大分市教育委員会

5) 坪根伸也 2001『大分県内考古関連文献一覧・鶴岐和夫「豊後国府推定地周辺の発掘調査～大分市古国府・羽屋地区

の近年の調査から」『大分県地方史第117号』昭和60年3月 大分県地方史研究会『豊後考古通信 Bungo Funai』
<http://oec-net.or.jp/~tubones/>

6) 坂本嘉弘 2001「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」『南築都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会

7) 8) 文献と同じ

8) 塚島光司・上野淳也・小住武史 2001「大友館跡～発掘調査概報Ⅱ～」大分市教育委員会

9) 現状で、古代豊後府内に付随する市町、平安時代末「市河」と呼ばれた大分川下流左岸域に想定される市町や、瀬戸内海交易の港町的なもの、もしくは巨大寺院に付属する門前町的なもの、等が想定され、これらが存在した場所がどこであったかということ。

b. 京都系土師器の諸問題～その導入と在地化～

京都系土師器は、在地のロクロ成形による底部糸切り離しの土師器に対し、その名の通り、京都及びその周辺で使用される非ロクロ系の成形技法によってつくられた土師器であり、微細な白色系の胎土、多法量の特徴とする。これまでの研究成果¹⁾によりこの京都系土師器は、「式三献」といった武家儀礼の導入に伴う儀器として新たに採用された土師器とされており、特に大友氏の場合は、その領国範囲と一致するその分布状況、中世後半期の町屋への普及を特徴として、その背景が課題とされてきた。²⁾以下、中世大友府内町の一角にあたる今回の資料を中心に、その導入と在地化の背景を考察する。

まず、本調査区における京都系土師器の資料であるが、屋敷地が想定されるⅡ期（16世紀前半）においては、大内系の土師器³⁾や、中世5期bに位置づけられる備前焼との共伴（SK101, SD176）が確認されており、その導入初期段階の資料中に既に存在していることがわかる。同じく屋敷地が想定されるⅢ期（16世紀中葉）においては、大小2法量の糸切り土師器77%に対して、多法量の京都系土師器23%という割合を示す、SK181の土師器の大量廃棄土坑や、同一法量の京都系土師器を2枚重ねる形⁴⁾で埋置された状況が観られるSD140、糸切り土師器と共に大小2法量のセットが認められるPit061等が確認されている。次に、短冊状地割の成立（町屋への変容）が想定されているⅣ期（16世紀後半）・Ⅴ期（16世紀末）においては、京都系土師器の町屋への普及に加え、Ⅳ期以降に糸切り土師器と京都系土師器の割合が逆転し、京都系土師器が主体となること、器壁の肥厚化、大小の2法量化、灯明皿での使用等、これまでの指摘どおり⁵⁾在地化の傾向が確認されている。

これら京都系土師器の位置づけであるが、特にその導入期であるⅡ・Ⅲ期の資料について注目したい。まず、この時期に屋敷地が想定される地区から京都系土師器が出土していることが挙げられる。次に、大友館等で観られる法量分化した京都系土師器の大量廃棄⁶⁾との比較において、異質な感じのするその出土状況が挙げられる。その出土状況については、SD140、Pit061の例に代表されるよう、単法量の組み合わせもしくは、大小2法量の組み合わせによる極めて在地色の強い使用法を想定できる。即ち、今回の調査により京都系土師器が、その導入期でもあるこの時期に存在し、併せて在地化も進行していたことが推定されるのである。このような視点に立って、他の遺跡に目を向けると、同じくその導入期に位置づけられる資料中に墓等に供献される例⁷⁾が多いことに気付くが、これらについても同様な在地的な使用法の例であると考えられ、その範囲についても中世大友府内町の範囲に限られないことが確認される。

ここで儀器としての京都系土師器の位置づけに注目したい。この京都系土師器が、「式三献」といった武家儀礼の導入に伴う儀器として新たに採用された土師器であることは、前述したとおりである。そもそも式三献とは、公家の間で執り行われた正式（正統）な動杯の作法を指す言葉であり、酒肴を出し三杯飲ませて善を下げることを一献といい、それを三回繰り返すこととされている。この式三献を武家の間で行う場合、主従関係を結ぶ場が想定され、更にこれを正式（正統）に京都で執り行うことに限定するならば将軍と大名との主従関係を結ぶ場ということになる。そしてこの式三献に使用された土師器が京都系土師器ということになる。

この京都系土師器は、戦国時代のほぼ時を同じくする形で京都以外の特定地域に広がるが、前述の式三献を想定した場合、①京都以外の地で、将軍と大名による式三献が執り行われたこと、②大名が、在地の家臣その他の主従関係を結ぶ場に式三献を採用したこと、の2点が想起される。①に関しては、15代将軍となる足利義昭の越前朝倉氏朝倉館への「御成」を記した「朝倉始末記」に、主殿を会場にした式三献等の内容が記録されているように¹⁾、式三献の、御成と呼ばれる将軍家が管領邸をはじめ他家や、寺院を訪問する行事を想定²⁾した導入の背景が推定される。次に、②に関しては、前述した室町将軍と大名の関係を、家臣及び、在地領主との間に置き換えることで、その傾国支配体制を確立しようとした背景が推定される。つまり、京都以外の地における式三献については、対京都（将軍家）を意識したものと、対在地（家臣他）を意識した2種類が想定されるのである。

大友氏による京都系土師器（式三献）の導入背景に、対在地（家臣他）を意識したもの³⁾があったとするならば、前述した京都系土師器在地化の、導入期段階における広範囲での進行に対する理解も容易である。即ち、大友家に伝わる故実書の検討⁴⁾から、幕府に対して複数回にわたり、儀礼の伝授を求めていたことが知られている大友惣領家に対し、それを消化できなかったその相手側である家臣団や、在地領主が、すでにその受容期段階から、大小2法量のセットを基本とする「極めて在地色の強い使用法」行っていた。もしくは、大友惣領家がこうした家臣団や在地領主のために「極めて在地色の強い使用法」に変更した儀礼を行ったという理解である。

以上のように、豊後における京都系土師器は、在地化の要因をもって導入され、既にその導入期段階の使用法（遺物出土状況）に、在地化の傾向を示すことが想定されるようである。よって、これまで16世紀後葉に観られる京都系土師器の「器壁の肥厚化」「大小2法量化」については、こうした在地的な使用法が、形式的な変化に現れたものと理解できる。一方、同じく16世紀後葉に観られる京都系土師器の「町屋への普及」については、①その在地的使用法の中に対町人の儀礼の存在、②豊臣秀吉による身分統制令以前ということで、武士の町人化があったこと、が想起されるが、この問題については、現状で、京都系土師器導入段階の町屋に関する資料が皆無であることから、前述した都市変遷の問題もあわせ、これらの資料の増加を待って結論づけたい。

〔参考文献〕

坪根伸也 1997「豊後における戦国期京都系土師器に関する覚書」『大分・大友土器研究 第16号』大分・大友土器研究会

中井淳史 2000「武家儀礼と土師器」『史林』83巻3号

〔註〕

1) - 1 小野正敏 1998「戦国大名と唐物荘厳」『陶磁器の文化史』国立歴史民俗博物館

- 2 堀地満一 1999「九州出土の京都系土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究』XII 日本中世土器研究会 他

2) 堀地満一 1998「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『法政』第6号 博多研究会

3) 本報告におけるD順・大内氏遺跡出土土師器編年の大内Ⅲ期に相当する。

4) 内容物の分析結果、陶衣の可能性も含めた動物遺体とされている。

5) 1) - 2、2) 文献に同じ

6) 河野史郎 2001「大友氏館の調査概要-第1・3次調査」・「かわらけ」『南宮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会

7) 緒方町千人塚遺跡（墳墓）、清川村大徳院遺跡（地下式土坑）、久住町仏原第Ⅰ遺跡（土坑墓？）、大分市下郡遺跡群（土坑墓）等が挙げられる。

坂本嘉弘 1999「千人塚遺跡」緒方町教育委員会

原田昭一 1993「大徳院遺跡発掘調査報告書」清川村教育委員会

高橋恒武 1997「市第Ⅱ遺跡 市第Ⅲ遺跡 仏原第Ⅰ遺跡 仏原第Ⅱ遺跡 仏原第Ⅲ遺跡 熊笹担い手育成基盤事業 都野東部地区に伴う発掘調査報告書Ⅱ」

坪根伸也 1990『下郡遺跡群』大分市教育委員会

8) 小野正敬 1997「城下町、館、屋敷の空間と権力表現」『国立歴史民俗博物館研究報告第74集 都市における交流空間の史的研究』国立歴史民俗博物館

9) 室町將軍との関わりの中でその権力を示すための手段としてという意味で、実際に来たか否かは別とする

10) 大友氏の場合、大友館内において法区分化した京都系土師器の大量廃棄も観られることから、正確には対將軍家と対家臣の両方であったと言える。

11) 小野貞史 1999「大友氏における「式三献」の導入について」『大分・大友土器研究 第25号』大分・大友土器研究会

c. 中世大友府内町における火災関連遺構出土遺物の位置づけ

今回の調査で確認された遺構群の変遷の中で、IV期（16世紀後半）とV期（16世紀末）の2度にわたる火災の痕跡が確認されており、これらの火災処理に関連する一括性の高い遺物群が注目されているところである。

これらの火災を、中世大友府内に起きた歴史的な事象に結びつける場合、現状で、天正14、15年（1586～87）の島津氏による府内侵攻に伴う府内の焼失と、慶長元年（1596）の慶長大地震に伴って発生したであろう火災の2つの火災が想起される。いずれも二次資料に基づく事項であるという問題が残る上、この他にも中世大友府内町における火災が無かったかどうかの疑問も残る。しかしながらこれらの火災の痕跡が、これまでの中世大友府内町の調査で普遍的に確認される程の大規模なものであることから、現状で、この二つの火災を想定するのが妥当であろう。これに伴って、IV期の火災を前者に、V期の火災を後者に位置づけることが可能となり、これらの資料は、島津氏によって壊滅的な打撃を受ける直前及び復興後の中世府内町の遺物組成を示す良好な資料ということとなる。

その出土遺物の組成については、前述した通りであるが、IV期において、国産の陶磁器の割合が低く、東南アジア産の陶磁器を含まない点、V期において国産陶磁器（大量の備前焼の茶器・唐津焼1点等を含む）の増加と、東南アジア産の陶磁器を含む点をそれぞれ指摘し、「茶の湯」の普及を述べた。特に、東南アジア産の陶磁器の推移については、東南アジアを舞台にした中継貿易（ポルトガルによる南蛮貿易、日本による朱印船貿易等々）の背景が想起されるわけであるが、同時に、これら年代のはっきりした遺物群の存在は、天正15年（1587）の豊臣秀吉による九州平定以後から、慶長6年（1601）の徳川家康による朱印船貿易の開始に到るまでの、中継貿易に府内の商人が深く関わったことを窺わせる資料になりそうである。

これまで、島津軍による府内侵攻後の復興については、天正16～19年（1588～1591）の「伊勢参宮帳」¹⁾に記載された町名や、人名等からおぼろげながらその復興について窺い知る状況であった。今回、この復興から近世府内町移転までの中世府内町の空白の期間に対して、発掘調査による考古資料が極めて有効であることが確認されたことになる。今後、中世府内町3次調査のSX210をはじめとするこれらの火災処理にともなうと考えられる一括資料もしくは一括性の高い資料との比較・検討等が期待される所である。

【参考文献】

大橋康二 2000「陶磁貿易からみた東南アジアと日本・豊後」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会

森村健一 2000「国際貿易都市・境」『シンポジウム近世城下町の諸相 長浜町遺跡の調査成果から』長浜文化財シンポジウム実行委員会

【註】

1) 「天正十六年参宮帳」『大分県資料 25』

報告書抄録

ふりがな	おおともふない 4							
書 名	大友府内 4							
副 書 名	中世大友府内町跡第 4 次発掘調査報告書							
編 著 者 名	河野 史郎							
編 集 機 関	大分市教育委員会							
所 在 地	〒870-0046 大分市荷揚町 2 番 31 号 Ⅷ (097) 534-6111							
発行年月日	2002 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
中世 大友 城下町 跡	大分県 大分市 鍋町 3丁目	322	051	33度 13分 37秒	131度 37分 22秒	981214 } 990331	330㎡	マンション 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中世大友 城下町跡	都市	中世		土塁 火災処理土坑 井戸跡 道路跡		京都系土師器 糸切り土師器 中国染付 華南三彩 タイ四耳壺 ベトナム白磁		中世府内町の推 定上市町の調査 である。 調査の結果、大 区画の屋敷地か ら、短冊状地割 への変遷が確認 された。 出土遺物におい ては、京都系土 師器、東南アジ ア産を含む豊富 な陶磁器がある。

写 真 图 版



1. 中世大友府内町全景

写真図版 2



1. 調査区東壁土層断面 北部



2. 調査区東壁土層断面 中央



3. 調査区東壁土層断面 南部



1. SK016全景



2. SK052全景



3. SK025全景



4. Pit 4 全景



5. Pit 6 全景



6. SK064全景



7. SK189全景



8. SK189土層断面

写真図版 4



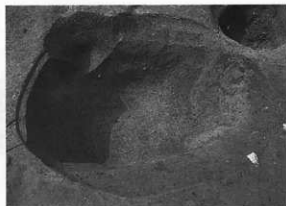
1. SK086全景



2. SK086遺物出土状況



3. SK086周辺土層断面



4. SK132全景



5. SK042全景



6. SK042土層断面



7. SK169全景



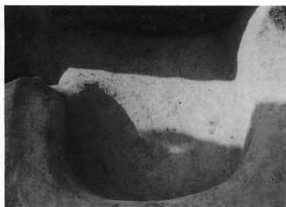
8. SD155周辺土層断面



1. SK160全景



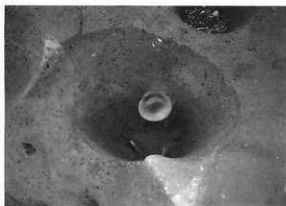
2. SK160遺物出土状況



3. SK181全景



4. SK101全景



5. Pit061遺物出土状況



6. SD140遺物出土状況



7. SE151全景



8. SE188全景

写真図版 6



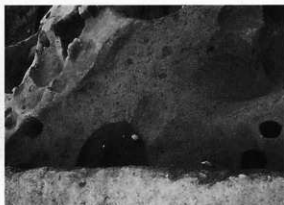
1. SE159全景



2. SE175全景



3. SE195全景



4. SX196全景



5. SF190北壁土層断面 1



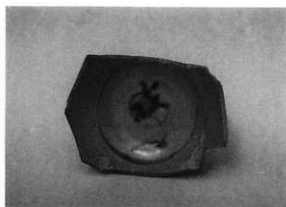
6. SF190西壁土層断面



7. SF190北壁土層断面 2



8. SF190北壁土層断面 3



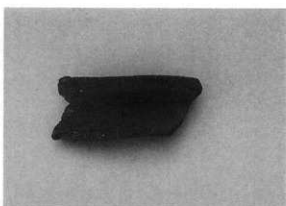
1. SK142-3



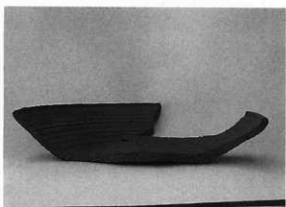
2. SK142-3



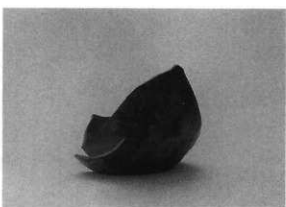
3. SK142-4



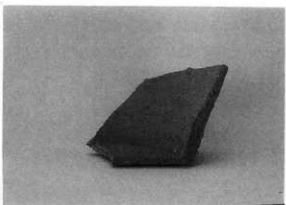
4. SK064-38



5. SK064-48



6. SK064-45



7. SK061-48



8. SK064-17

写真図版 8



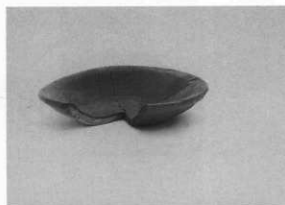
1. SK064-69



2. SK042-4



3. SK086-3



4. SK086-10



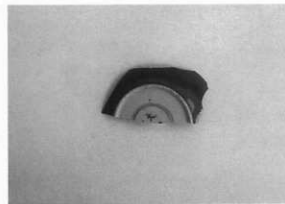
5. SK086-15



6. SK086-27



7. SK174-8



8. SK174-8



1. SK095-2



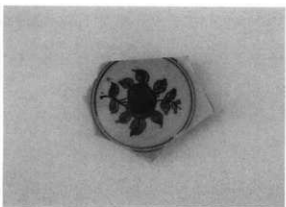
2. SK095-5



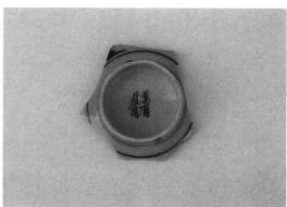
3. SK095-6



4. SK080-3



5. SK169-8



6. SK169-8



7. SK169-13・14



8. SK079-7



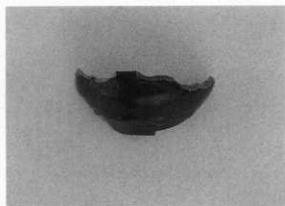
1. SK160-5



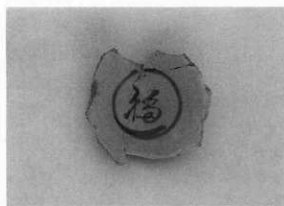
2. SK160-6



3. SK160-7・9



4. SK160-30



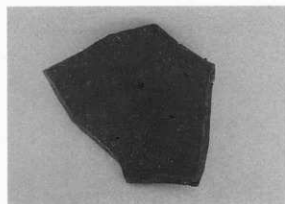
5. SK160-28



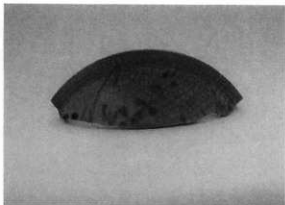
6. SK160-28



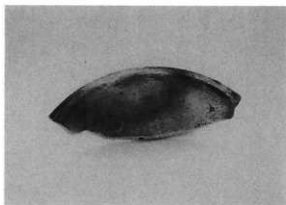
7. SK160-39



8. SK160-40



1. SX165-52



2. SX165-52



3. SX165-55



4. SK189-10



5. SK155-15



6. SK155-17

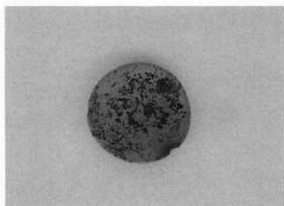


7. SK157-13



8. SK157-13

写真図版12



1. SD155-43



2. SD155-22



3. SD155-32



4. SD155-32



5. SD155-72



6. SD155-72



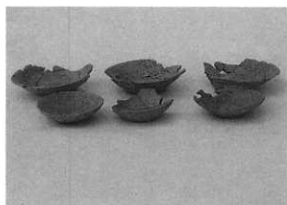
7. SD155-57



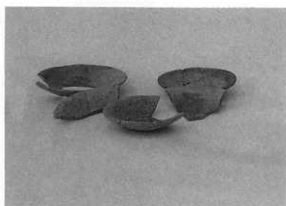
8. SD155-57



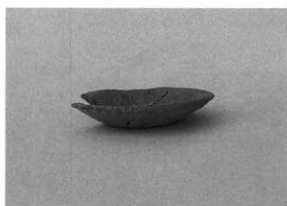
1. SK181出土遺物



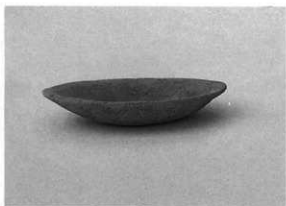
2. SK181出土糸切り土師器



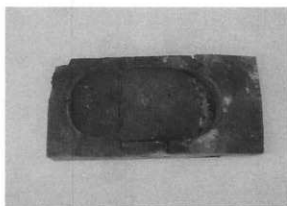
3. SK181出土京都系土師器



4. Pit061-3



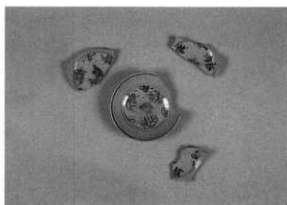
5. Pit061-4



6. Pit061-5



7. SD140-3



8. 染付皿C群

写真図版14



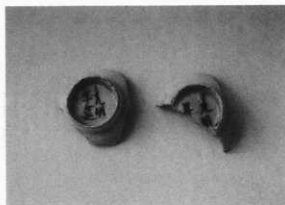
1. SX196出土遺物



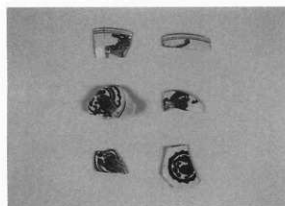
2. SX196-1



3. SX196-4



4. 包含層-184・185



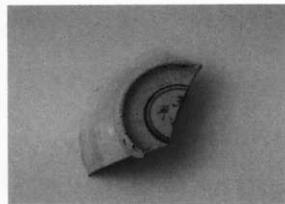
5. 染付碗E群



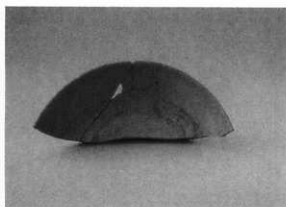
6. 包含層-157



7. 包含層-160



8. 包含層-180



1. 包含層-188



2. 包含層-188



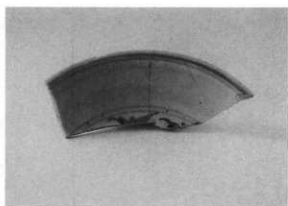
3. 包含層-197



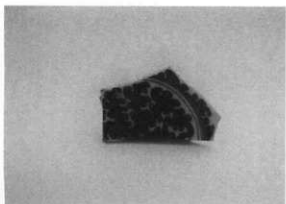
4. 包含層-250



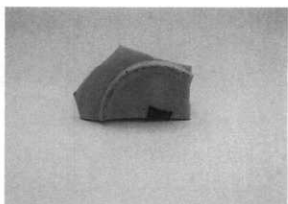
5. 包含層-209



6. 包含層-209



7. 包含層-222



8. 包含層-222

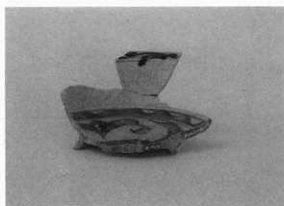
写真図版16



1. 包含層-252



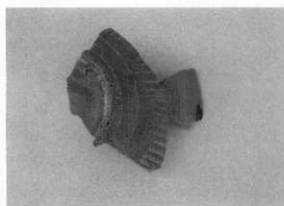
2. 包含層-244



3. 包含層-252



4. 包含層-244



5. 包含層-252



6. 包含層-254



7. 包含層-262



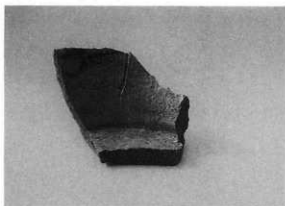
8. 包含層-254



1. 包含層-265



2. 包含層-265



3. 包含層-266



4. 包含層-271



5. 包含層-272



6. 包含層-280



7. 包含層-281



8. 包含層-281

大 友 府 内 4

～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～

2002年3月

発 行 大 分 市 教 育 委 員 会

印 刷 株 式 会 社 陽 明 社